鶴来北部遺跡群調査報告 I

県営圃場整備鶴来地区埋蔵文化財発掘報告

1995年 3 月

石川県立埋蔵文化財センター

鶴来北部遺跡群調査報告 I

県営圃場整備鶴来地区埋蔵文化財発掘報告

1995年 3 月

石川県立埋蔵文化財センター

凡　　例

・本書は県営圃場整備事業鶴来地区の荒屋・道法寺・知気寺地内の遺跡発掘報告である。

・各報告の担当は以下のとおりである。

「荒屋遺跡発掘報告」　小嶋芳孝

「道法寺南遺跡発掘報告」　小嶋芳孝

「道法寺遺跡発掘報告」　松山和彦

「知気寺八反田遺跡発掘報告」　冨田和気夫

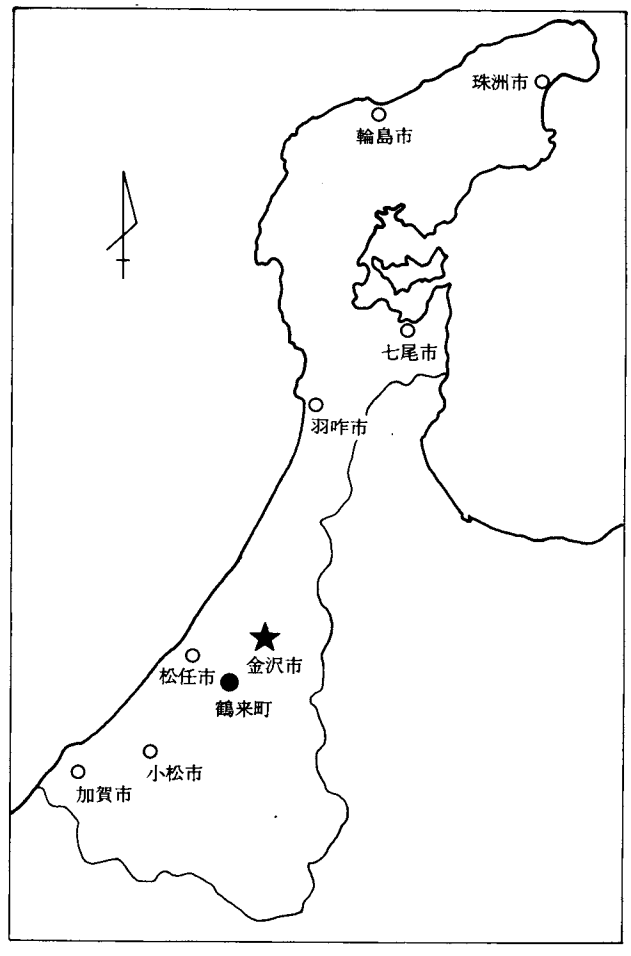
・各遺跡の遺物整理は、㈳石川県埋蔵文化財保存協会に依託して実施した。

・本書の図版番号などは、各遺跡ごとに１番からつけている。

・本報告で扱った遺構写真や実測図・遺物などは、石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

1　遺跡の位置と環境（第１～２図）

本書で報告する鶴来町道法寺・荒屋周辺の遺跡群は、標高2702メートルの白山に源を発する手取川の右岸に広く形成された扇状地の扇頂部付近に立地している。鶴来町は金沢市から約20キロ南の町で、ベッドタウンとして発展している。鶴来は手取川の豊富な覆流水を背景とする平安時代後期からの酒所で、新猿楽記などには、加賀の菊酒として紹介されている。現在でも町の周辺では、おいしい酒を醸造する蔵元が多くある。また、鶴来町は古代から白山信仰の拠点として重要な役割を果たしており、町南部の段丘上にある白山比咩神社は、永禄年間には現在の北陸鉄道一宮駅西側の手取川に面した下位段丘に鎮座していたと伝えられている。

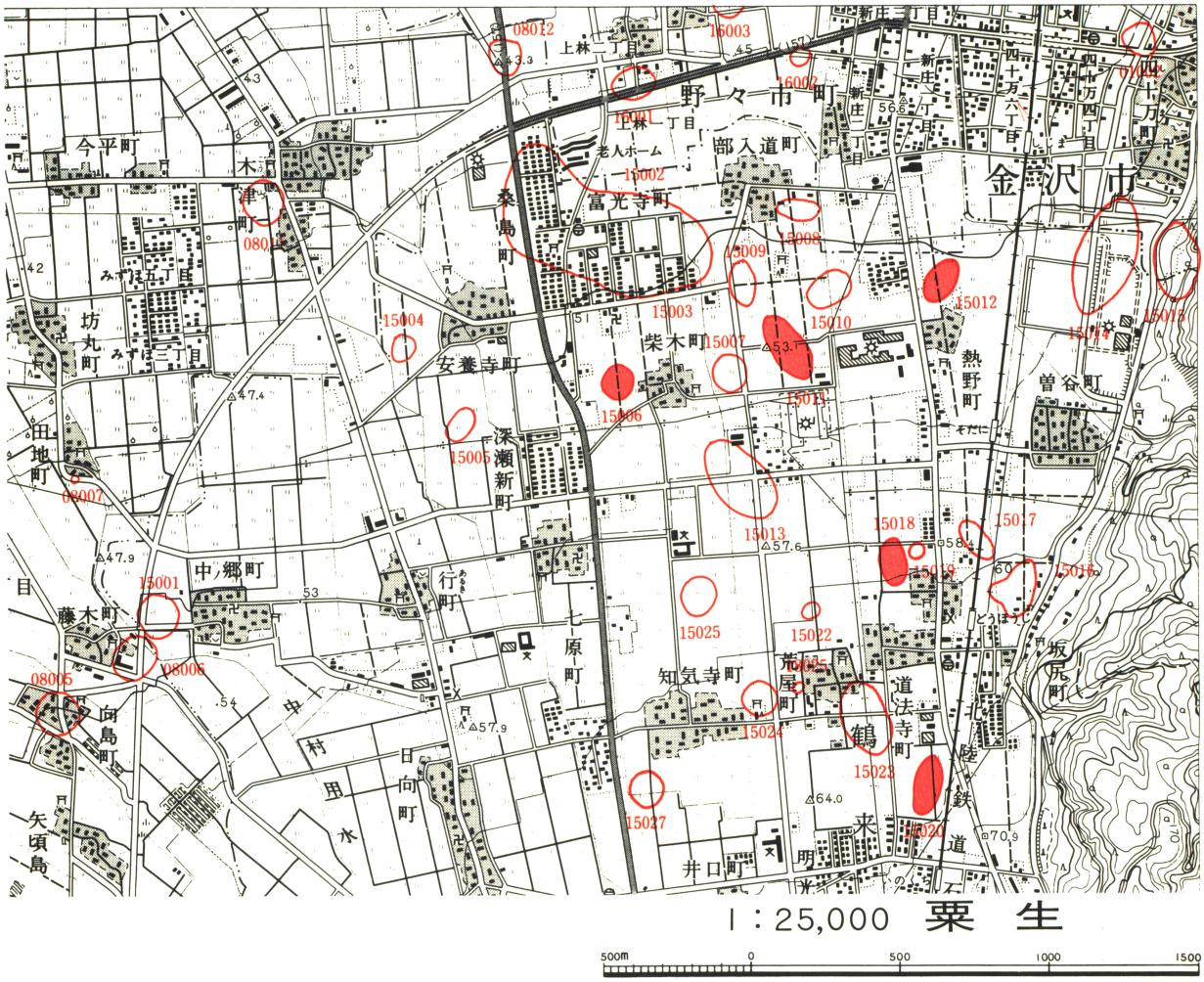


第１図　鶴来町の位置

遺跡付近の標高は、約62メートルである。遺跡は手取扇状地が、標高565メートルの鞍ガ岳の山麓に接するあたりに立地している。

遺跡分布図に示すように、鶴来町と松任市を結ぶ国道159号線の東に遺跡は集中しており、国道から西の扇央部には遺跡の分布は少ない。鶴来町井口地内では縄文晩期の土器が出土しており、また、鶴来町柴木地区や安養寺地区では、弥生前期の柴山出村期の土器が出土している。最近の野々市町新庄から粟田周辺の調査によって、手取扇状地は南北に延びる微高地と鞍部が並列する地形で、微高地の上に集落遺跡が南北方向に並んでいることが明らかになっている。微高地間の谷状地形が、初期の水田経営の舞台になっていたものと思われる。今回報告する荒屋遺跡では弥生末の住居跡を検出したが、扇状地では最も扇頂部に近い集落跡である。古墳時代では、野々市町末松地内に５世紀代の集落が検出されている。７世紀前半には松任市田地や野々市町新庄地内で河原石積みの横穴式石室墓が造営されている。これらの石室墓は単独で検出されており、周辺の特定個人ないし家族が埋葬されたものと思われる。７世紀後半になって野々市町末松地内で寺院（末松廃寺）が創建され、手取扇状地は古代国家の形成期にあたって開発が急速に進んだようである。奈良時代には扇状地一帯は越前国加賀郡の管轄下にあり、弘仁14（823）年に加賀国が立国されると、荒屋周辺は加賀国石川郡に編入されている。道法寺遺跡で検出した掘立柱建物群は、石川郡に編入された後の９世紀後半の造営である。扇状地で最も遺跡が多くなるのは、荒屋遺跡のSK02に代表される10～11世紀である。林氏の拠点となった、鶴来町安養寺周辺では安養寺遺跡や柴木遺跡など10世紀以降の掘立柱建物群が多数検出され、拝師郷の中心と考えられている。

今回報告する荒屋遺跡・道法寺南遺跡・道法寺遺跡・知気寺八反田遺跡のうち、荒屋遺跡では弥生時代後期後半の住居跡と平安時代中期の土坑を検出している。また、道法寺南遺跡では平安時代前期の掘立柱建物群を検出しており、道法寺遺跡では奈良時代の遺構、知気寺八反田遺跡では平安時代中期の遺構を各々検出している。

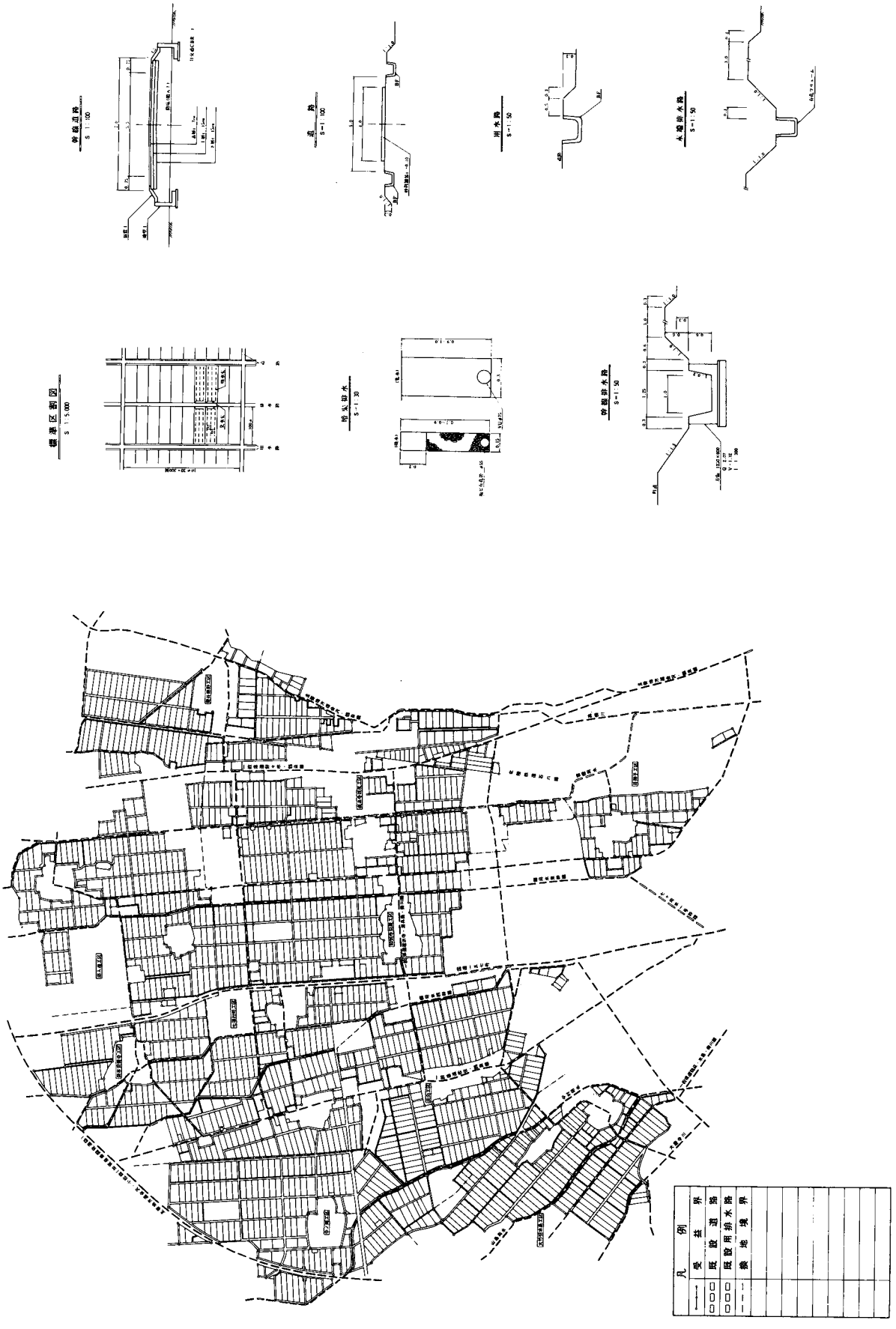


第２図　鶴来町北部の主要遺跡分布図

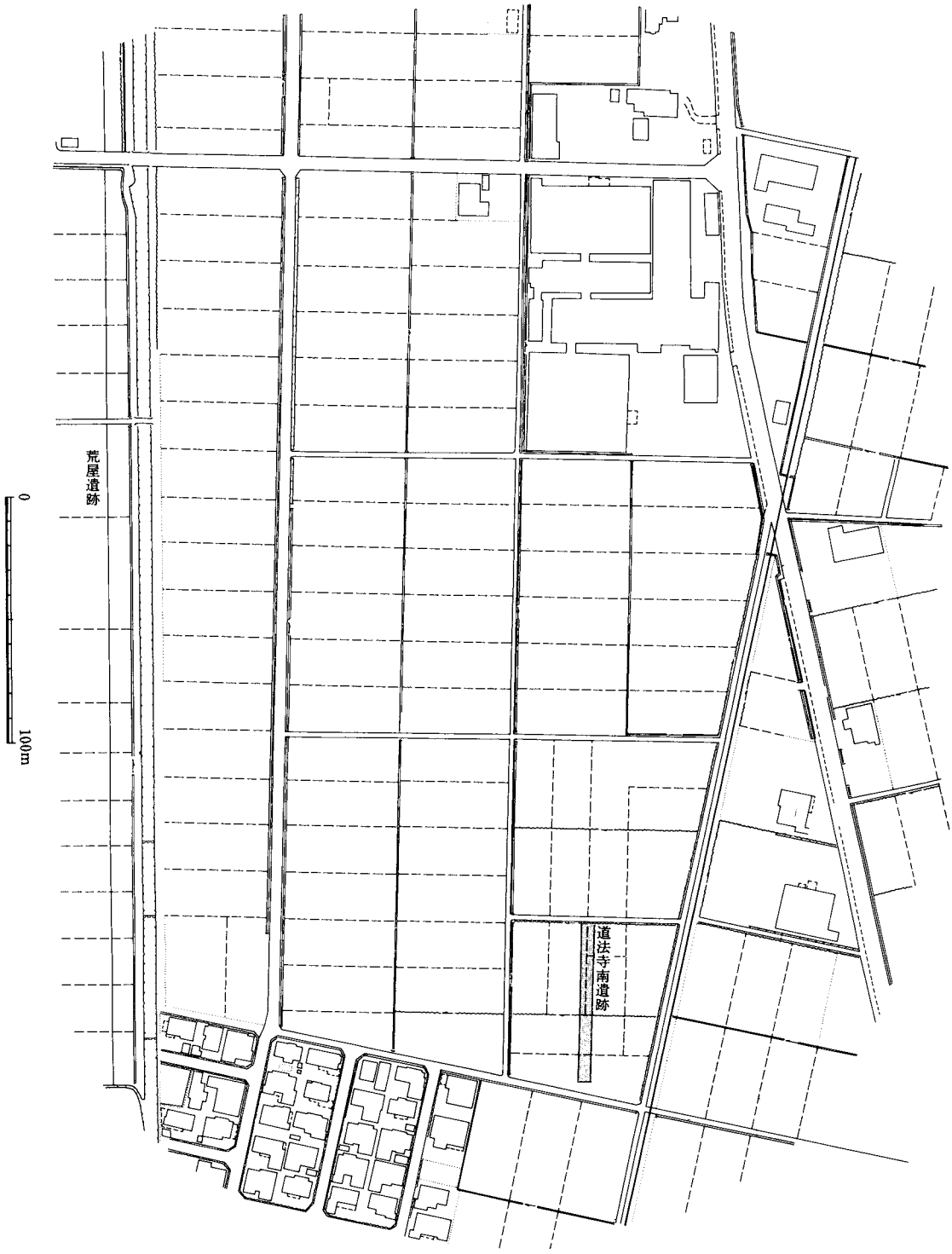
番号	遺　跡　名	所　在　地	時　　代
01002	四十万Ｂ遺跡	金沢市四十万町	平安・中世
08005	林四郎左エ門館跡	松任市向島町	中世？
08006	園ノ道観館跡	松任市藤木町	中世？
08007	田地古墳	松任市田地町	古墳
15001	来同本覚寺跡	鶴来町中ノ郷	中世
15002	柴木遺跡	鶴来町柴木	平安後期
15003	安養寺遺跡	鶴来町柴木	平安前～中期
15004	安養寺Ｂ遺跡	鶴来町安養寺	平安
15005	安養寺Ｃ遺跡	鶴来町安養寺	平安
15006	柴木Ｄ遺跡	鶴来町柴木	平安・中世
15007	柴木東遺跡	鶴来町柴木	奈良・平安
15008	部入道Ａ遺跡	鶴来町部入道	奈良・平安
15009	部入道Ｂ遺跡	鶴来町部入道	奈良・平安
15010	部入道Ｃ遺跡	鶴来町部入道・熱野	奈良・平安
15011	新荒屋遺跡	鶴来町新荒屋	奈良・平安
15012	熱野遺跡	鶴来町熱野	奈良・平安
15013	柴木南遺跡	鶴来町知気寺・柴木・部入道	平安前期
15014	四十万南遺跡	鶴来町曽谷・金沢市四十万町	奈良～中世
15015	四十万ヒッカジ遺跡	鶴来町曽谷・金沢市四十万町	奈良・平安
15016	坂尻遺跡	鶴来町坂尻	奈良・平安
15017	道法寺Ｂ遺跡	鶴来町道法寺	奈良
15018	道法寺遺跡	鶴来町道法寺	平安
15019	道法寺Ｃ遺跡	鶴来町道法寺	平安
15020	道法寺南遺跡	鶴来町道法寺	平安前期
15021	荒屋遺跡	鶴来町荒屋	弥生～古墳
15022	荒屋Ｂ遺跡	鶴来町荒屋	弥生
15023	荒屋集落遺跡	鶴来町荒屋	平安
15024	和気寺遺跡	鶴来町和気寺	平安
15025	和気寺八反田遺跡	鶴来町和気寺	平安
15026	井口遺跡	鶴来町井口	縄文晩期
15027	井口Ｂ遺跡	鶴来町井口	不祥

表　遺跡地名表

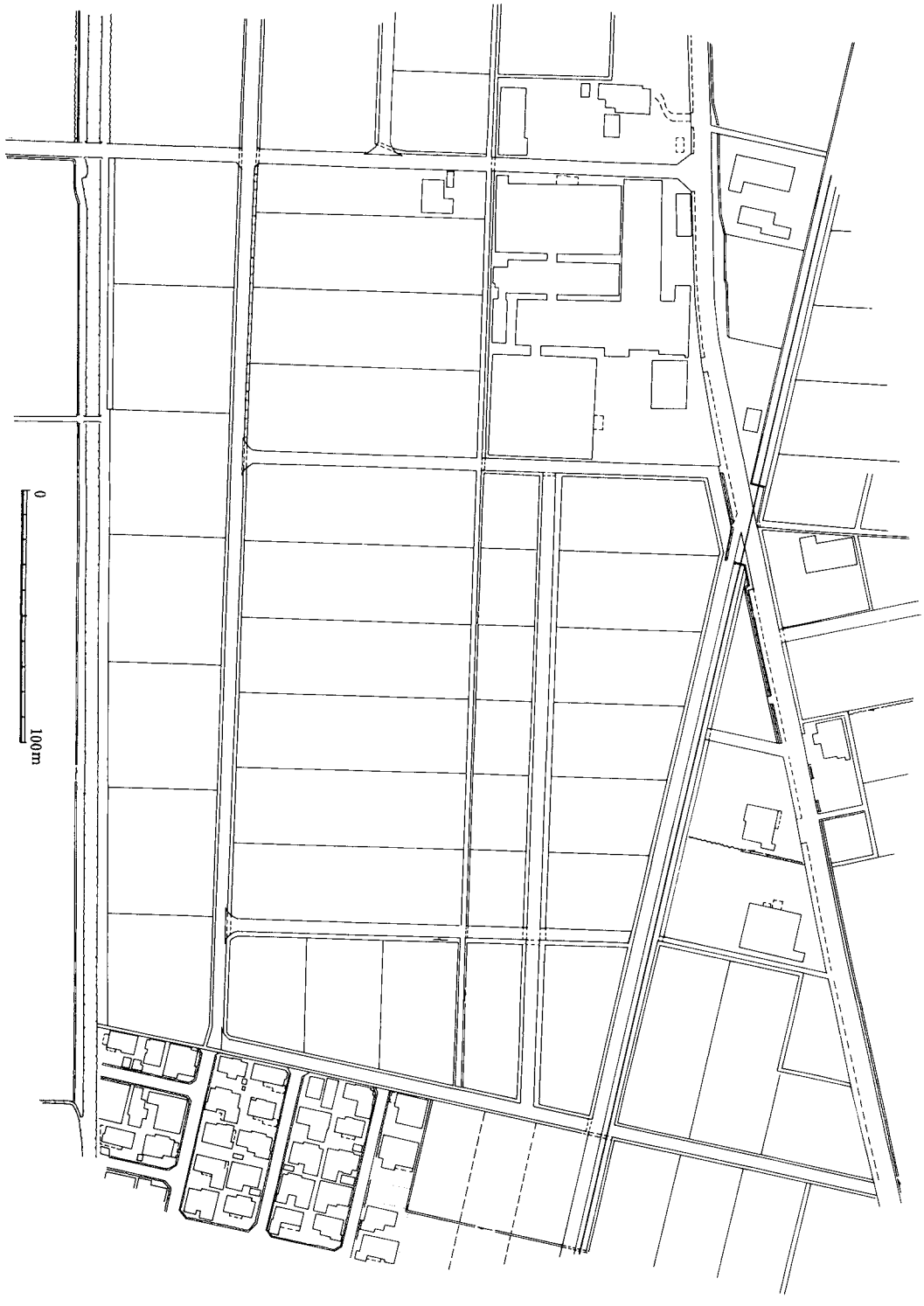
荒屋遺跡発掘報告



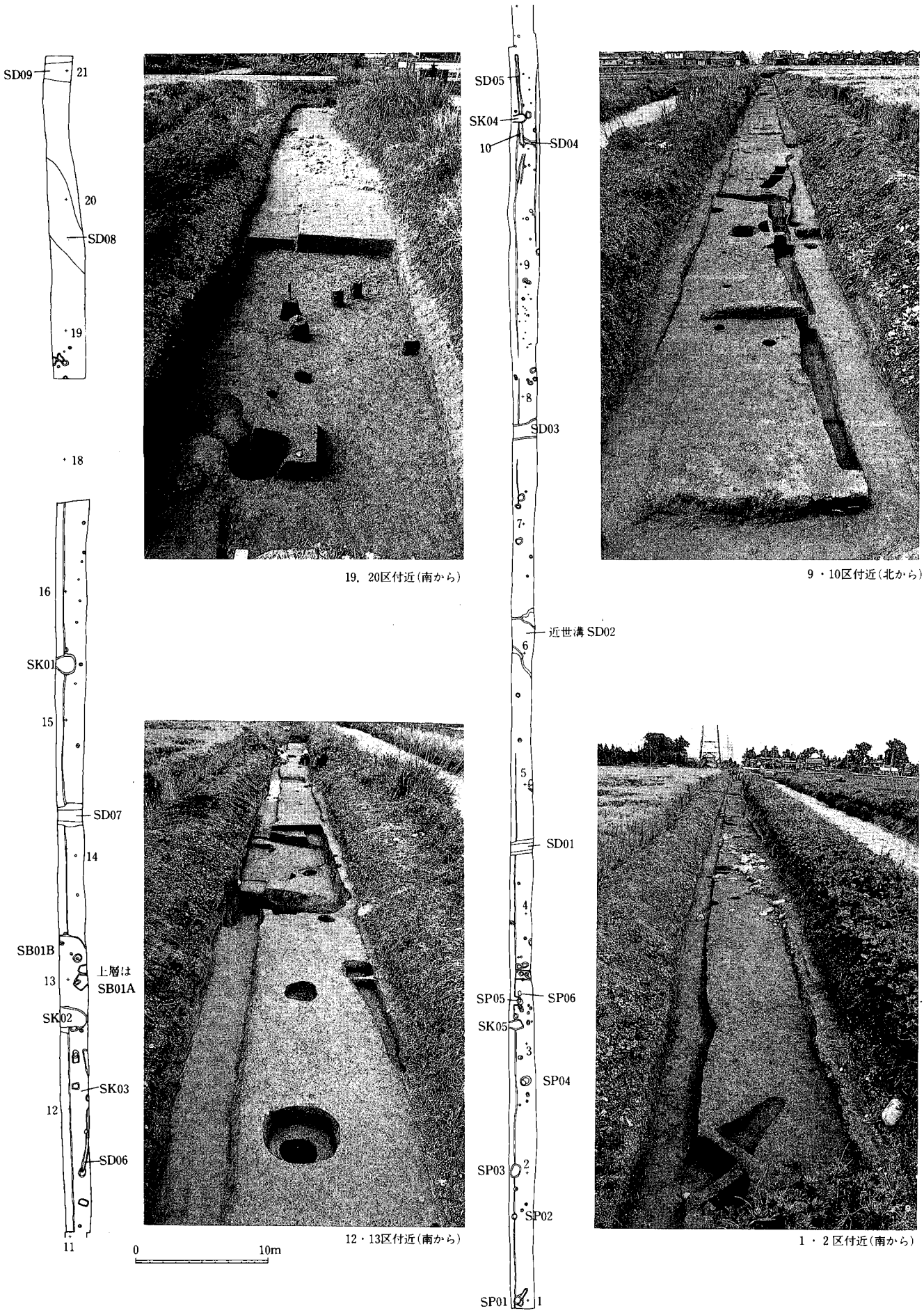
第１図　県営圃場整備事業　鶴来地区計画一般図



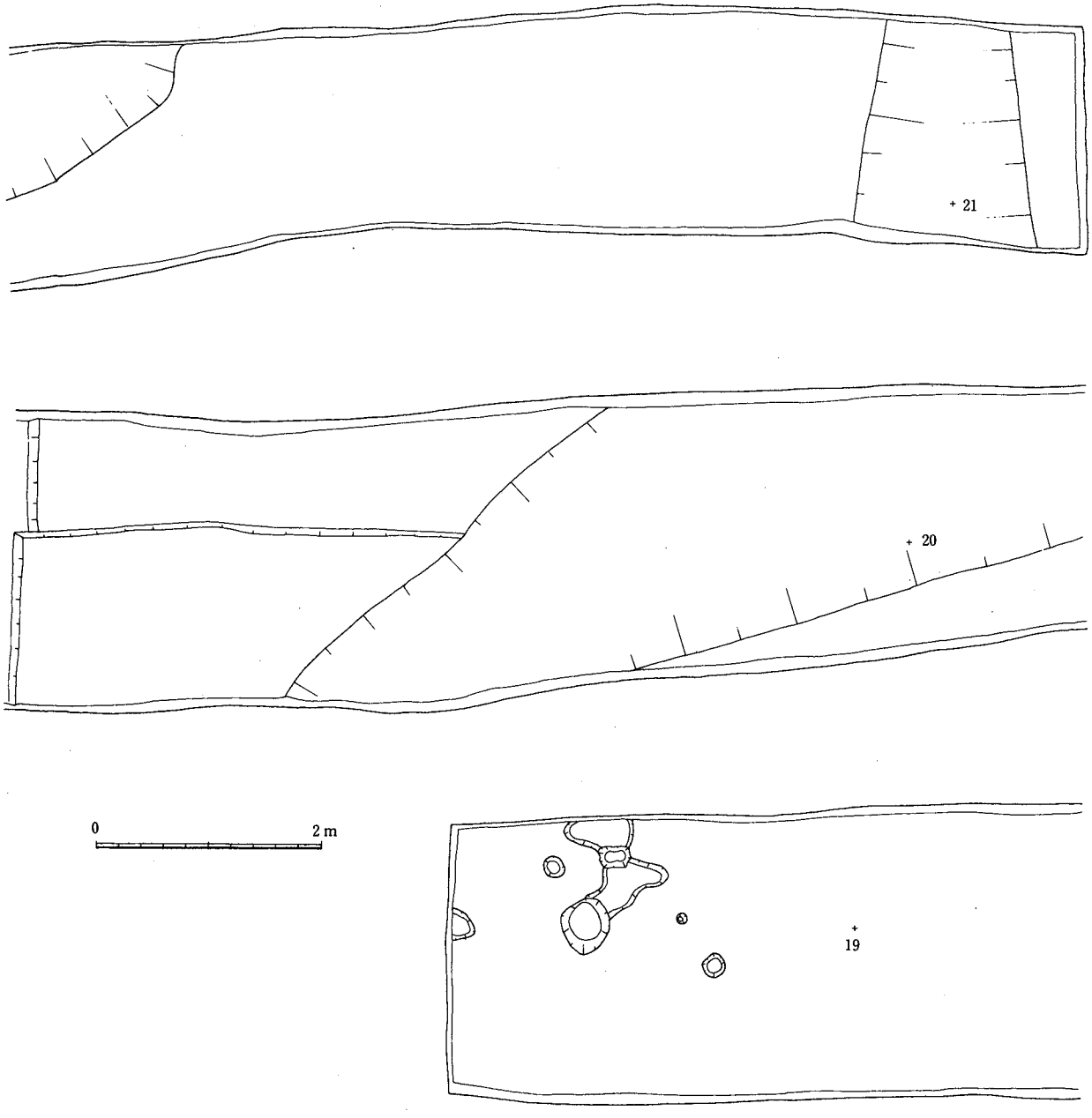
第２図　圃場整備施工前の荒屋遺跡と道法寺南遺跡



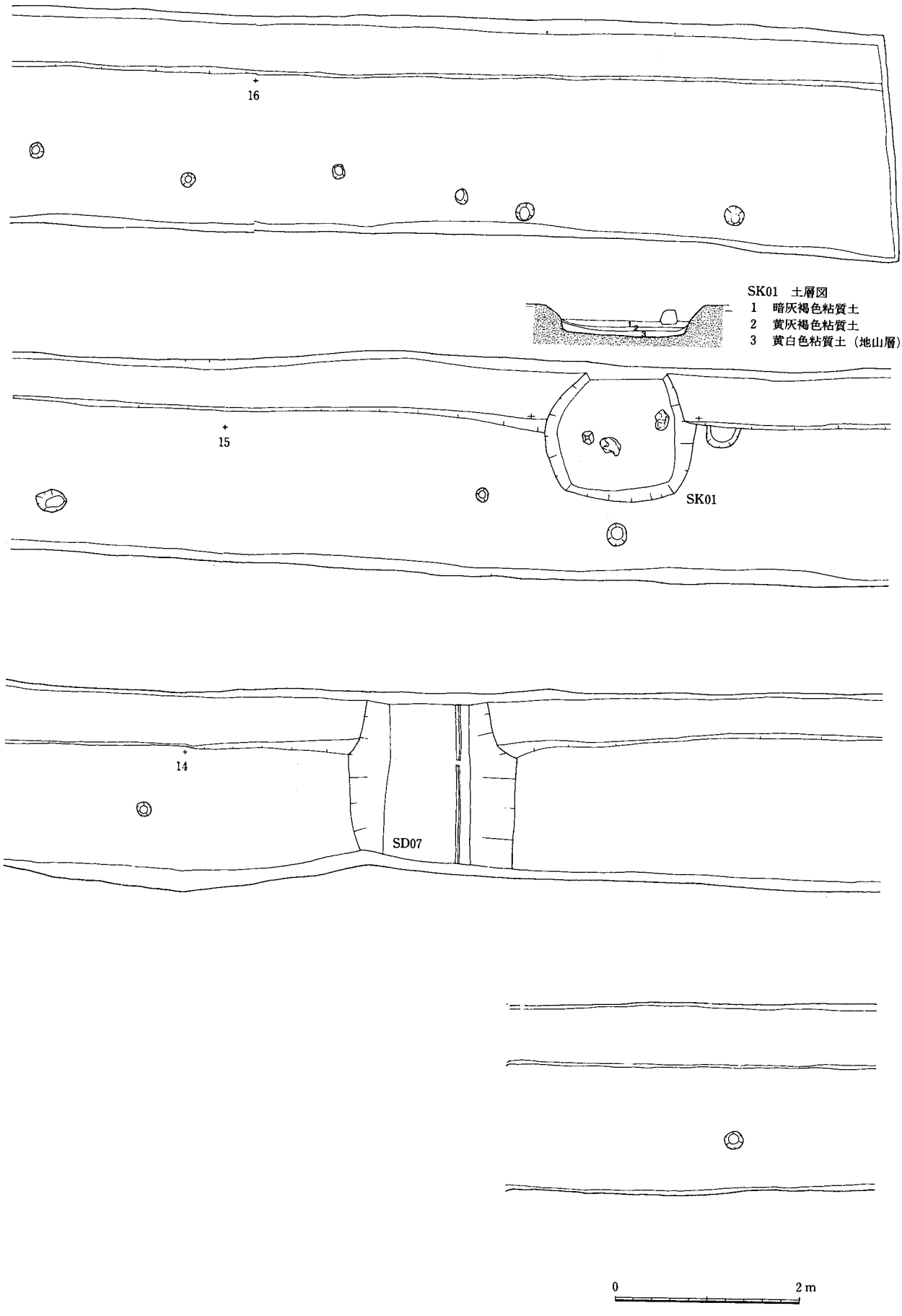
第３図　圃場整備施工後の荒屋遺跡と道法寺南遺跡



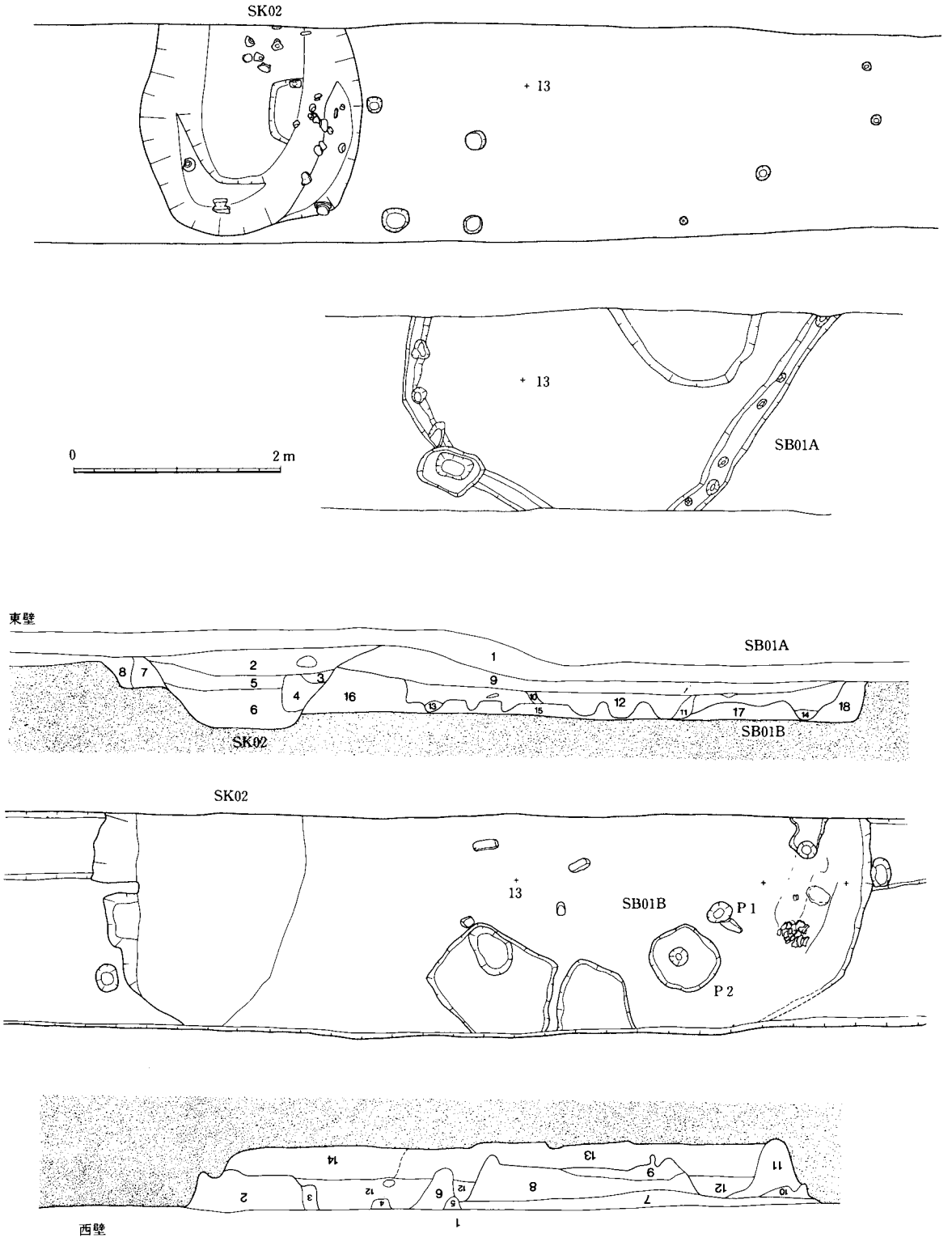
第4図　荒屋遺跡の遺構配置



第５図　荒屋遺跡遺構実測図（21～19区）



第６図　荒屋遺跡遺構実測図（16～14区）



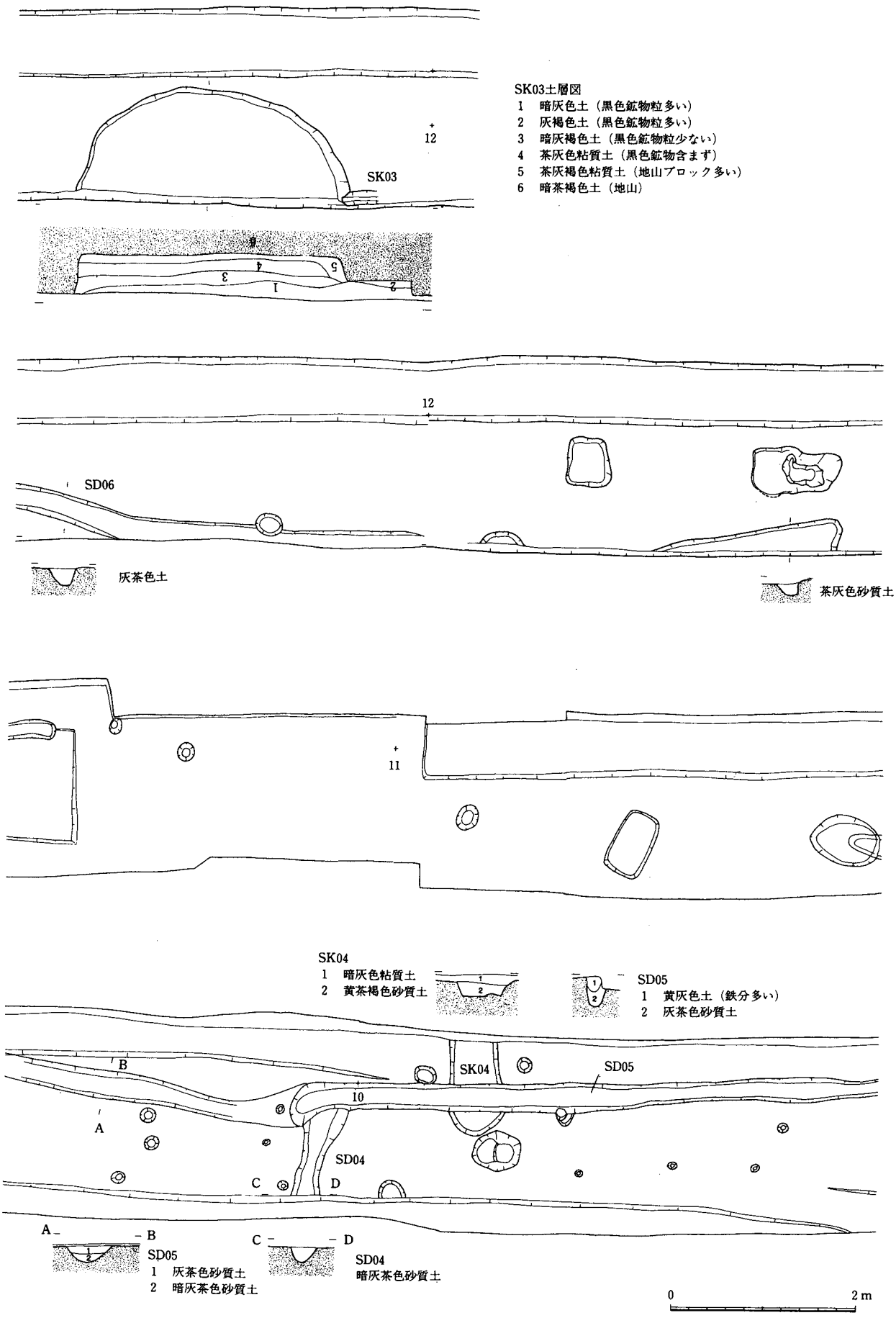
1号竪穴西壁土層図

1 耕作土
2 暗灰色粘質土（土器・炭化物含む）
3 灰褐色粘砂質土
4 灰色粘砂質土（炭化物含む）
5 明茶灰白色粘質土
6 茶灰白色粘質土
7 茶灰色粘質土
8 茶灰褐色粘質土
9 暗茶灰色粘質土
10 灰茶色粘質土（地山ブロック）
11 灰茶色粘質土（地山ブロック）
12 茶灰色粘質土（地山ブロック多い）
13 茶灰褐色粘質土（汚れた地山質土）
14 灰褐色粘土
15 灰黄色粘質土（貼床）
16 灰黄色粘質土（貼床）
17 明茶灰色粘質土（炭化物含む）
18 茶灰褐色粘質土
19 明灰黄色砂質土（地山土）

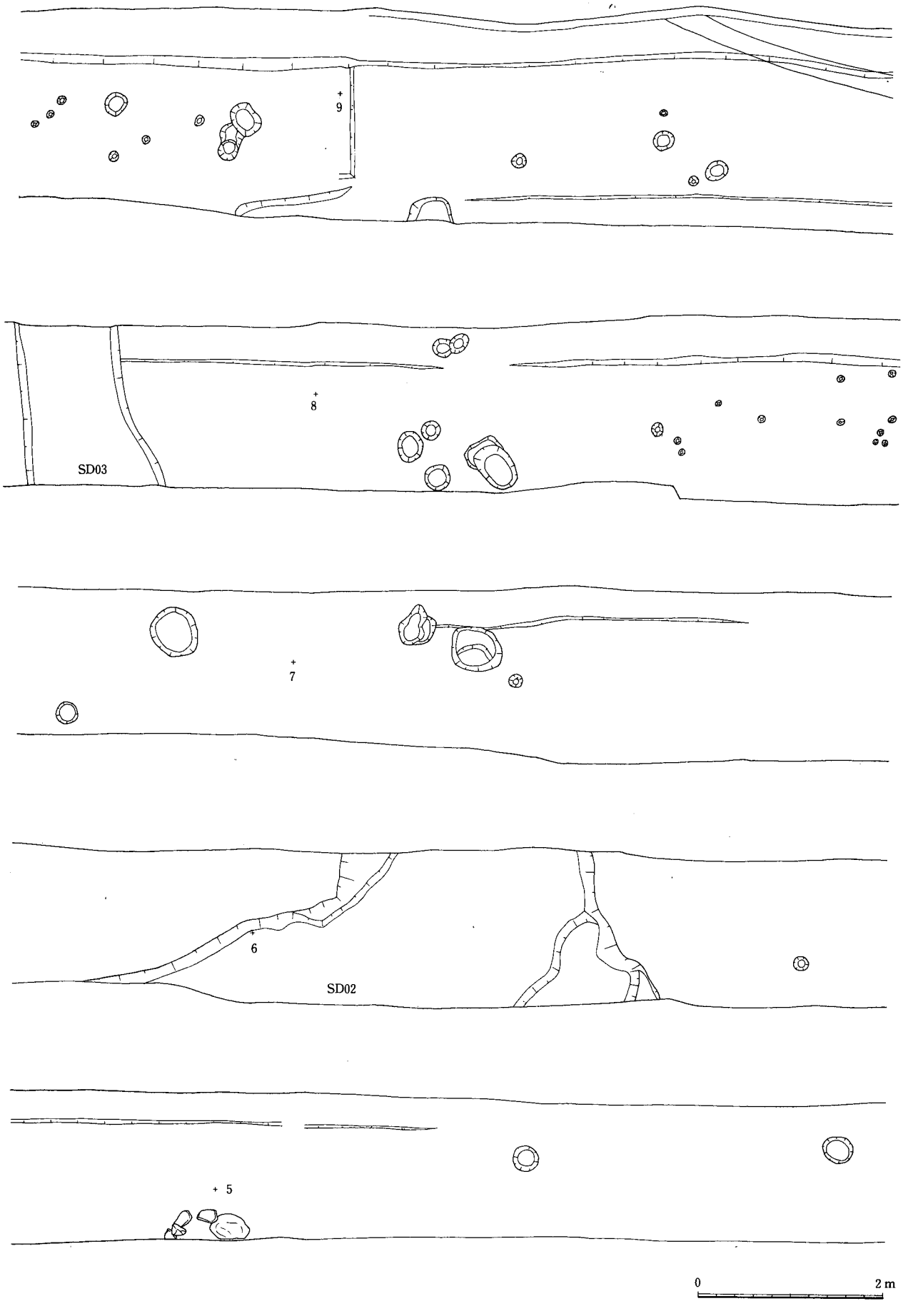
1号竪穴東壁土層図

1 堤防
2 暗茶灰色粘質土（西壁2層）
3 茶灰色粘質土
4 暗灰褐色土
5 暗灰褐色土
6 暗茶褐色粘質土
7 茶灰褐色粘質土（西壁9層）
8 灰茶褐色土
9 茶灰褐色粘質土（地山ブロック・土器片含む、西壁12層）
10 茶灰色土
11 やや明るい茶灰色土
12 暗茶灰色土（黒色鉱物粒多い）
13 茶灰色土（黒色鉱物粒多い、西壁15層）
14 黄灰色粘質土（黒色鉱物粒含まない）
15 明灰黄色砂質土（地山土）

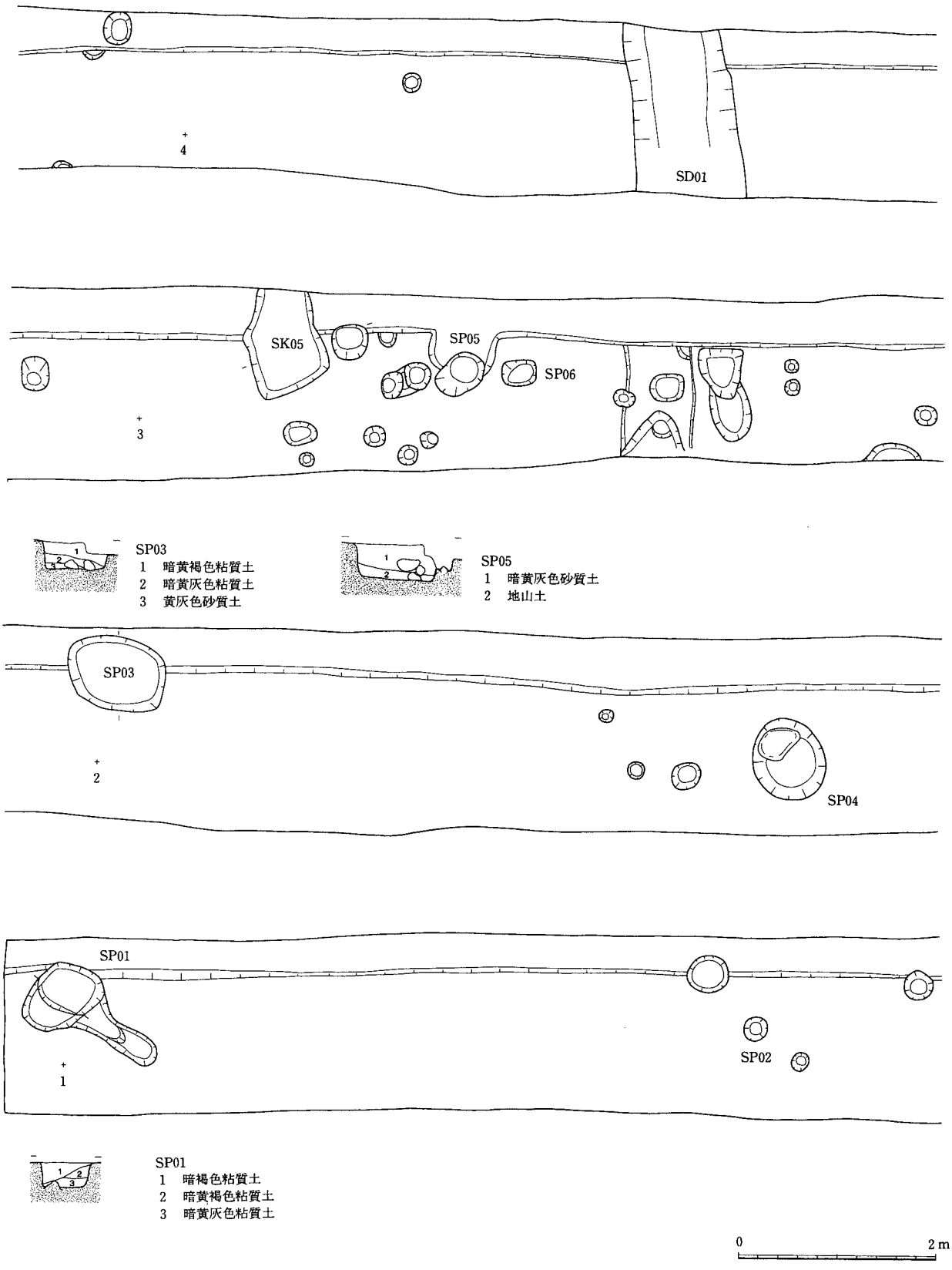
第7図　荒屋遺跡遺構実測図（13区・SB01A・B）



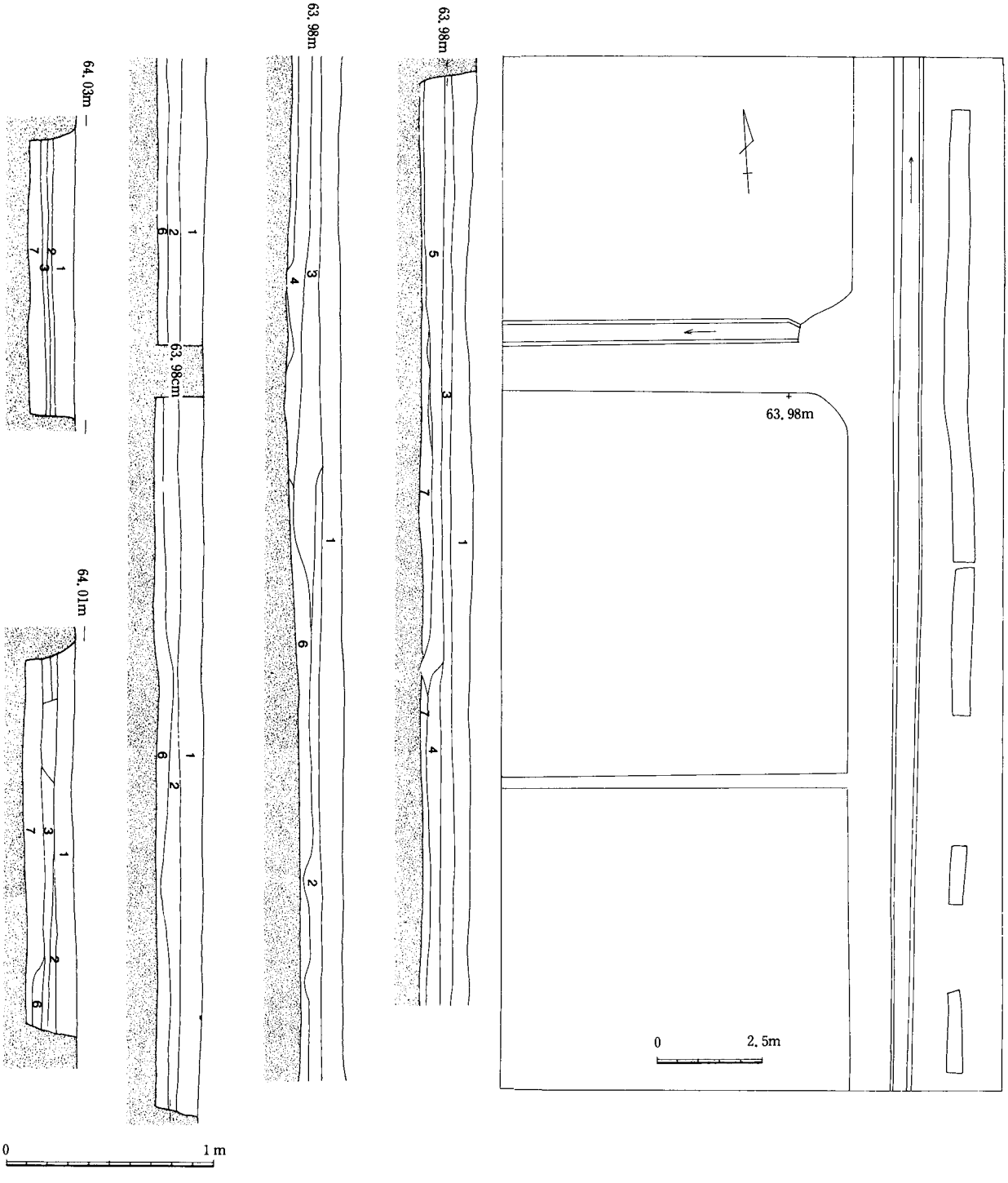
第8図　荒屋遺跡遺構実測図（12～10区）



第９図　荒屋遺跡遺構実測図（９～５区）



第10図　荒屋遺跡遺構実測図（4～1区）



1：耕作土
2：黄褐色粘質土（客土）
3：暗灰色粘質土
4：暗黄灰色弱粘質土
5：暗赤褐色粘質土（土師質土器包含）
7：黄褐色土（地山）

第11図　荒屋遺跡西調査区実測図

2　荒屋調査の経緯（第１～３図）

本報告は、県営圃場整備鶴来地区荒屋工区の施工に伴う緊急調査の報告である。
鶴来地区は第３図に示したように、鶴来町北部の国道249号線周辺で実施され、調査は排水路の新設工事が行われる荒屋遺跡、道路の新設工事が行われる道法寺南遺跡など５遺跡の緊急調査を実施した。調査前に、事業範囲の遺跡分布調査を行って遺跡の広がりと深さを確定し、その結果に基づいて松任土地改良事務所と工事設計等の協議を行った。その結果、荒屋遺跡については、排水路と切り土になる地区の調査を行うこととなり、1985年４月22日から５月31日にかけて、小嶋が横山貴広と市堀元一の支援を受けて発掘調査を担当した。調査面積は約500平方メートルである。

3　荒屋遺跡の主な遺構（第４～11図）

荒屋遺跡は、扇状地に南北に延びる微高地の上に形成された遺跡と思われる。今回の調査区は七カ用水に沿って、幅２メートルで設定した。北端から10メートル毎に杭を打って、南から１区～21区までの調査区を設定した。途中、北陸電力の高圧線鉄塔があるために、17区～18区は調査できなかった。検出した主な遺構は、小穴と溝、土壙・竪穴住居跡である。調査区の南半部では溝や小穴が多く、中央部で土壙・竪穴住居跡を検出している。北半部は、礫を大量に包含した旧河道を検出している。調査区の東三分の二は東側に流れる用水の土堤下につくられた農道にあたっており、遺構の残りは良かったが、西の三分の一は水田耕作によって幅約50cmで削平を受けていた。

（１）　小穴

SP01　60×80cm・深さ25cmの方形の穴で、中から土器片を検出している。黄褐色系の覆土を持った土壙を、暗褐色系の覆土を持つ土壙が切っている。

SP02　直径25cm・深さ31cmの小穴で、中から内黒土師碗の破片が出土している。

SP03　100×75cm・深さ25cmの略方形を呈し、覆土は上から暗黄褐色粘質土・暗黄灰色粘質土・黄灰色砂質土が堆積していた。覆土から土師器のロクロ甕下半部の破片が出土している。

SP04　径75×90cm・深さ25cmの、円形土壙。暗黄灰色の覆土から、須恵器坏蓋・土師碗・弥生後期の器台などの破片が出土している。

SP05　西半分が削平されているが、径80cm・深さ15cmの小穴。覆土から、須恵器坏蓋の鈕・土師碗・製塩土器片などが出土している。

SP06　径35×45cm・深さ14cmの楕円形小穴。土師碗と製塩土器が出土している。

（２）　溝状遺構

SD01　幅100cm・深さ30cmの断面逆台形の溝。東西方向に走り、覆土から近世・近代の陶磁器を出土している。

SD02　幅220cm・深さ35cmの溝状遺構。北から西に蛇行する小川が埋積したものと思われる。覆土から近世・近代の陶磁器が出土しているので、耕地整理以前の小川と思われる。

SD03　東西方向に延びる、幅120cm・深さ45cmの溝。覆土から近世・近代の陶磁器が出土し、耕地整理以前の溝と思われる。

SD04　SD05の北端に切られた、東西方向に延びる溝。幅25cm・深さ20cm。

SD05　幅35cm・深さ25cmで、南北方向に延びる溝状遺構である。鉄分の多い黄灰色土層・灰茶色砂質土層が堆積している。

SD06　幅30cm・深さ15cmで、東に湾曲しながら南北方向に延びる溝状遺構である。灰茶色土層が堆積している。

SD07　幅180cm・深さ50cmで、東西方向に走る断面逆台形の溝。溝底の南側には、土留め用に設定したと思わ

れる板材が置かれていた。覆土から近世・近代の陶磁器が出土しており、耕地整理以前に使用されていた溝と思われる。

SD08　調査区北部の19区で幅260cmにわたって、北東から南西にのびる礫面を検出した。扇状地を形成した手取川の分流が埋積したものと思われるが、礫がびっしりと埋っていて、断割り調査ができなかったので埋没時期は不明である。

SD09　調査区北端で検出した、東西方向に走る溝。幅150cm・深さ50cm以上で、耕地整理以前の水路と思われる。

（3）土坑状遺構

SK01　160×150＋αcm・深さ30cmの略方形の土壙。覆土は上から、暗灰褐色粘質土層・黄灰褐色粘質土層と堆積している。

SK02　幅215cm・深さ80cmの西側に延びる溝ないし土坑状の遺構。耕作土の直下から遺構は検出でき、覆土は上層から土器・炭化物を多量に含む暗灰色粘質土層（2層）、明茶灰白色粘砂質土層（5層）、茶灰白色粘質土層（6層）の順に堆積し、北側壁に沿って灰褐色粘質土層（3層）・炭化物を含む灰色粘砂質土層（4層）の堆積を検出している。

SK03　12グリッドの下層で検出した土壙。SD06が土壙覆土の上層を切っている。土壙は、径55×75cm・深さ22cmの略円形を呈し、覆土は上から黒色鉱物の多い暗灰色土層・黒色鉱物粒の多い灰褐色土層・黒色鉱物粒の少ない暗灰褐色土層・黒色鉱物粒を含まない茶灰色粘質土層・地山ブロックを含む茶灰褐色粘質土層が堆積していた。

SK04　幅70cm・深さ18cmで、西方向に延びる土壙状遺構。暗灰色粘質土・灰茶色砂質土が覆土に入り、ロクロ土師甕や須恵器甕の体部破片が出土している。

SK05　80×110cm以上・深さ55cmの方形土壙。暗黄灰色砂質土が覆土に入っている。

（4）建物遺構（第7・8・12図）

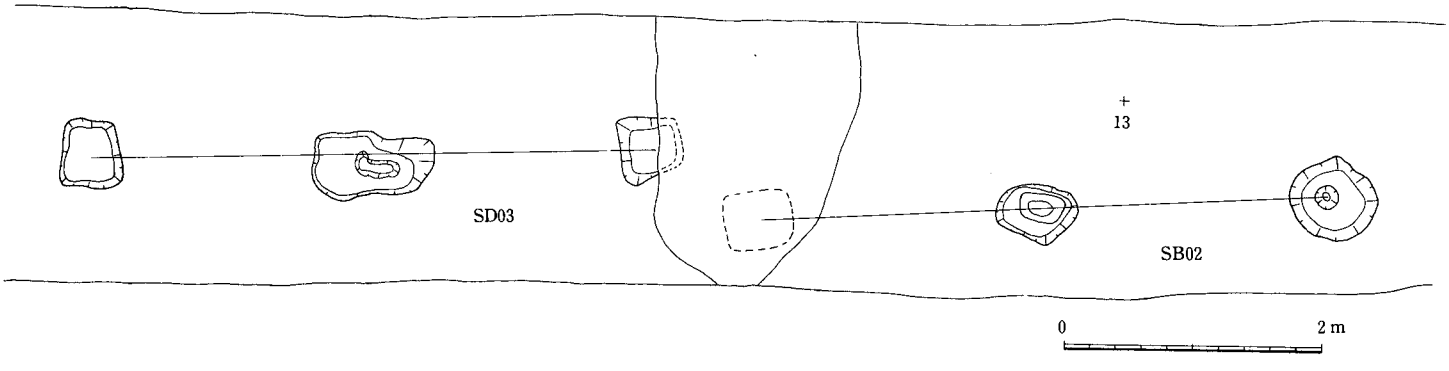
竪穴式建物　SB01は13区を中心に位置し、耕作土の直下から遺構を検出している。SB01Bの埋土中にSB01Aが造営されている。SB01Bは北東コーナーを検出しているが、南側はSK02が掘り込まれているためにプランをつかむことができなかった。南北方向の長さが5．5～7メートルの間の規模と思われる。床面の標高は約61．5メートルで、北壁の下に周溝状の凹みが見られる。床面の西部で検出したP1は径40cm・深さ38cmで、竪穴の主柱穴と思われる。P2は60×60cmの方形の掘り形を持ち、竪穴床面からの深さは35cmを測る。内部から須恵器壷破片を検出しており、平安時代前期の掘立柱建物柱穴と思われる。床面では、西部で鉄鏃柄、北東コーナーの周溝状凹みの上で一個体の甕を検出している。

SB01Aは、01Bの床面に約40cmの厚さで灰黄色粘質土を置き、その中に01Bよりも小型の竪穴を掘り込んでいる。SB01Aは北から約10°東に主軸を振っており、南北方向が3．4メートル・東西方向が3メートル以上の方形を呈している。床面は灰黄色粘質土で貼床となっており、床面の北西部は特に硬くしまっていた。竪穴の壁下には、幅約30cm・深さ約25cmの溝が巡り、溝底には径10cm・深さ5cm前後の小穴を検出している。この竪穴の覆土は、地山ブロックを多く含んだ茶灰色粘質土（12層）で、その上の暗茶灰褐色粘質土（9層）は竪穴埋土の窪みに堆積したものと思われる。SK02は、9層を掘り込んでいる。

掘立柱建物　SB01とSK02周辺で、SB02とSB03の掘立柱建物を二棟検出している。SB02は、SB01の埋土に柱穴が掘り込まれており、床面で二個の柱穴を検出している。南端の柱穴はSK02によって掘削されて、失われている。また中央の柱穴はSB01Aの床面で検出したが、SB01Bの床面まで達していなかった。北端の柱穴はSB01Bの床面で検出している。北端柱穴から、須恵器壷の頸部から口縁の破片を検出している。柱穴の掘り形は一辺が60cm前後の方形で、柱間は約220cmである。身舎の中心が柱列の東西どちらにあるのかは、調査区の幅が狭いので把握することが出来なかった。

SB03は、SD02の南で検出した掘立柱建物で、北端の柱穴はSK02に切られている。柱穴掘り形は60×50cmの方形で、柱間の距離は220cmである。身舎の中心が柱列の東西どちらにあるのかは、調査区の幅が狭いので把握することが出来なかった。

SB01では、南から2本目の柱穴から鉄製品を検出した（第19図2）。全長6.6cm・幅2.1cm・厚さ3mmの半月形を呈する。重量は、10.21gである。この鉄製品に最も近い形状を持つのは火打金であるが、この種の鉄製品は古代末期から一般的には出現するものであり、断定は保留したい。



第12図　荒屋遺跡掘立柱建物実測図（SB02・03）

4　主な遺物（第14図～19図）

（1）　SB01の出土遺物（第14図）

第14図の１～14は、SB01A とした改築後の竪穴住居覆土からの出土で、竪穴土層図の９層から検出した土器である。15～19は SB01B の改築前の竪穴住居跡床面付近で検出した土器である。AB の竪穴から出土した土器はいずれも月影Ⅱ期に属するが、資料の多い甕口縁をみると、９のように大きく外反する口縁が A 出土資料中に見られるのに対し、B 出土資料には外反度が少なく器厚も厚めで、当然のことながら古相を呈している。第19図１は、SB01B の床面で検出した工具の柄と思われる、断面方形の鉄製品である。柄部は断面５×３㎜の方形で、外周に木質が遺存している。体部は４×２㎜の方形で、柄部から徐々に細くなっているようである。現在の重量は、１．82g である。

（2）　SK02の出土資料（第15図～17図）

第15～17図に実測図を掲載した。遺物は、上層の暗灰色粘質土と下層の明茶灰色粘砂質土から出土している。１～37が上層、38～72が下層出土の資料である。

上層では釉のかかっていない灰釉碗が１点、須恵器碗が１点、碗が18点、有台碗が12点、内黒有台碗４点、甕１点の計37点の実測可能土器が出土している。下層では、灰釉碗１点、須恵器双耳瓶１点、平底製塩土器１点、碗14点、有台碗13点、内黒有台碗３点、有台皿１点の計34点が出土している。図化できる資料はほとんど実測しているので、組成の全体傾向は図版に反映していると考えている。

・碗と有台碗　碗と有台碗の比率は、碗が32個体・有台碗が32個体と同数で、有台碗の中には内黒土器が８個体含まれている。碗には内黒土器はまったく含まれず、また、有台碗全体に占める内黒碗の量は25％である。

（碗の検討）　53個体の碗のうち32個体を図化した。底部の形状で、A～D の四類に分類できる。

A 類：底部が突出せず、器壁の立ち上がり部には削りはみられない。２個体で４％である。底径４㎝前後である。

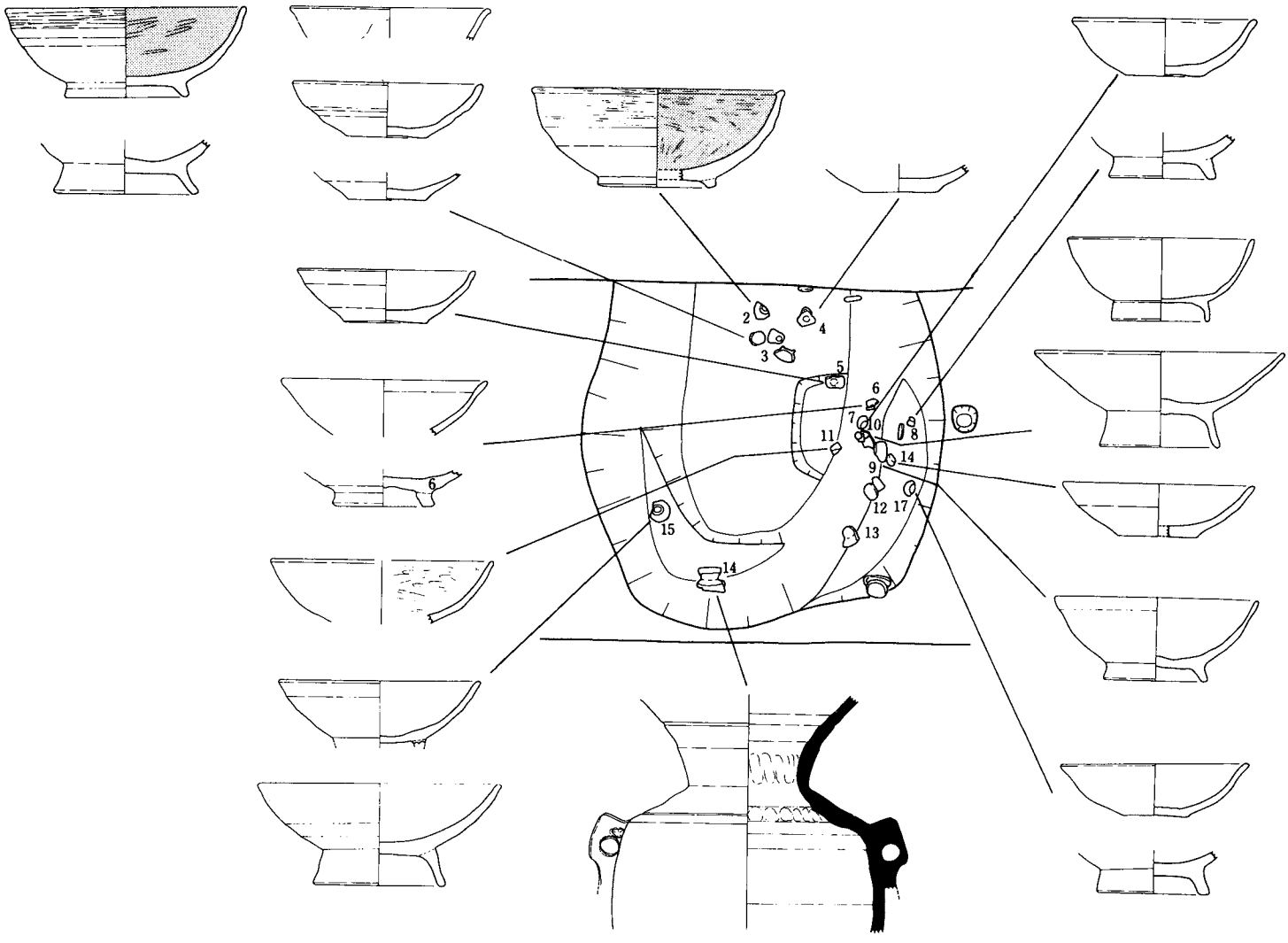
B 類：底部が多少突出し、やや厚みを持っている。11個体で21％である。

C 類：底部が突出し、薄い器壁が大きく外傾する。30個体で56％である。

D 類：底部が突出せず、薄い器壁が底部から丸みを持ちながら大きく外傾する。10個体で19％である。

碗の分類と胎土の相関については、C 類が赤灰茶色土が多く D 類ではザラついた土の多いことが目についたが、A 類と B 類では各種の胎土が見られた。碗の傾向は、９世紀の碗の系譜を引く A 類が少なく、12世紀に盛行する柱状高台の祖形となる C 類が全体の過半を占めている。

（有台碗の検討）有台碗は40個体出土し、そのうち33個体を図化している。内黒土器が有台碗のなかで12個あり、30％を占めている。有台碗は、口径12㎝・器高4.5㎝・高台高１㎝が標準であるが、56のように口径10㎝・器高３㎝・高台高0.9㎝の有台皿や、31・65～68のように、高台高が1.5㎝を越える脚高高台もある。内黒有台碗は、口径15㎝・器高６㎝・高台高0.7㎝が標準的な法量である。58のような内弯する高台は、灰釉の高台を写している可能性がある。



第13図　荒屋遺跡 SK02土器出土位置図

(SK02土坑出土土器の評価)

SK02からは、先述のように53個体以上の土器を検出した。これらの土器の編年的な位置付けについて、検討をしてみたい。土器の組成は、碗と有台碗がほぼ同数で、他に土師甕や須恵器壷・灰釉碗などが含まれている。碗の形態は、9世紀代の器壁たち上がりを削る碗はみられず、底部が突出する型の碗が多い。

灰釉は折戸53号窯に比定できる。また、土師碗の形態は安養寺 pit71や pit91と共通するものがあるが、安養寺遺跡の資料については出土状態について詳細なレポートがなされておらず、単に型式学的な検討がおこなわれているにすぎない。今回の、SK02出土の一括資料は従来の資料の欠を補うことのできる資料である。これらの土器の年代観は、灰釉陶器の型式から10世紀中葉に比定したい。

第19図3は、SK02から出土した鉄製品で、2.5×0.8cm前後で方形の断面を持ち、全長9.8cmでやや弯曲している。重量は59.49g である。用途は不明である。

・その他の遺構出土の土器

第18図には、調査区の各所から出土して土器を掲載した。この内、12は8世紀第Ⅰ四半期に比定できる資料である。14の壷は掘立柱建物の柱穴から出土した資料で、9世紀に比定できる資料である。15～18は、知気寺調査区の包含層から出土した資料で、9世紀前半に比定できる。8は、平底製塩土器の口縁部である。SK02から出土した第18図41の製塩土器と同じ様に、赤褐色で細かい砂粒の多い胎土で、福井県三国町周辺の海岸で採集できる製塩土器の胎土に類似している。この様な胎土の製塩土器は、辰口町岩内遺跡の調査でも検出されており、10世紀中頃の手取扇状地周辺の製塩土器には、能登だけでなく越前北部からも搬入されていることを考慮しなければならないようである。

5　まとめ

今回報告した荒屋遺跡の調査は、要約すると以下のとおりである。

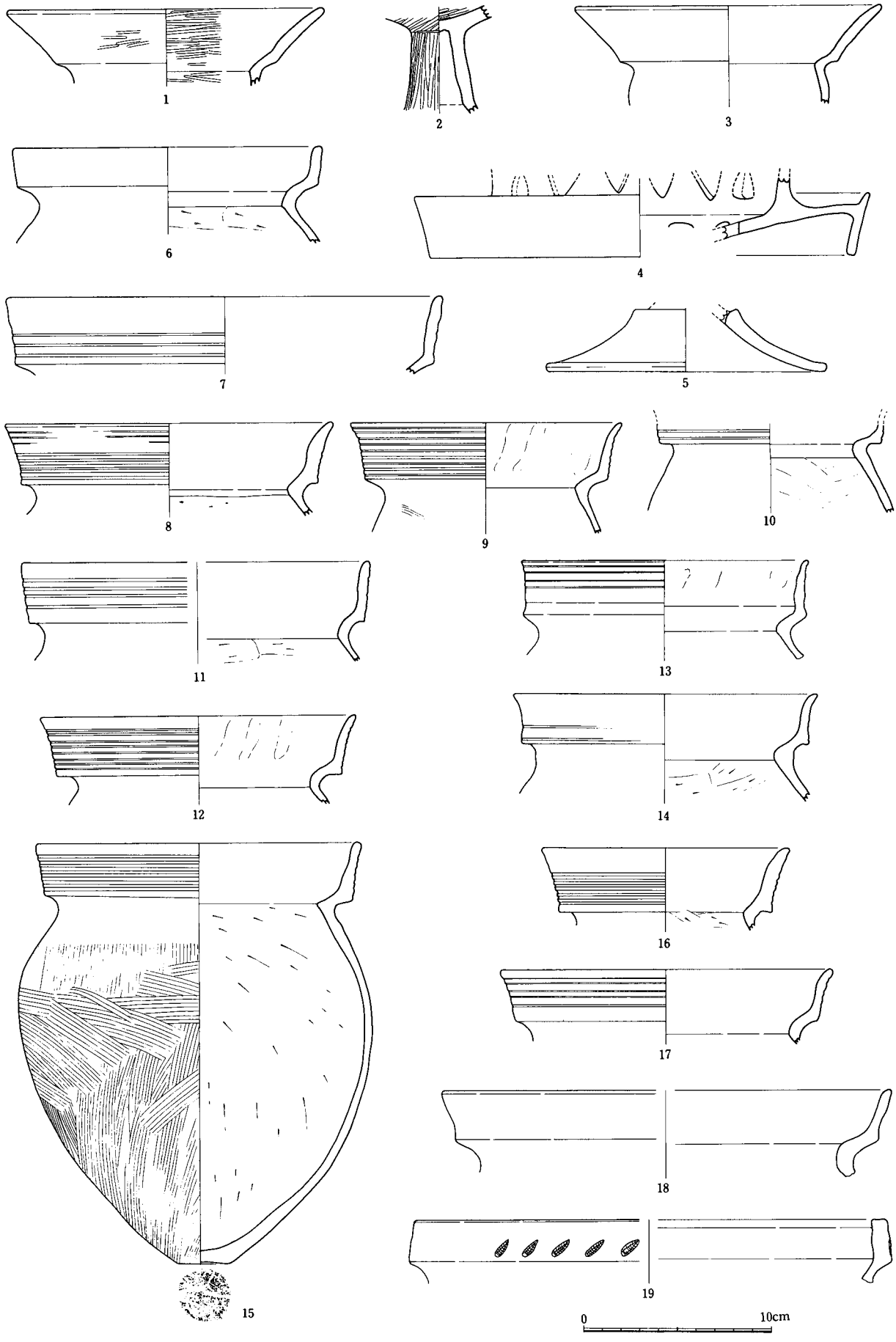
1．弥生後期末の、月影式の竪穴式建物を検出した。この建物は縮小改築されており、最初の建物から月影Ⅰ式、改築後の建物から月影Ⅱ式の土器を検出している。

2．9世紀には二棟以上の掘立柱建物が造営されている。

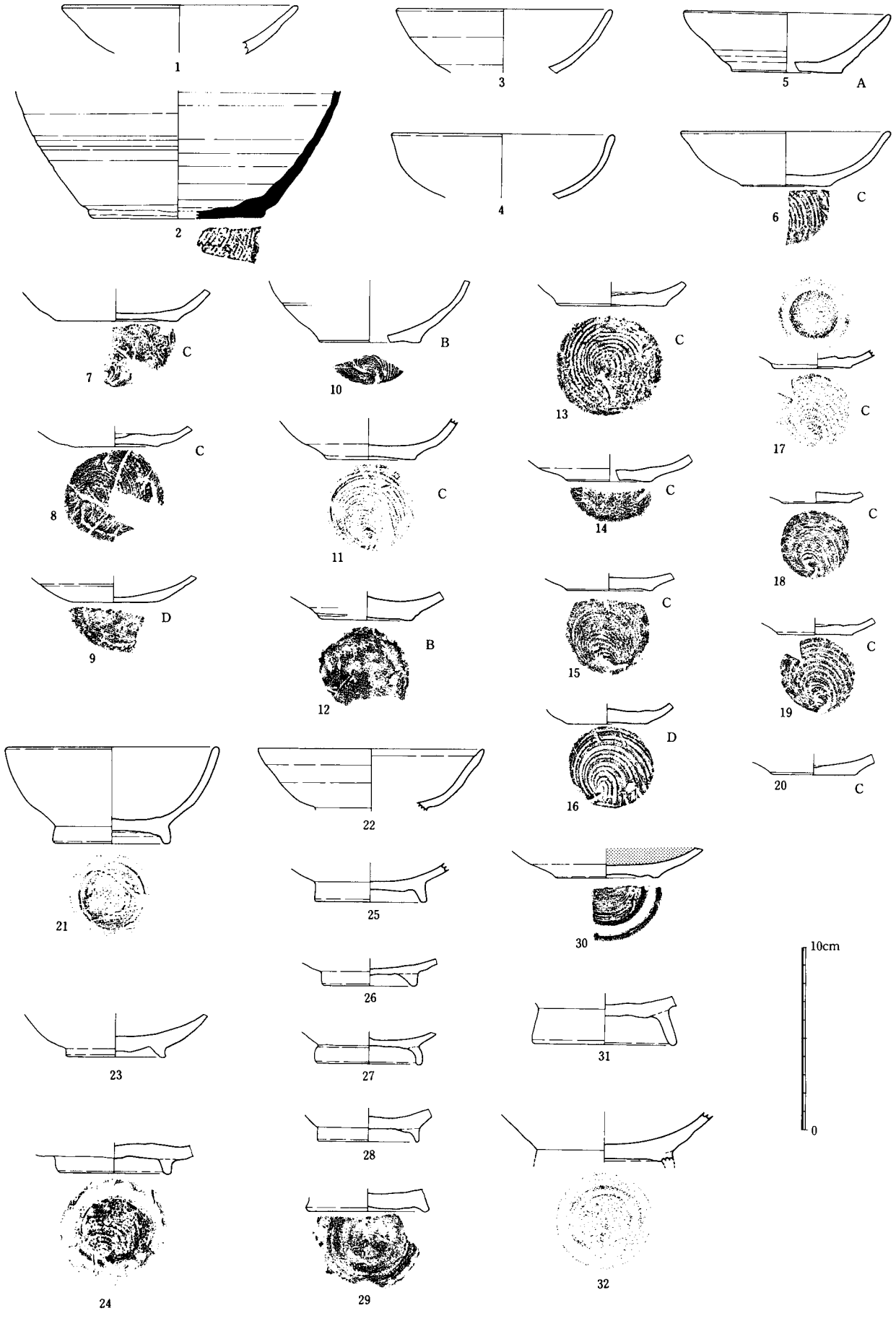
3．10世紀中頃には、SK02に代表される遺構が造営され、周辺に建物群が想定できる。

4．今回の調査では、中世の遺物はほとんど検出しなかった。

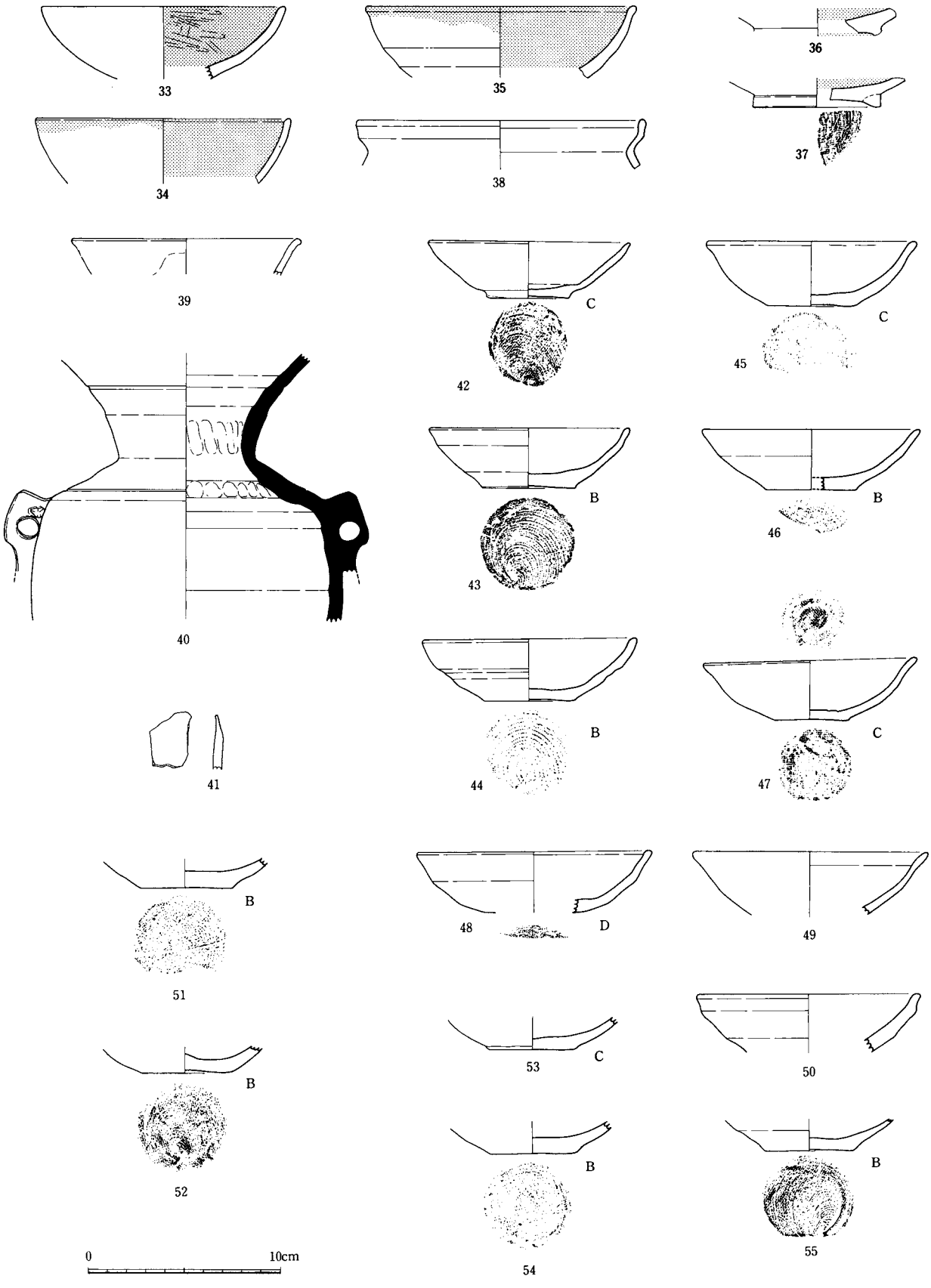
5．知気寺調査区の周辺には、9世紀代の遺構が存在するもようである。



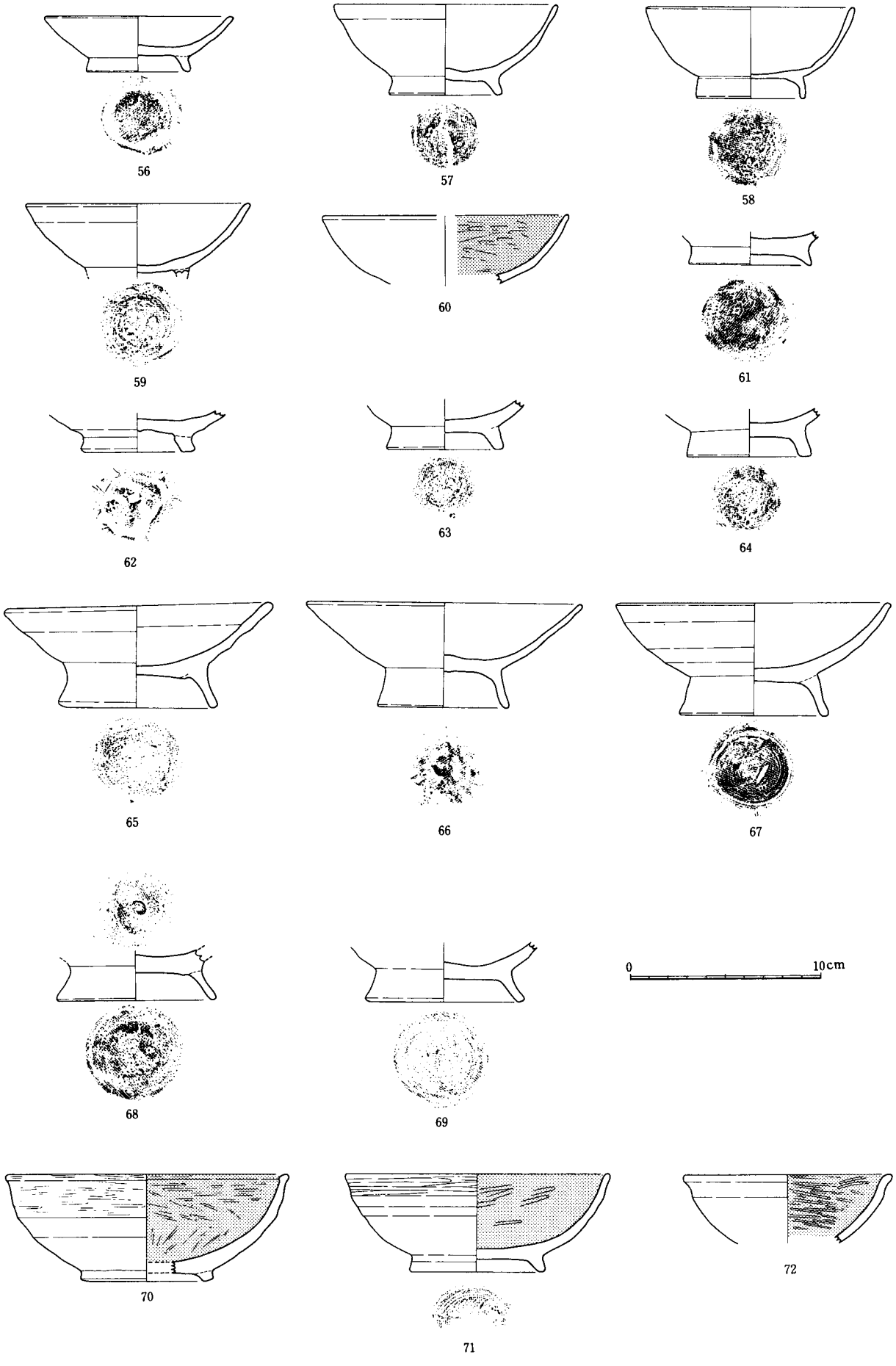
第14図　荒屋遺跡 SB01出土土器実測図（1～14：SB01A　15～19：SB01B）



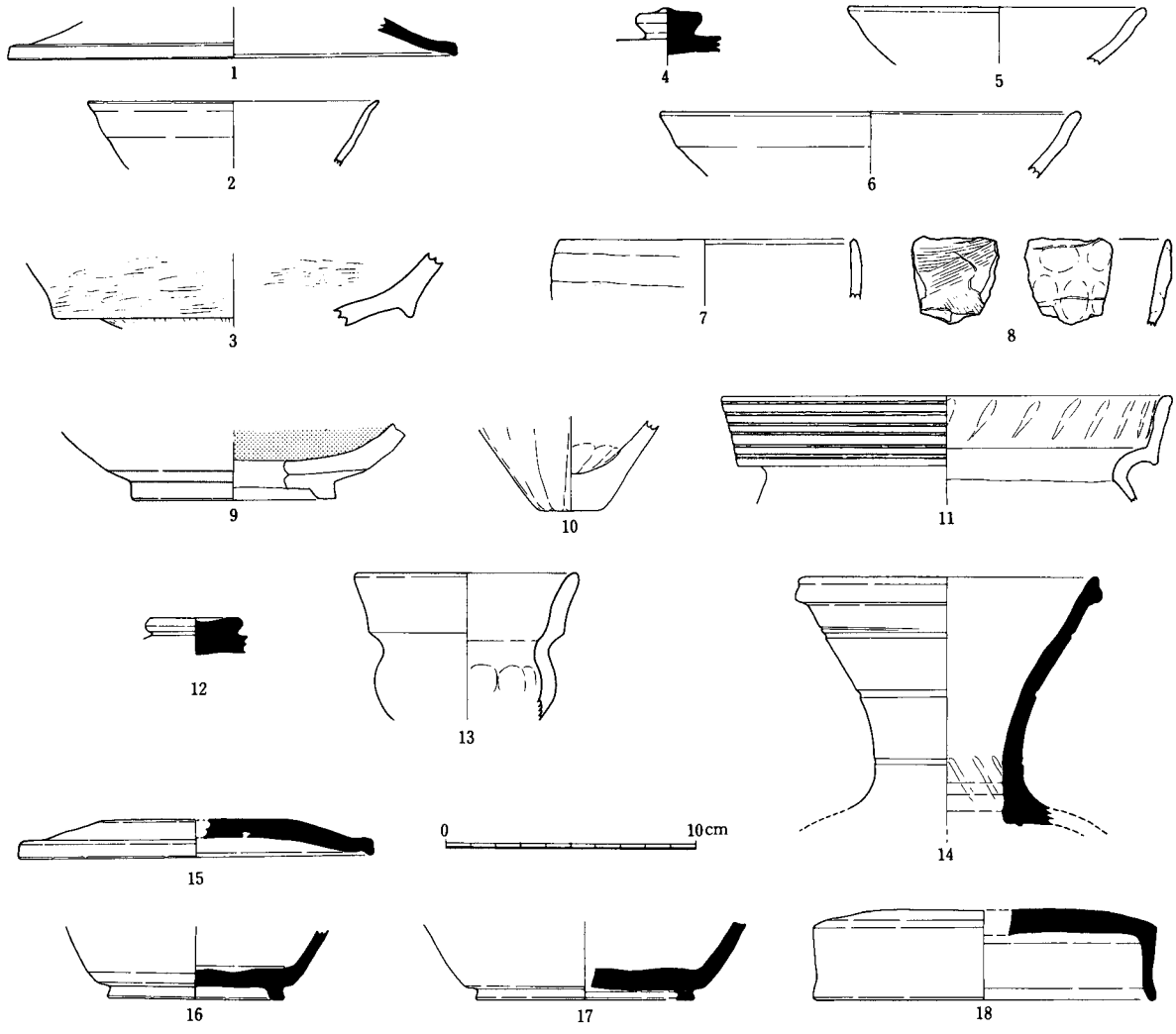
第15図　荒屋遺跡 SK02出土土器実測図



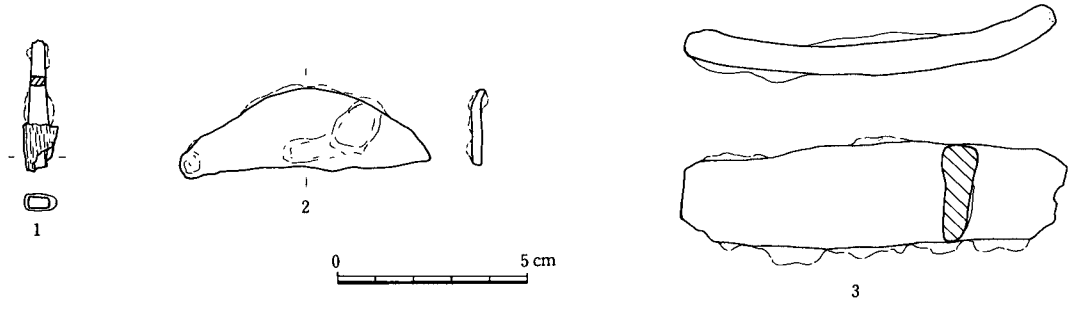
第16図　荒屋遺跡 SK02出土土器実測図



第17図　荒屋遺跡 SK02出土土器実測図



第18図　荒屋遺跡出土土器実測図



第19図　荒屋遺跡出土鉄製品実測図

調査区北部（北から）

調査区南部（北から）

図版 2

21区から南（北から）

12区から北（南から）

SB01A（北から）

SB01A（東から）

図版 4

SB01B（南から）

SB01B（北から）

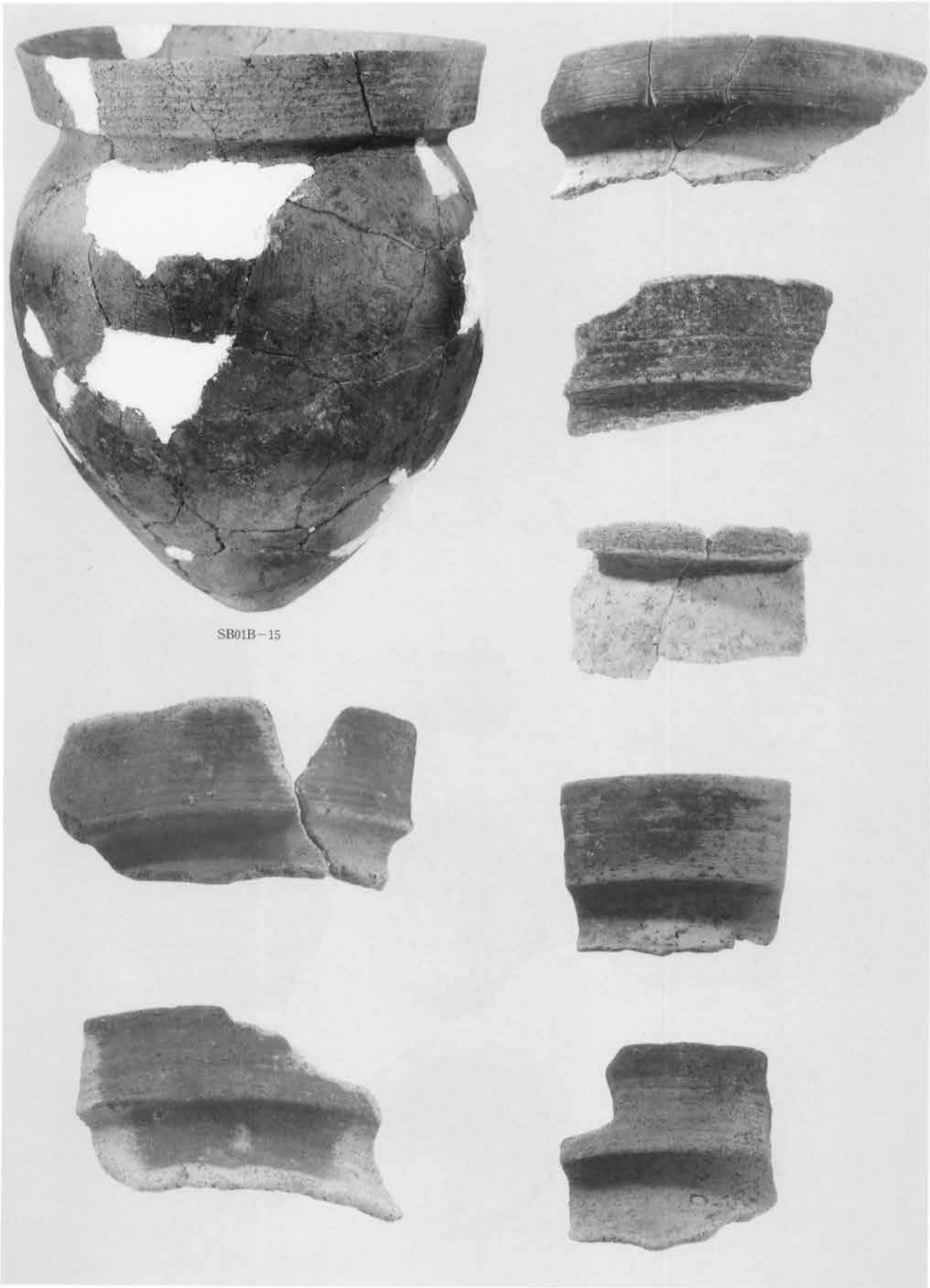
SB01B－土器15出土状態（東から）

SB01B－土器15・周溝の出土状態（東から）

図版 6

SB03（南から）

SK02（西から）



SB01A・B 出土土器

図版 8

SK02出土土器

SK02出土土器

道法寺南遺跡発掘報告

1　調査の概要

道法寺南遺跡は、鶴来町道法寺地内の北陸鉄道石川総線の西側に位置する。遺跡は、鞍ガ岳の山麓から西に派生する微高地の上にある。調査は1988年５月17日～６月21日にかけておこない、この間の調査面積は約800m²である。調査は小嶋が担当し、県立埋蔵文化財センターで長期研修を受講していた辰口町教育委員会の橋場和彦氏の参加を得た。調査は、水田造成に伴って削平される部分と幹線道路になる部分を対象に実施した。

調査区は農道によって三箇所に別れており、便宜的に南から１～６区と呼称する。

１・２区の概要　調査区の北半分は礫面を検出し、南側は礫面の上に赤土が堆積していた。掘立柱建物の柱穴を多数検出している。遺物は、須恵器・土師器を多数検出している。

３・４区の概要　全面に礫面を検出し、遺構は検出できなかった。遺物は、須恵器・土師器が少量出土している。

５・６区の概要　調査区の北端に落込みを検出した他は、全面に礫面が現れて遺構は検出できなかった。北端の落込みは、耕地整理で埋められた旧水田と思われる。遺物は、須恵器・土師器が少量出土している。

基本土層　１～６区の基本土層は、耕作土の下に耕地整理以前の旧耕作土と思われる灰褐色土があり、その下に遺物を包含する暗褐色土が続き、その下層は礫層ないし赤土層となっている。

2　１・２区の遺構

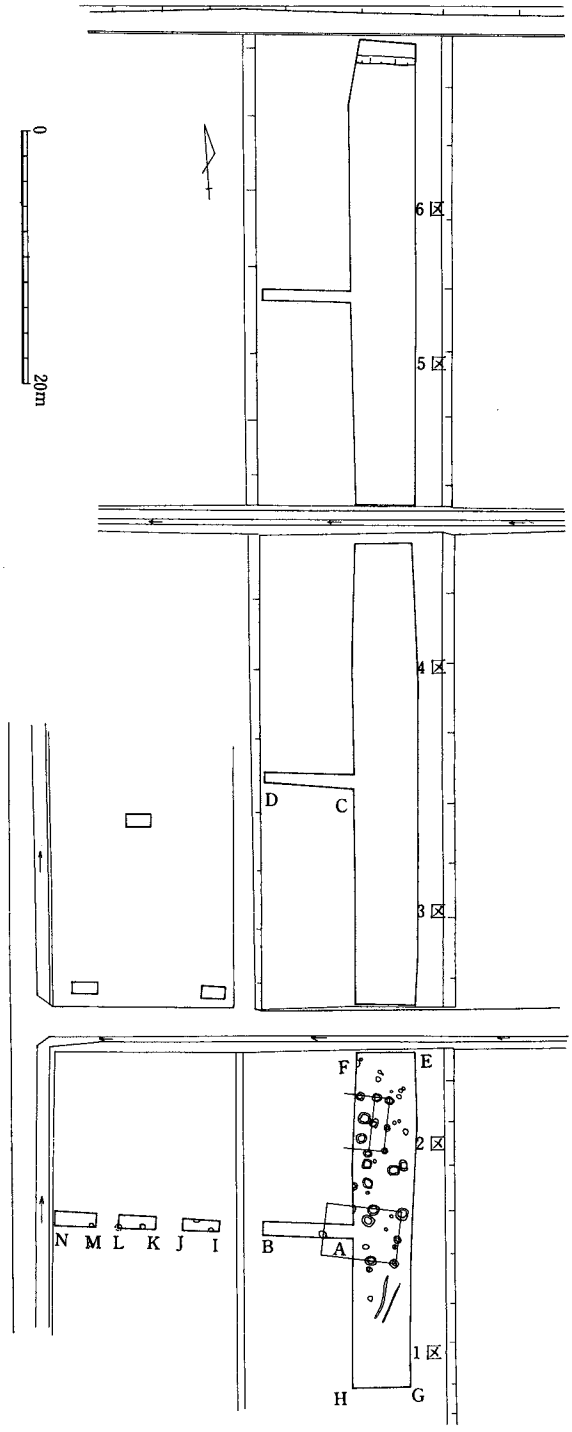
掘立柱建物　２区では、一辺が60cmを越す方形の柱穴を15個以上検出したが、建物は二棟の存在を把握できたにとどまった。いずれも、東西方向に主軸を持ち、北からSB01・SB02と呼称する。

SB01はＰ３・Ｐ４・Ｐ５が北側桁行柱列になる建物で、元来はＰ４・Ｐ７・P10が東側梁間柱列となる構造であったのが、Ｐ５を北端とする梁間柱列をもつ建物に改築されたものと思われる。柱間は、桁行がＰ３とＰ４の間で150cm、梁間がＰ４・Ｐ７・Ｐ７間が各200cmである。主軸がＮ－81°―Ｗの、東西棟に復元できる。

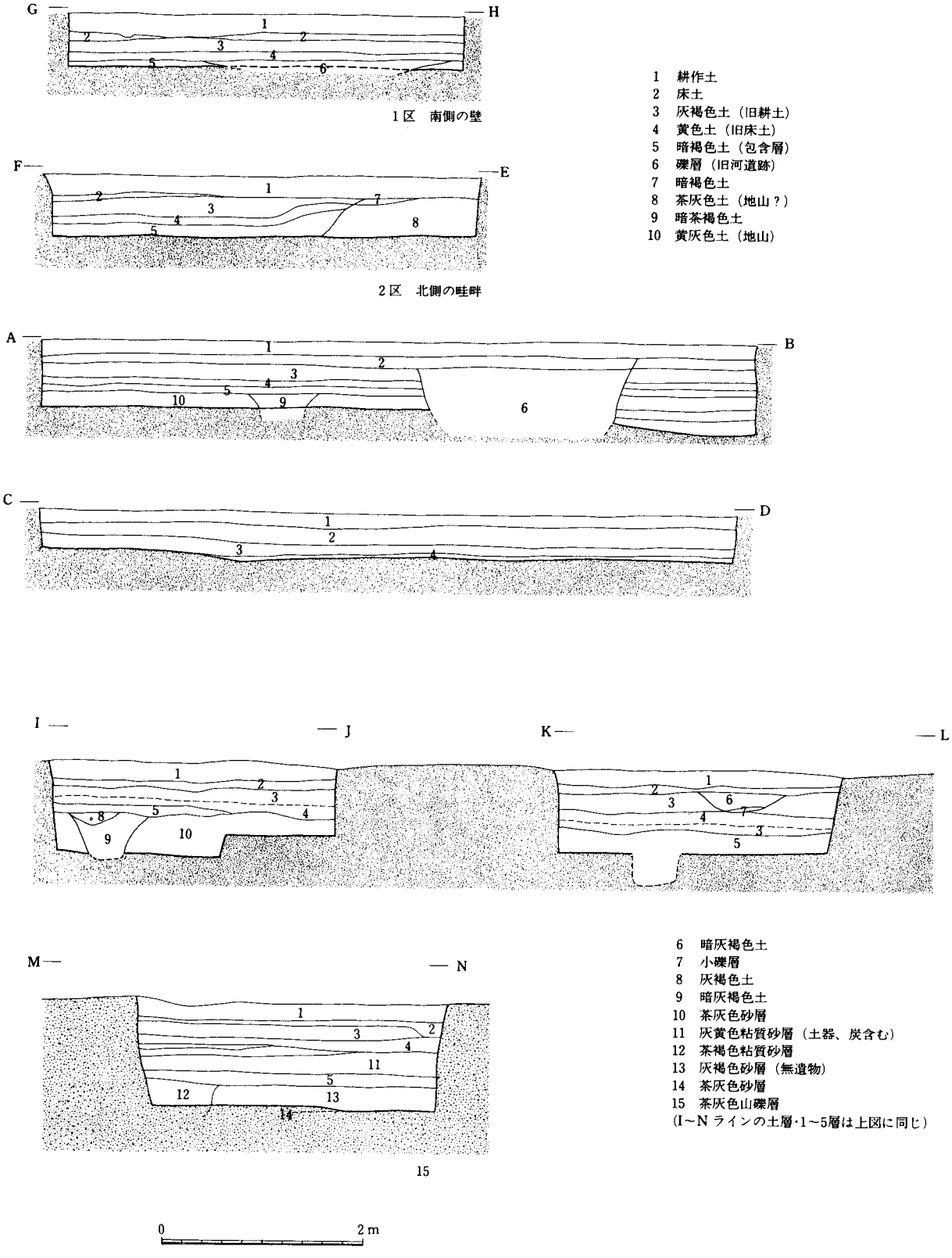
SB02は、P16・P17・P18を北側桁行柱列とする建物である。桁行の柱間は210cm、梁間の柱間は200cmで大型の建物である。調査区から西に幅１ｍのトレンチをのばして、建物の西端を押さえたところ、桁行600cm相当の所で柱穴が見つかった。この結果、SB02は桁行600cm・梁間400cmで、Ｎ－81°－Ｗに主軸をもつ東西棟に復元できる。建物の面積は、24m²と推定できる。

このほか、今回の調査では建物の復元に使用できなかった一辺が50cmをこす柱穴がいくつか存在しており、建物の実数は更に多いものと思われる。また、調査区の西側の水田で試掘坑を入れて建物群が西側に広がっていることを確認している。

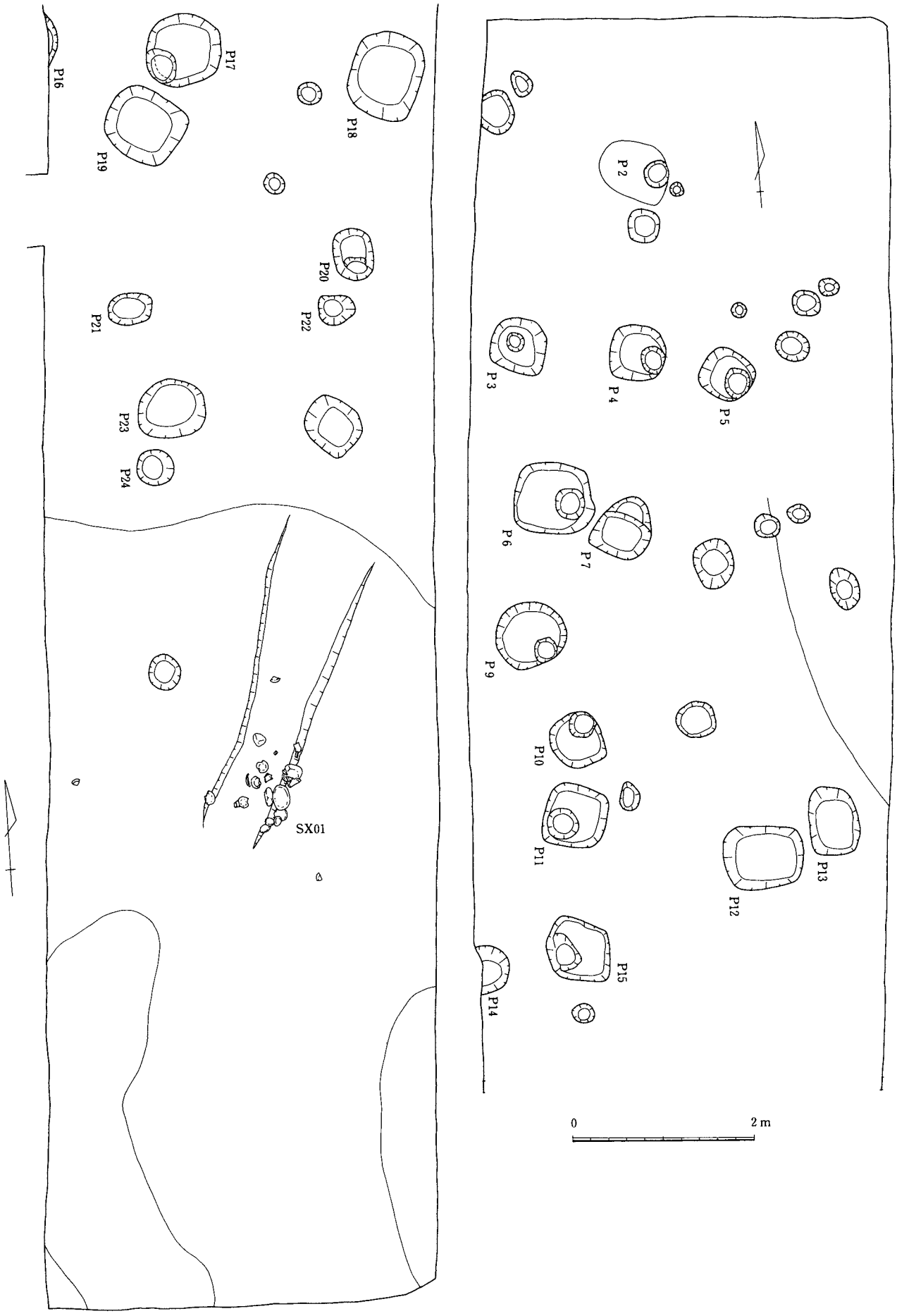
SX01　Ｉ区の南、SB02の東梁間柱列に接して、幅90cm・長さ360cm・深さ10cm前後の浅い溝状の遺構を検出した。この遺構の南部に、人頭大から拳大の石とともに、須恵器の坏・盤や土師碗を12個体検出した。須恵器の盤や坏の底部には「日佐」と墨書があり、なんらかの宗教的な儀式が行なわれたと思われる。



第１図　道法寺南遺跡調査区全体図



第2図　道法寺南調査区土層図



第3図　道法寺南遺跡遺構実測図

3　遺物

今回の調査では、1・2区を中心に須恵器・土師器を検出した。

SX01出土の土器

第6図に、SX01で検出した土器を掲載した。須恵器は13点出土し、その内訳は坏蓋が1点、杯身が8点、盤が4点である。土師器は6点出土し、内訳は碗が1点、甕口縁が1点、甕体部が2点、甕底部が2点である。須恵器は灰白色で緻密な胎土を持っており、辰口窯の産である可能性が高い。三点の坏底部外面と、二点の盤底部外面に「日佐」の墨書が認められる。墨書の筆跡はいずれも相違しており、五人が別々に「日佐」と墨書した可能性が強い。11の盤底部内面には、ヘラの刻文がある。

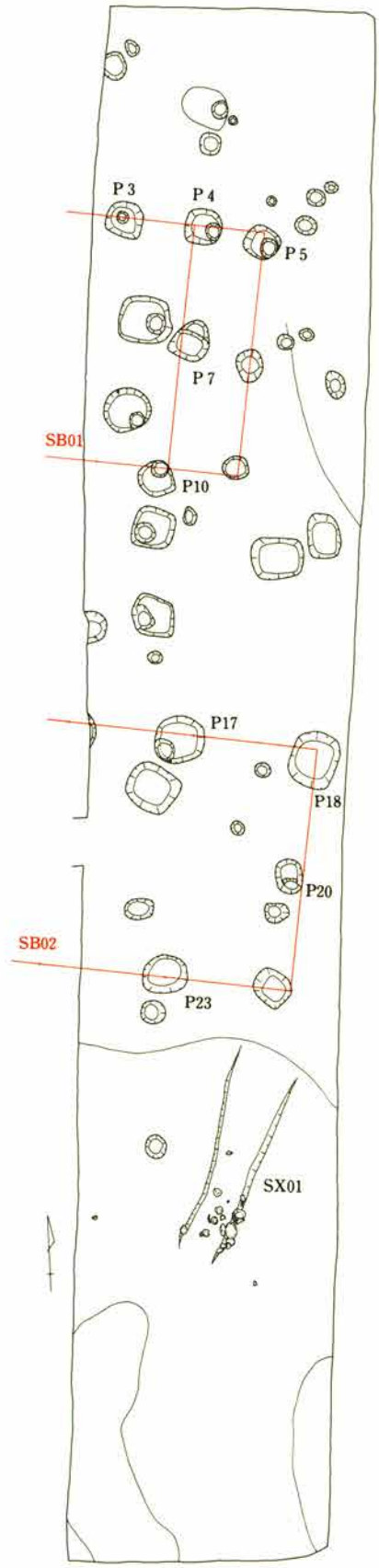
1～4区の土器

1～4区の包含層から、遺物を検出している。1区からは、須恵器坏・同有台坏・土師器碗の三個体で墨書を確認できる。21は字の左側の一部があるだけで、判読はできない。22は牙のようにも見えるが、判断を保留したい。25は、二字ある可能性もあるが判読は不能である。20は、P20から出土しており、9世紀中葉に比定できる土師器小甕の口縁部である。このピットはSB02の東梁間の中央穴で、土師器の年代観が建物の年代を考える資料になる。32は字体の判読はできないが、3区から出土した墨書のある坏である。33の有台坏は8世紀後半の資料であり、今回の調査で出土した土器では比較的古相に属する。4区の包含層から、44に図示した「佐」と推定できる墨書をもった須恵器盤が出土している。元来は、この墨書は「日佐」であったと思われる。

今回の調査で出土した須恵器・土師器は、一部に八世紀後半代の資料を含むが9世紀第2四半世紀に比定できる資料が多く、遺跡の主要な時期を示していると思われる。

鉄滓ほか

第8図で示した鍛冶滓が、1区・2区の建物周辺で出土している。SX01から、砥石が出土している。

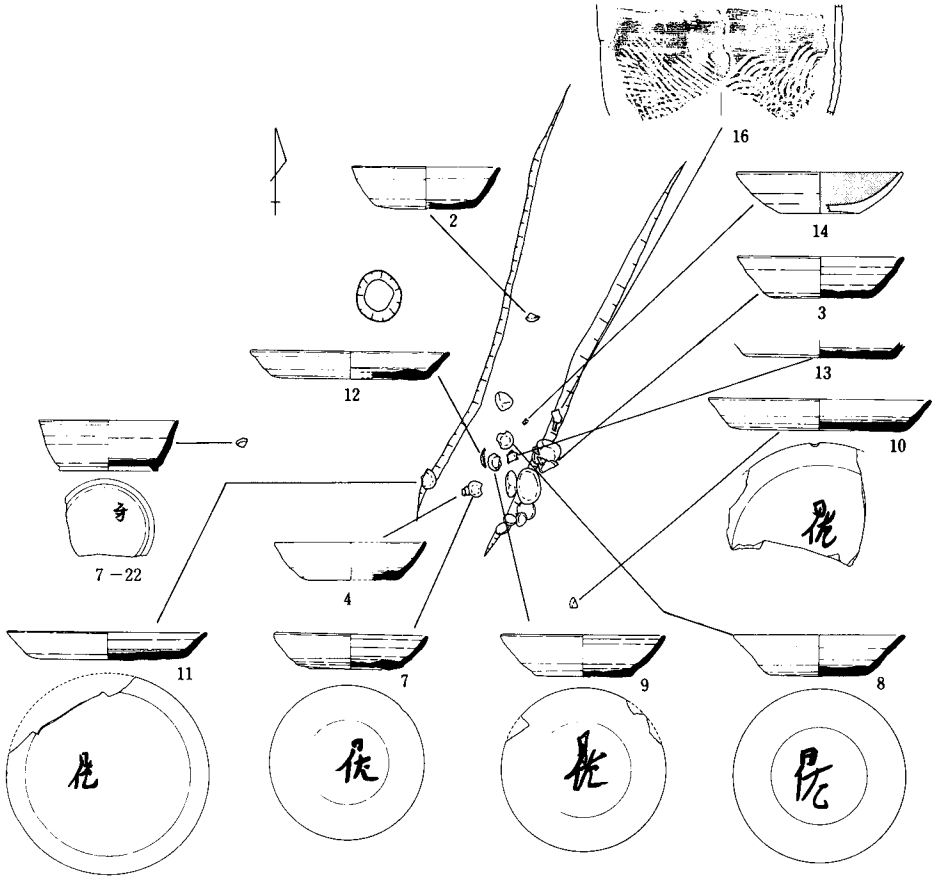


第4図　道法寺南遺跡建物復元案

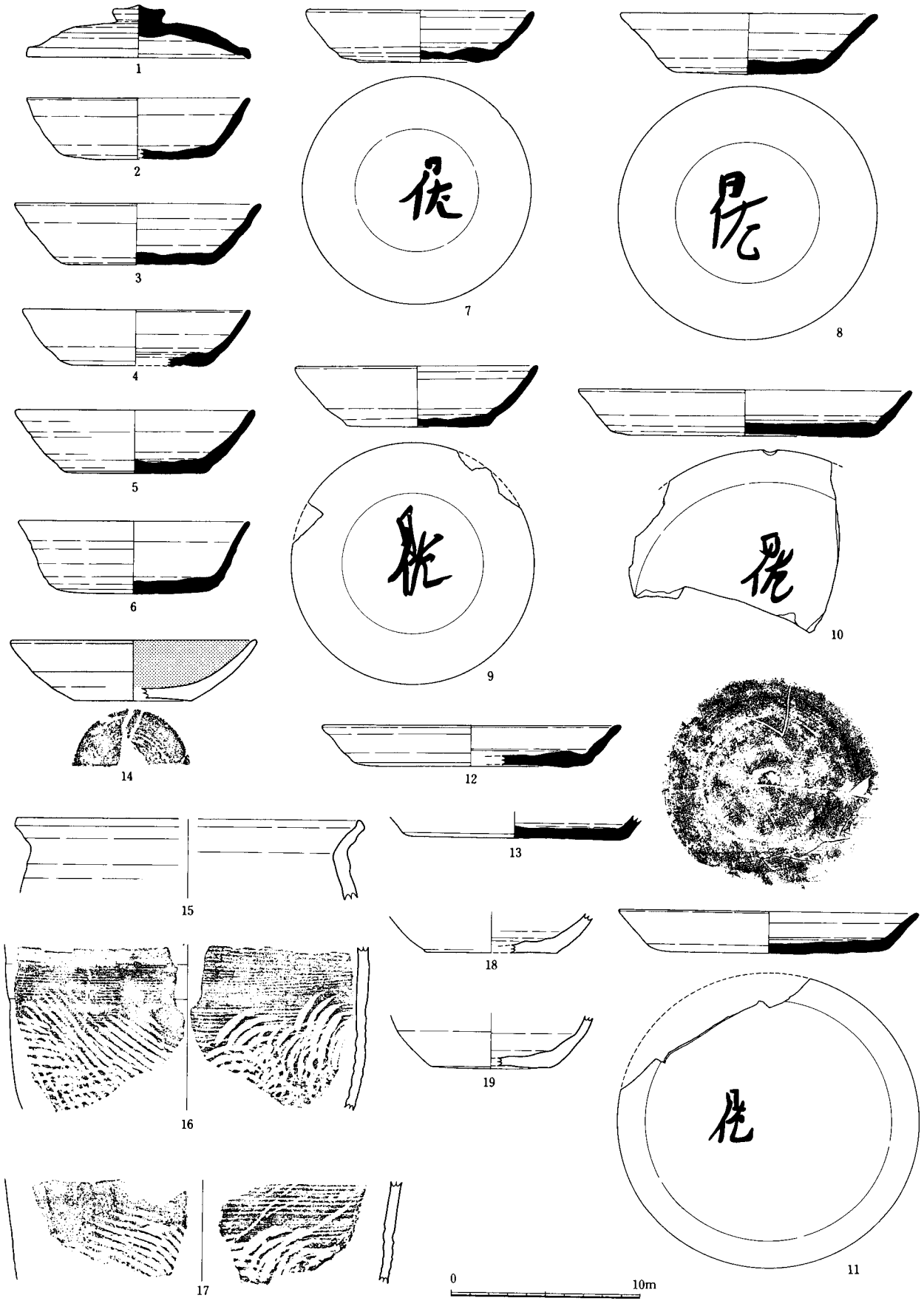
4　遺跡の広がりと構造

今回発掘したのは遺跡の南東部で、9世紀代の掘立柱建物を主とする遺跡である。建物群の実像については、今回の調査では具体的につかむことができなかったが、調査区の周辺に古代の建物群があることは確実である。墨書土器を出土したSX01は、建物群の南東隅に位置している。おそらく、建物群の境の祭祀がおこなわれ、盤の外底部に「日佐」の字がなんらかの意味を持って書かれたものと思われる。

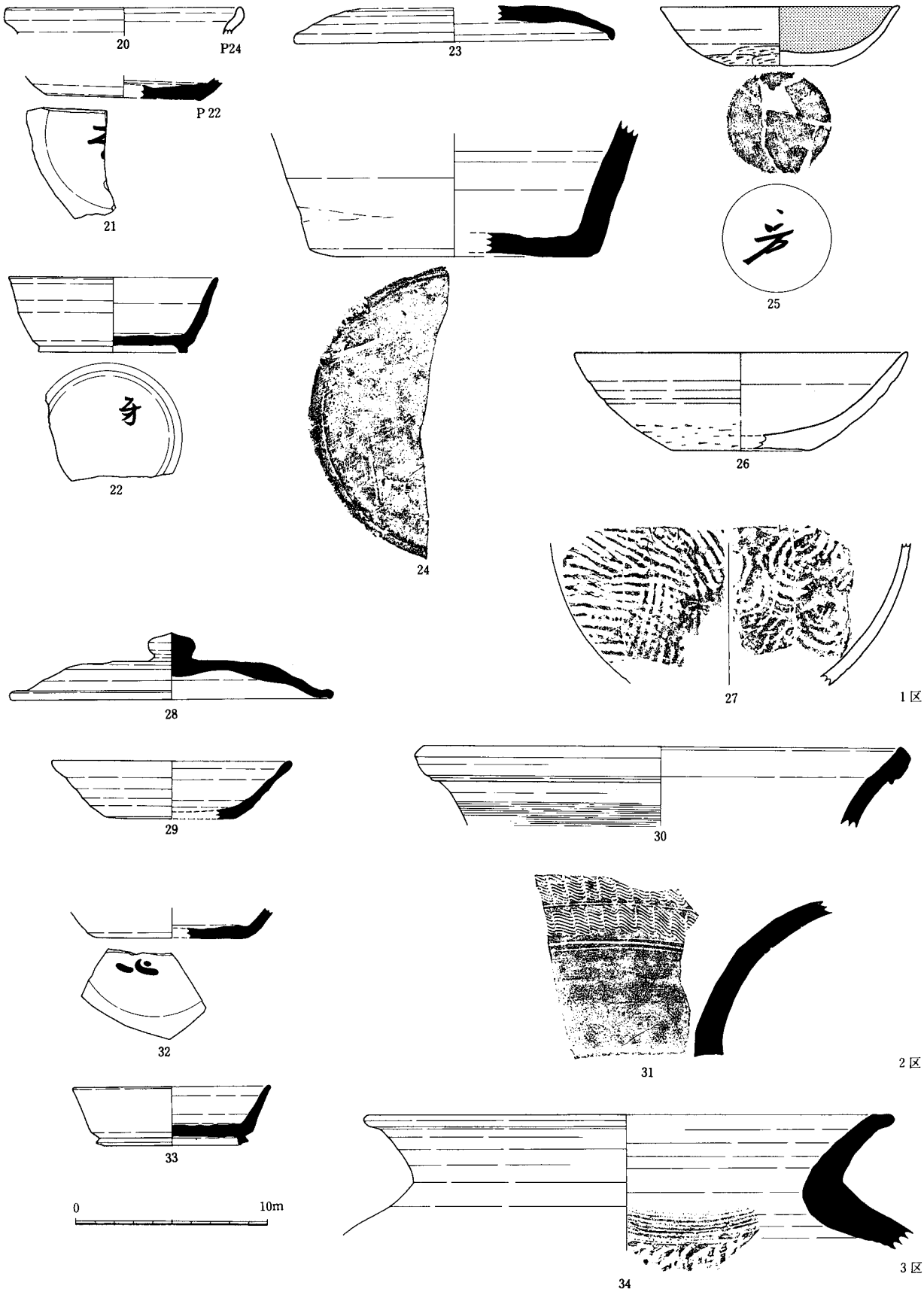
今回の調査で出土した土器は、9世紀前半を主体とし8世紀中葉も含んでいる。おそらく、建物群は8世紀中頃には造営が始ったものと思われる。



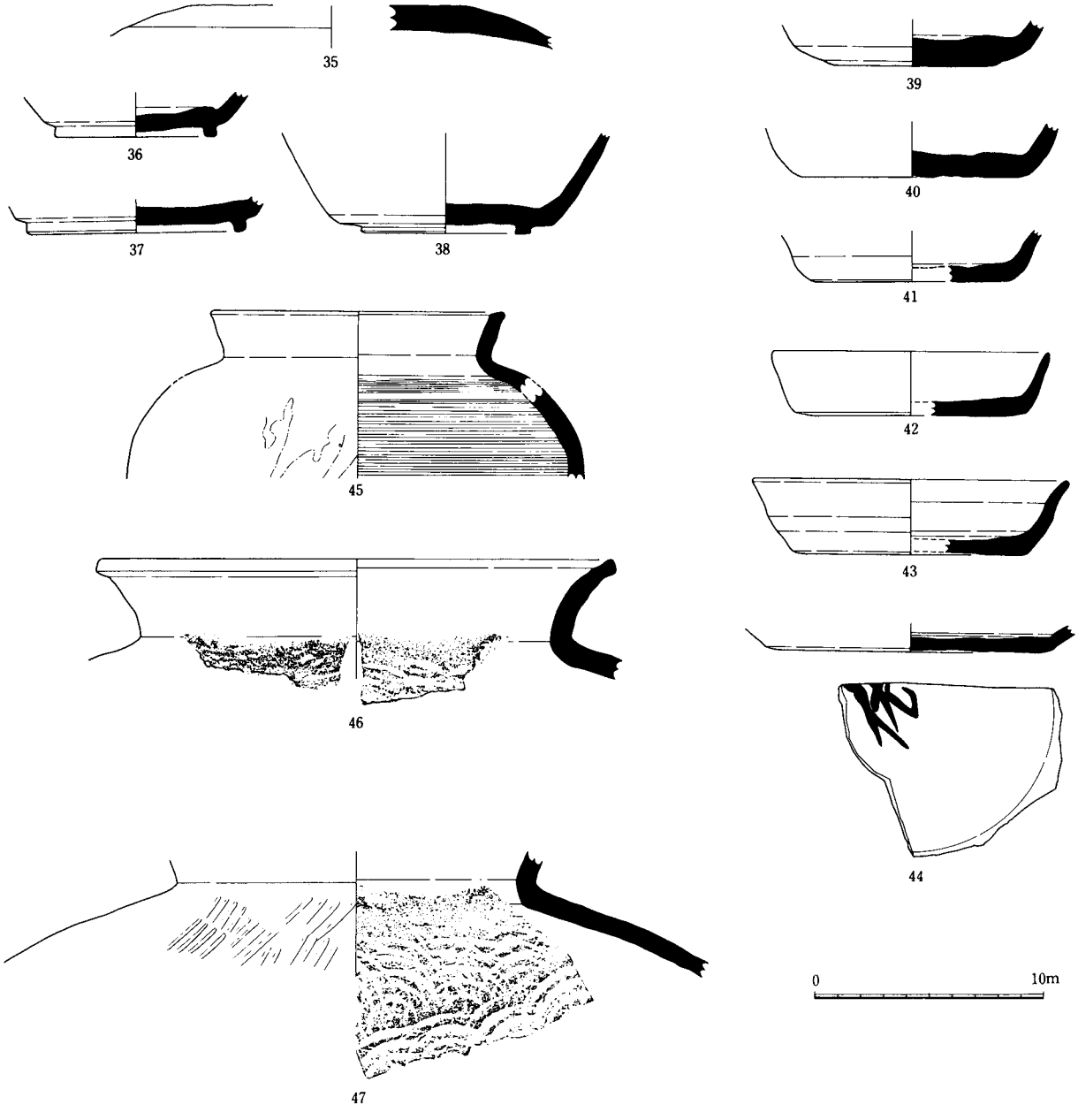
第5図　SX01遺物出土位置図



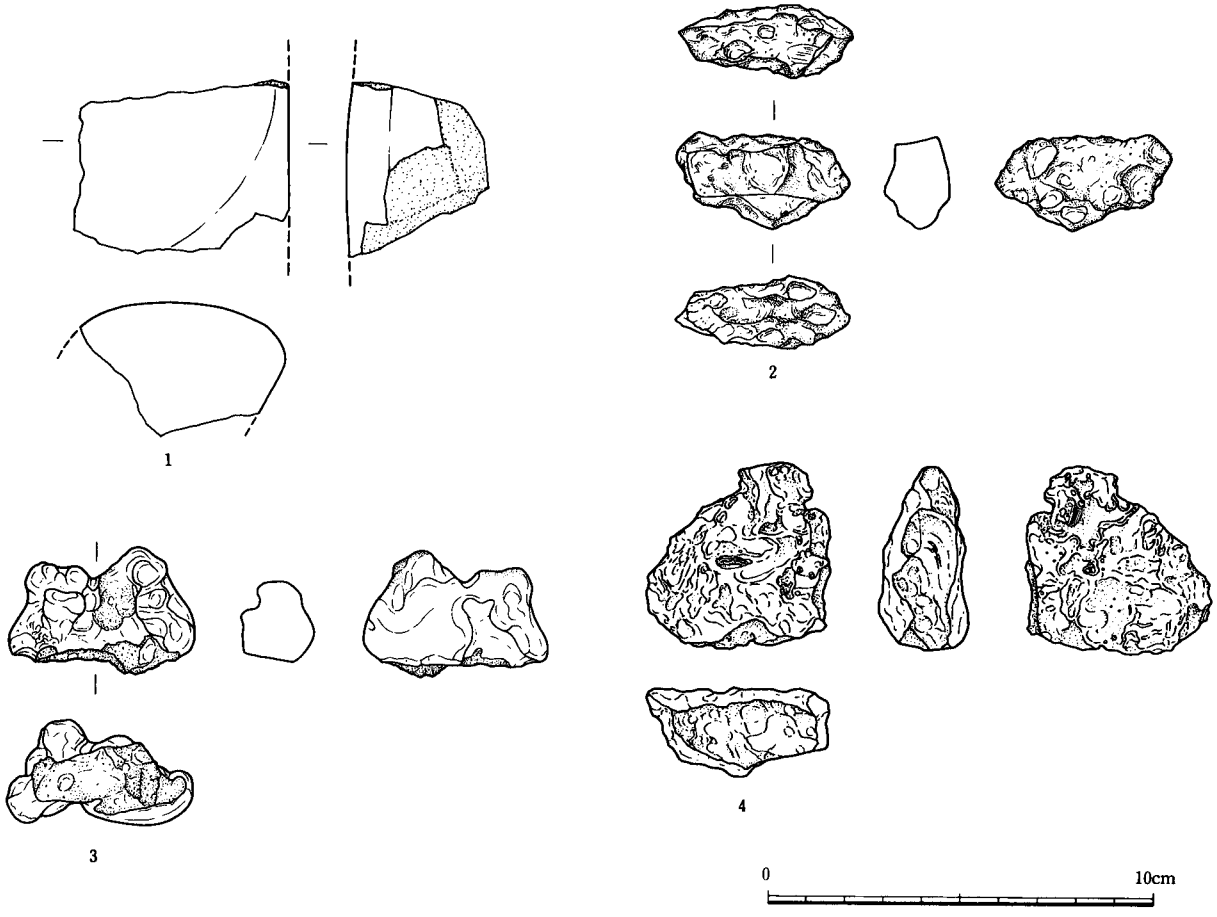
第6図　道法寺南遺跡 SX01出土遺物実測図



第７図　道法寺南遺跡出土遺物実測図（20～27：１区、28～31：２区、32～34：３区）



第８図　道法寺南遺跡出土遺物実測図（４区）



第９図　道法寺南遺跡出土遺物実測図（１：SX01、２：１区 P19、３：２区包含層、４：２区 P15）

調査前　全景（南西から）

調査前　全景（西から）

図版 2

表土掘削作業（南から）

表土掘削作業（南から）

表土掘削作業完了（北から）

表土掘削作業完了（南から）

図版 4

調査風景（南から）

調査風景（南から）

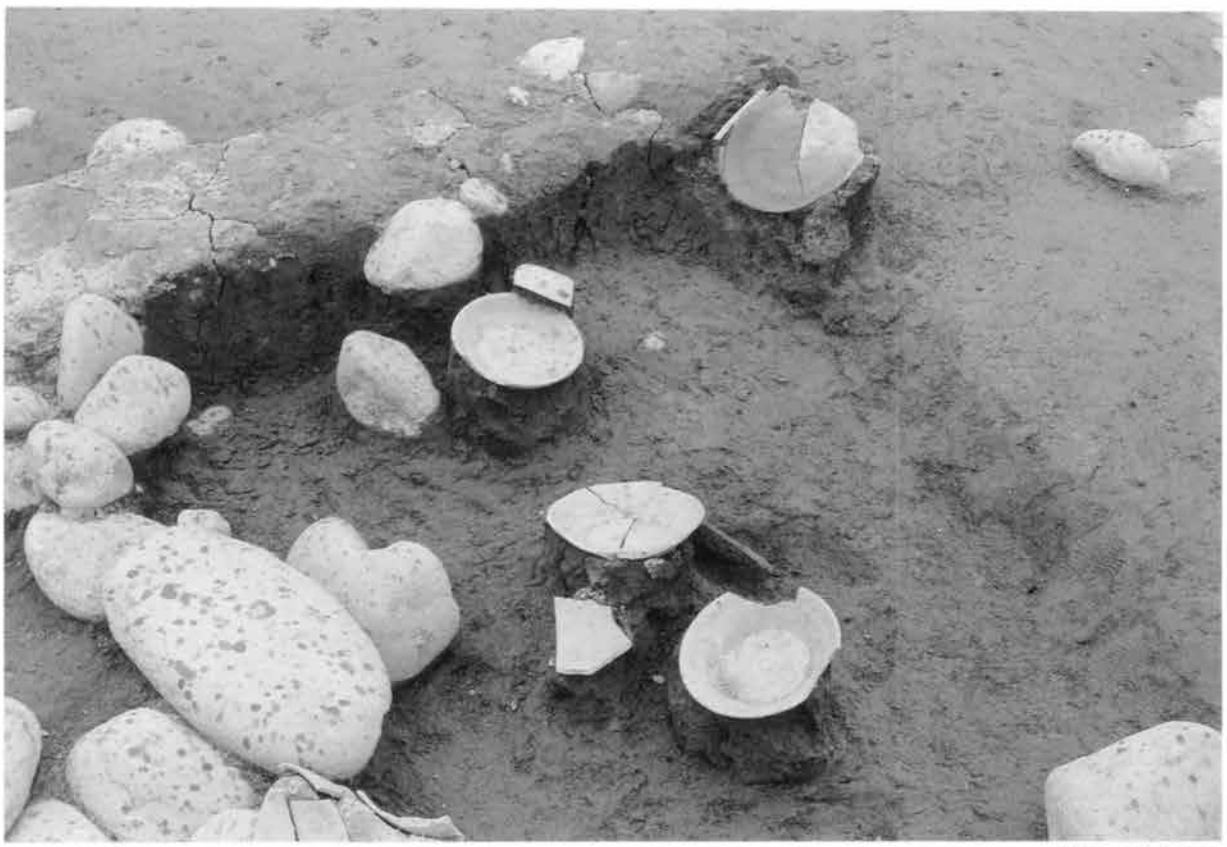
調査完了全景（南から）

調査完了全景（南から）

図版 6

SX01（北から）

SX01（北から）



SX01（北から）

SX01の周辺（北から）

図版 8

範囲確認トレンチ

範囲確認トレンチ

道法寺遺跡発掘報告

1　遺跡の立地

道法寺遺跡は石川県石川郡鶴来町道法寺地内に所在し、近世村落を継承した現村落の西北に位置する。

地形的には県下最大の扇状地、手取川扇状地の扇央部にあたり、扇頂の鶴来町市街地までは南東に約4km、東の扇側を画する富樫山地までは約0.7km、中世には加賀国の守護所が置かれた石川郡野々市町の市街地までは北に約5kmの距離をそれぞれ有する。

現在の手取川は、遺跡の南約3.5kmの地点を日本海に向けて西に流れるが、このような河道の姿は近世、恐らく元禄年間以降の姿と考えられており、それ以前は本流はより北側を流れ、加えて幾多の分流を扇状地内に網目状に派生させていたと推定される。のちに分流河道を利用して農業用水＝「七ケ用水」が整備されるが、そのうちの一つの富樫用水が遺跡西方約100mを北に流れている。この用水の下流は荒川（高橋川）・木呂川・十人川に分岐して犀川・伏見川水系に注ぐ。なかでも木呂川はこれら三つの流れの本流筋にあたり、平安前期の遺跡として著名な金沢市黒田町遺跡付近で伏見川に合流し、犀川を経て古代の大野郷において日本海に注ぐ点は留意する必要があろう。また、富樫用水は道法寺付近では島状の微高地を南北に貫いて流れているため、左右両岸への分水が比較的容易であるという利点を有することもこの地域の農業史・開発史を考える際には重要といえる。

道法寺遺跡付近は現在、標高58～59mを測る。とりわけ近代の耕地整理が徹底して実施された石川平野の一角に含まれるため、今では平坦な田面が続くばかりとなってしまっているが、かつては浅い谷状の微低地や島状の微高地が複雑に入り組んだ状況を呈していたものと推定できる。今回の調査はあくまでも線的なものにすぎなかったため、かつての微地形を復原するデータを得るまでには至らなかった。

2　調査に至る経緯と調査の経過

a．調査に至る経緯

本発掘調査は県営ほ場整備事業鶴来地区道法寺工区に係るもので、水路敷設に先立つ緊急発掘である。1988年度に試掘による範囲確認調査が実施され、工事により現状変更がなされる地点については翌1989年度に事前の発掘調査が行われる予定であった。

ところが、おりからのバブル経済下のＮＴＴ株売却益などによってもたらされた国家会計の潤沢さは、公共事業を飛躍的に進捗させる原動力となり、ほ場整備など農林関係事業もその例外ではなかった。想像をはるかに上回る事業量の増大は、それに伴う事前の埋蔵文化財発掘調査における対応可能な面積を凌駕する結果をもたらした。そこで道法寺工区などについては、緊急避難的な苦肉の策として、一応工事は予定通りに進め、問題の水路敷設箇所については包含層上面まで掘削しないことを条件に暫定仮排水路で急場を凌ぐ方向で調整が計られた。

そして、実際に発掘調査が行われたのは1990年秋のことである。

b．調査の経過

本発掘調査は石川県立埋蔵文化財センターを調査機関とし、調査第一課長・平田天秋の指導の下、同課主事・松山和彦が担当した。なお、調査にあたっては調査補助員・中村繁和の助力を得たほか、下記の方々・機関にもお世話になった。

石川県松任土地改良事務所・村本菊男（道法寺工区長）・高瀬肇（道法寺地区在住）

現地調査は1990年10月8日から10月25日にかけて実施した。

以下に調査日誌を抄出して掲載する。

10月8日　　重機による表土除去

10月9日　　ベンチマークの設定

10月12日　包含層の掘り下げを開始

10月17日　調査区北部の遺構検出及び遺構調査を開始

第１図　道法寺遺跡1990年調査区位置図（１/2,000）

10月18日　調査区北部の平面図作成・南部の遺構検出及び遺構調査を開始
10月19日　調査区南部の平面図作成を開始
10月22日　清掃及び写真撮影
10月23日　土層断面図作成
10月25日　機材の撤収

3　調査区の概要と層序

a．調査区の概要

調査の対象となったのは、南北に走る水路約110mに関する部分で、当初は幅2mでの調査区の設定を予定した。しかしながら1989年度の工事において水田一筆を画する畦畔がすでに完成しており、それを壊すことができなかったため、調査区は水路部分の西に平行する町道と、同じく東に平行する水田畦畔に挟まれた幅約1mの部分に限られた。

また、調査区の北限は県道野々市・鶴来線を南に進み、道法寺集落の北約100mで町道を西に折れて約180m、道法寺集落墓地近く、南北方向の町道との交差点付近である。ほぼ水路のセンター-ラインに沿う形で調査区の中心線を設定、北端を0mの起点とし、南に下がる毎に距離を加算した。そして、0～10m間を1区、10～20m間を2区というように呼称した。

b．層序

幅約1mのトレンチである調査区の東壁において記録を行った。南北に長いトレンチ全般を通じて地表から耕作土（第1層）→水田床土（第2層）→濃茶褐色土（第3層）という土層堆積を基本とする。古代の遺物包含層である第3層以下については、直下がベ-ス面となる場合、あるいはその間にもう一層介在する場合等がみられる。

ベ-スとなる土層は、1・2区にかけてはトレンチ崩壊のため不明、2区南端から5区の溝01までは人頭大の礫が混じる茶色の粘性砂質土になり、溝01から6区の北から8m地点の間は粗砂層である。続いて、それより7区のピット05付近までは砂礫層、ピット05付近より9区ピット11の間が淡茶褐色シルト、そこから11区土坑06にかけては黄褐色シルト、それ以南の残りの部分については拳大～人頭大の礫を多量に含む明黄色砂質土となる。

4　遺構

層序の項で述べた通り、５区の溝01から７区のピット05にかけてはベースが粗砂層や砂礫層で構成される箇所である。恐らく旧河川跡に由来するものと思われ、この間では遺構は確認されず、加えて古代の遺物包含層である第３層の堆積もみられない。本遺跡に古代集落が営まれた時期に同時存在した可能性もある河川の跡といえる。これを境に北部と南部に大別し、遺構について説明したい。

a．北部の遺構

土坑１基、ピット４基、溝１条が検出されている。土坑01（３区）は東側の一部を調査したのみ。深さは最大でも13cm、覆土は第３層と同じ。

ピット01（３区）は径約50cmの円形で、深さ約30cm。ピット02（４区）は径70cmの円形と推定され、深さ20cm前後。ピット03（４区）は全形不詳ながら深さ43cmを測る。残るピット04（５区）もやはり全形不詳で、深さ34cm。覆土はいずれも第３層に同じ。

溝01（５区）はピット04に近接し、深さは25cmと浅い。既述の遺構が覆土の点において古代の遺物包含層に近似するのに対して、炭粒混じりの濁暗灰褐色土を覆土とするこれは時期的に後出する可能性が高い。

b．南部の遺構

土坑４基、ピット26基以上、溝１条が検出されている。

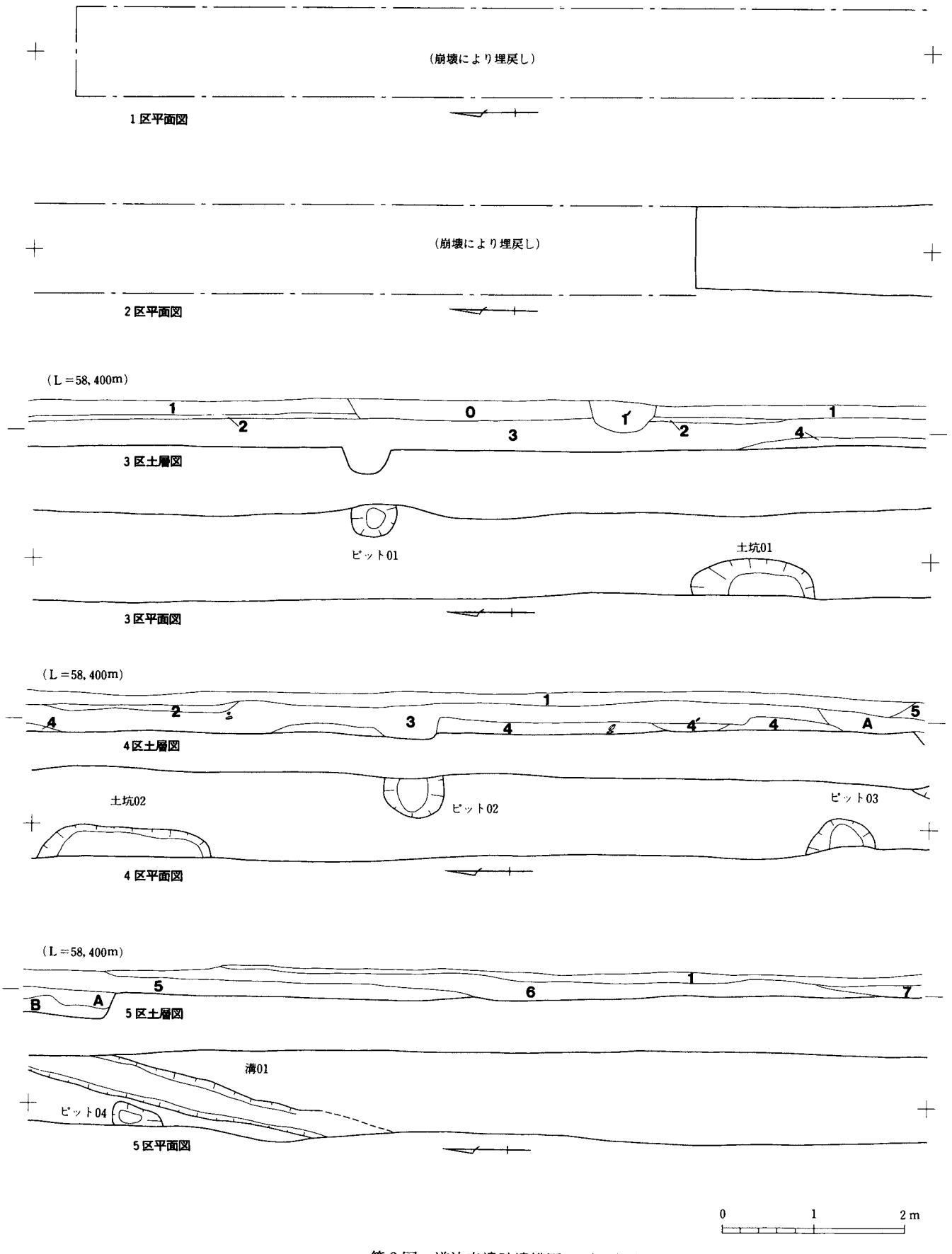
土坑03（７区）は東側の一部を検出したのみで、深さ30cm以上、覆土は濁淡茶褐色シルト。土坑04（10区）は南北150cm余りを測り、プランは隅円の正方形か長方形かと推定される。覆土は暗青灰色シルトで、明らかに古代の包含層の上から切り込んでおり、中世以降のものとできよう。なお、東北部に重複するピット（覆土、暗黄褐色砂質土）はこれに先行する。

土坑05（10・11区）は深さ60cm、覆土は暗茶色砂質土。南側に深さ20cm余りのテラスを伴う。土坑06（11区）は２段掘りとなる。

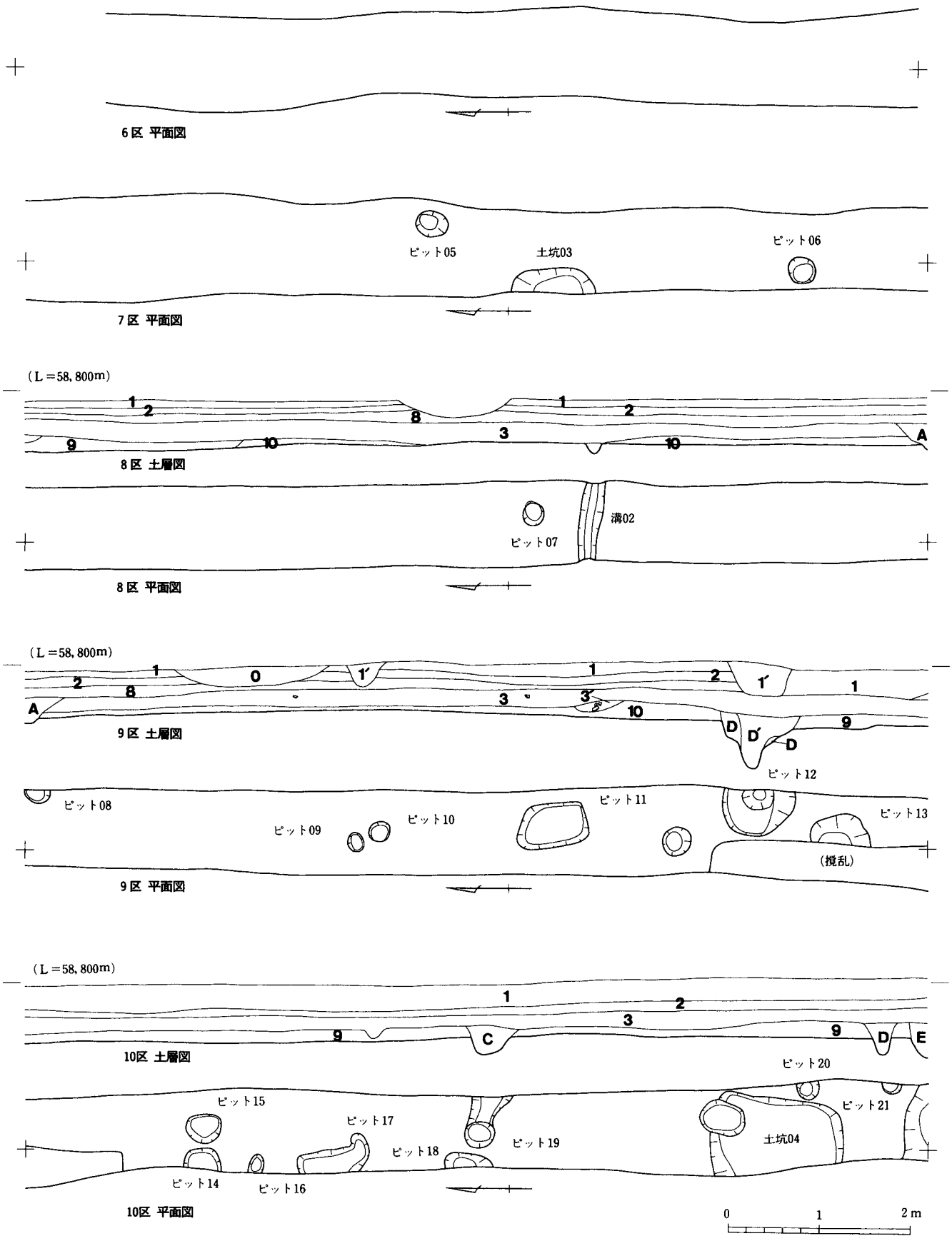
ピットには土坑04と同様に第３層上より切り込み、覆土が青灰色あるいは暗青灰色系の色調を呈し、中世以降に属すると考えられる一群が見られる。ピット17・18（10区）やピット26（11区）以南のすべてのものがこれに該当する。

その他のものはいずれも第３層を掘り下げて検出可能となったものであり、古代に属すると考えられる。ピット05・06（７区）は覆土が暗灰色シルトで、深さは31及び17cm。ピット07（８区）・ピット08～10（９区）はいずれも小形の円形を呈し、20cm未満と浅い。ピット12・13（９区）の覆土には地山ブロックが混じる部分がみられ、ともに掘立柱建物の柱穴と考えられる。径80cmの円形と推定される前者は深さ53cm、同じく12cmのテラス部分が伴う。覆土は炭粒を多量に含む濁暗灰色シルト。後者は西半分が攪乱によって失われているが、径70cm程度の円形であったと思われる。深さは35cm、覆土は前者と同じである。次に10区のものについて述べたい。ピット14・15はともに深さ15cmと浅く、ピット16・20・21はいずれも径20cm未満と小さい。ピット19（深さ27cm）の東側には幅約30cmの溝を伴う。覆土は両者同じで、濁黒灰色シルト。また、土坑04の項で述べたように、その東北部ににみられる深さ43cmのピットも覆土から古代に属する可能性が高い。残る11区では土坑05と06の間にピット22～25の４基が所在するが、どれも20cm以下と浅い。２基の土坑も含めて古代のものであろう。

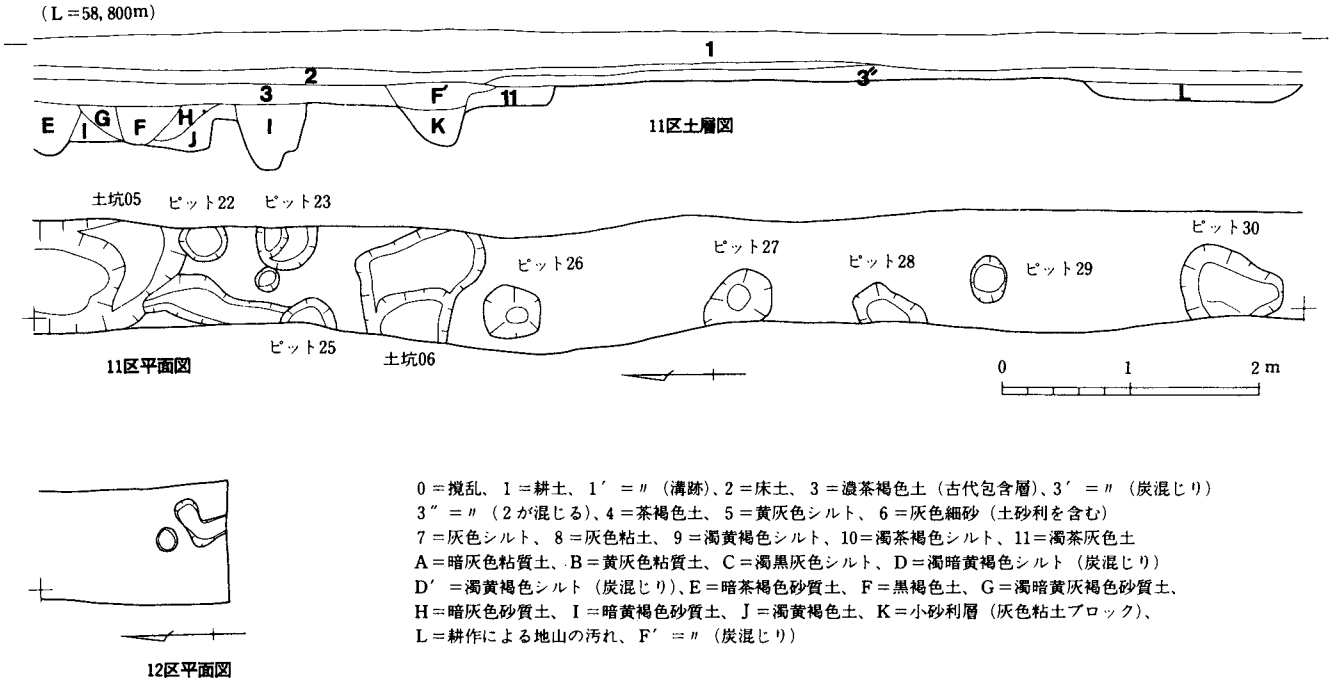
溝02は８区の中程を横切る東西方向のもので、幅20cm前後、深さ約16cm、覆土は近接するピット07と同じく暗灰色シルト。その他にも、ピット19東側やピット25北側にも溝が伴うが、覆土の点においてそれぞれのピットと異ならず、何らかの有機的関連を有したものと推定される。



第２図　道法寺遺跡遺構図１（１/60）



第3図　道法寺遺跡遺構図2（1/60）



0＝撹乱、1＝耕土、1′＝〃（溝跡）、2＝床土、3＝濃茶褐色土（古代包含層）、3′＝〃（炭混じり）
3″＝〃（2が混じる）、4＝茶褐色土、5＝黄灰色シルト、6＝灰色細砂（土砂利を含む）
7＝灰色シルト、8＝灰色粘土、9＝濁黄褐色シルト、10＝濁茶褐色シルト、11＝濁茶灰色土
A＝暗灰色粘質土、B＝黄灰色粘質土、C＝濁黒灰色シルト、D＝濁暗黄褐色シルト（炭混じり）
D′＝濁黄褐色シルト（炭混じり）、E＝暗茶褐色砂質土、F＝黒褐色土、G＝濁暗黄灰褐色砂質土、
H＝暗灰色砂質土、I＝暗黄褐色砂質土、J＝濁黄褐色土、K＝小砂利層（灰色粘土ブロック）、
L＝耕作による地山の汚れ、F′＝〃（炭混じり）

第4図　道法寺遺跡遺構図3（1/60）

5　遺物

a．遺構出土の土器（第5図1～5）

土坑01から1・5が出土している。須恵器有台杯1の高台は薄くて低い華奢な感じがするものである。底部外面には回転ヘラ切り痕をそのまま残すが、同内面にもナデ消されているとはいえそれがみられ、底部の成形を窺い知る例といえよう。須恵器長頸瓶5は肩部に降灰がみられるともに凹線が1条めぐる。胴部下半には回転ヘラケズリを施す。

土坑03からは内面黒色の有台椀2が出土。外面の調整は回転ナデにより、胎土中には海綿骨針を含む。ピット13では土師器3・4が出土。前者は有台、後者は無台のそれぞれ椀かと思われる。後者の底部内面にはコテ状の工具を用いた回転ナデが残る。

b．包含層出土の土器（第5図6～22）

縄文土器（6）　4区出土。図化したもの以外にも同一個体と思われる数片が伴出した。外面に右下がりの条痕文を施し、胎土中には多量の細砂粒が混じる。内面胴部下端及び外面のそれよりやや上位に煤状のものが帯状に付着し、外底には網代状圧痕？が観察できる。

須恵器（7～16）　7・8は蓋、9は有台杯、10・11が無台杯、12が皿、13及び恐らく14も椀、15が壺・瓶類、そして16が甕であろう。偏平で大きなボタン状つまみを有する7の天井部は回転ヘラケズリにより調整される。9は高台が内傾ぎみとなる。10・11はいずれも器壁が薄く、前者の口縁は横に開きぎみとなる。10は口径13.4cm、器高3.0cm、11はそれぞれ14.1と3.3cmを測る。12は軟質で底部は内外ともセピア色を呈しており、口径14.8、器高2.4cmである。14の高台はハの字状で、狭い接地面の内側には内傾する面が伴う。16の外面は平行タタキ、内面には同心円状当て具痕が残る。以上の出土地点は、8・10が3区、7・9・12が4区、11・14が6区、13・15が9区付近、残る16が11区に属する。

内面黒色土器（17）　9区出土。高台は幅狭で断面三角形をなす。胎土中には赤色粒。

土師器（18・21）　前者の外底には微かに回転糸切り痕が残る。。器表面が磨耗した21は胎土がやや暗い灰白色を呈する特異なもので、一部に断定はできないが釉状の光沢もみられる。ここでは土師器に含めておく。ともに9区出土。

灰釉陶器（19・20）　19は椀で9区付近から、20は皿で8区から出土している。前者の高台は低く、外底部中央にはわずかに糸切り痕が観察できる。後者にも著しく退化した感のある高台が伴い、内面の体部下半には弱い段がみられる。後者はタイルに似た質感から東濃産であろう。いずれも底部付近の小片でその部位には灰釉はみられない。この他にも口縁部を含む細片が数点出土している。

中世陶器（22）　加賀焼と思われ、外面はベ－ジュに近い色調、内面はくすんだセピア色を呈する。また、外面には押印もみられる。4区出土。

C．炭化米塊（第6図23～25）

いずれもピット13から出土している。移植ゴテによる掘削中に発見され、慌てて注意深く採集したが、すでにここに掲げる3点の状態になってしまっていた。直接には接合しないこれらの元来の状態は不明。左右両端を欠く23は長さ3.2cm、厚さ1.5cm、重さ1.94gを測る。比較的よく米粒の並びを観察できる。左下端を欠く24は長さ3.1cm、厚さ1.2cm、重さ1.62gで、残る下端を欠如させた26は幅2.6cm、厚さ2.3cm、重さ2.49gを測る。23から脱落した米粒は長さ4.5mm、幅2.0mm程である。

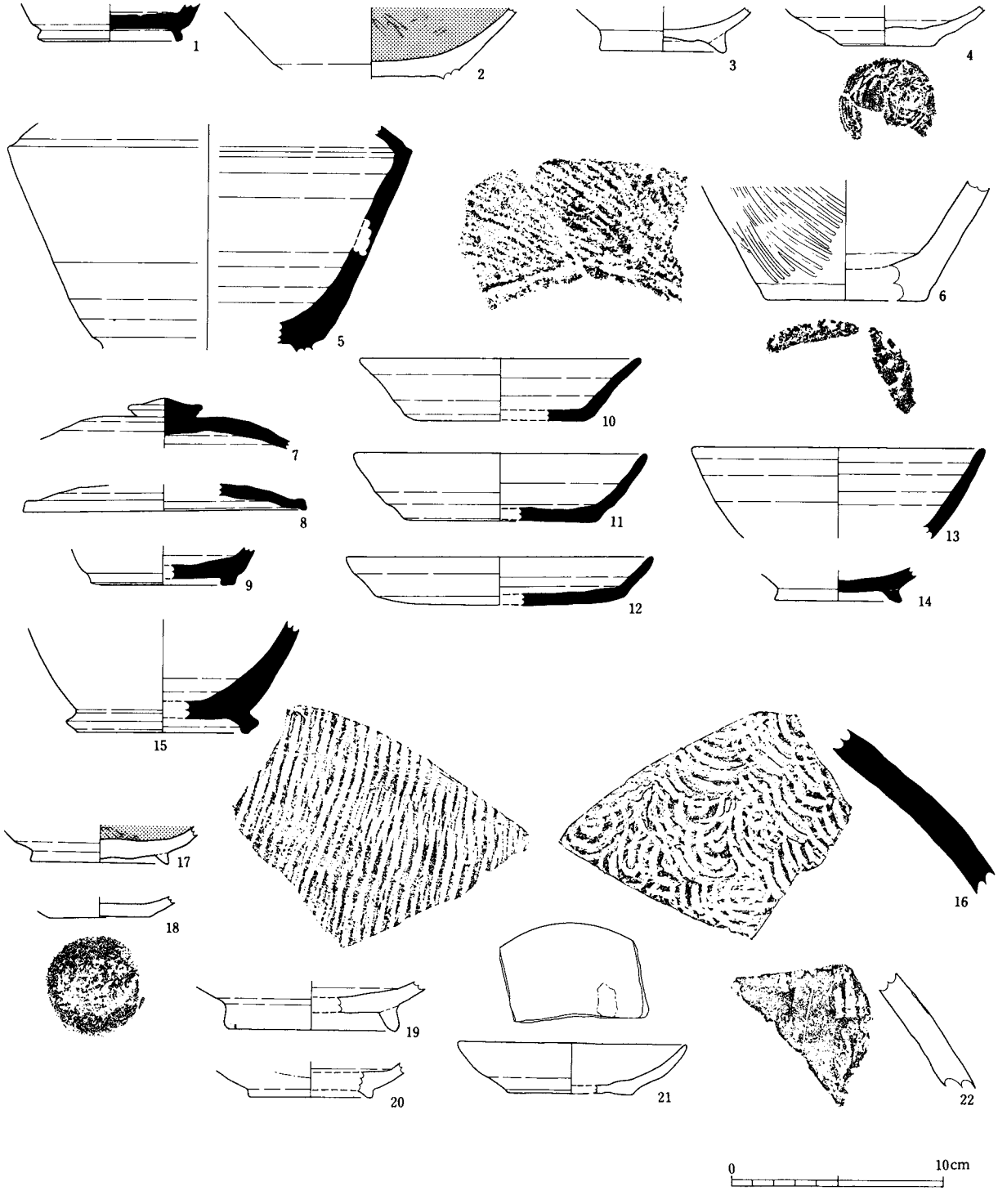
性格については不明な部分が多いが、ピット13は先述の通り覆土に地山ブロックを含むことから掘立柱建物の柱穴と考えられる。伴出遺物に土師器供膳具3・4及び鉄器27・鍛冶滓28があり、古代の包含層の上より切り込まれた形跡もないことから概ね平安時代、恐らくはその前半期に位置付けられようか。想像を逞しくして、地鎮の際に五穀の代表である米を埋納したとも考えられるが、しかしながら検出はピットの覆土上層からと記憶している。

d．鉄器・鍛冶滓（第7図26～35）

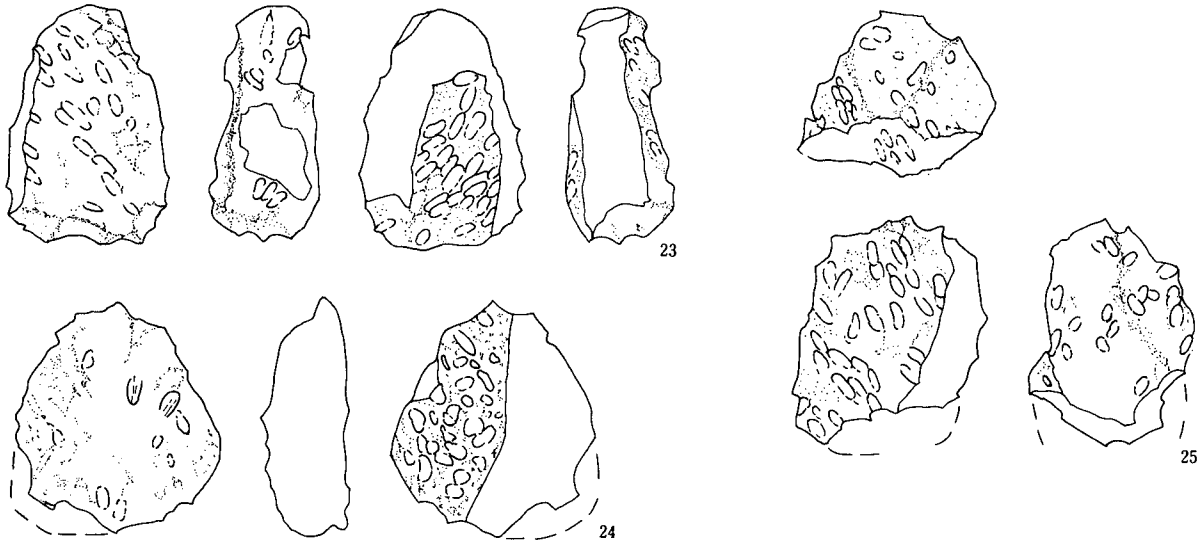
鉄器には9区出土の26とピット13出土の27がある。ともに上端を短く折り曲げる形状から鉄釘と考えられる。遺存重量は前者が11.9g、後者が3.9gを測る。

鍛冶滓のうちでも28～31は椀形滓といえよう。ピット13出土の28は重さ272g。29～31では破断面を観察できるが、29は気泡が多いのに対して残る二者においてはそれが目立たない。出土地は若い番号順に9区、8区、9区。

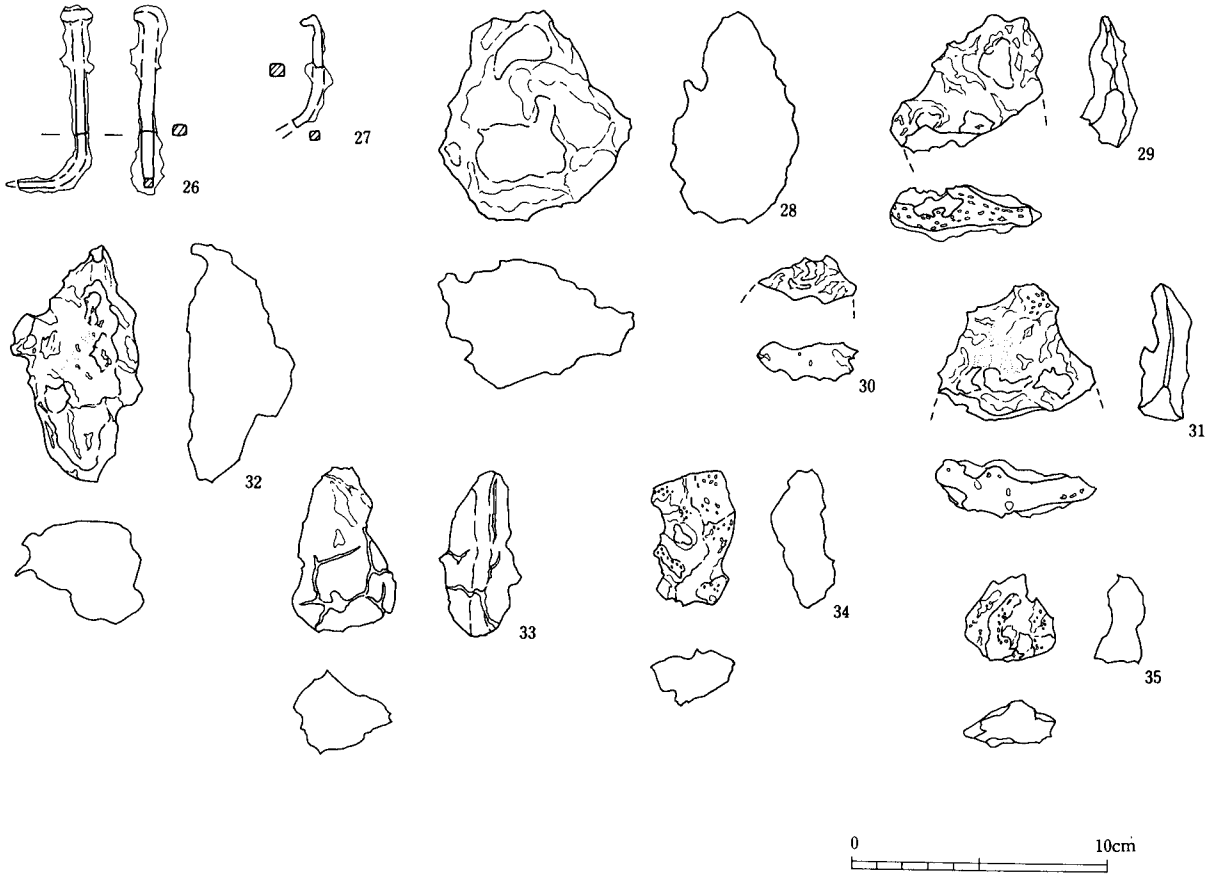
32（9区出土。重さ139.5g）の錆のなかには土師器の細片が含まれていた。33には急速に冷えた際にできたのであろうか、皺状のひび割れが走る。10区出土で、重さ69.1gを測る。その他、34（8区出土。37.9g）と35（9区出土。23.2g）においては、小さな気泡が目立つ点が表面からも観察できる。



第５図　土器実測図（１/３）



第6図　炭化米塊実測図（原寸）



第7図　鉄器・鍛冶滓実測図（1/3）

6　まとめにかえて

今回の調査では、道法寺遺跡における最初の生活の痕跡は縄文時代晩期の末葉くらいに遡り、本格的な集落の形成は古代であることが判明した。竪穴住居は検出されず、建物の柱穴と思われるピットがみられることから、掘立柱建物を主体とすると考えられる。9世紀代を中心とす時期の遺物が目立つが、天井部にケズリを施した須恵器蓋7などにより8世紀まで遡る可能性にも留意する必要があろう。また、灰釉陶器については小片に過ぎず窯式の特定は難しいが、須恵器によって示される年代に後出すると推測される。ともあれ、幅1mのトレンチで遺跡を南北に縦断したのみの調査デ－タから遺跡全体を語れないことは言をまたない。

平安時代に属する蓋然性が高い炭化米塊については先述したとおりである。県内では当センタ－が調査した鹿島郡鹿西町杉谷チャノバタケ遺跡出土の弥生時代の「チマキ状炭化米塊」の例が余りにも著名である。平安時代については、茨城県、ひたちなか（旧勝田）市文化・スポ－ツ振興公社の白石真理氏が関東地方の事例を集成されており、それによれば1993年3月現在千葉県香取郡多古町新城遺跡他3例が知られている（同公社『武田Ⅵ』1993年)。それらは焼失住居出土資料で占められるが、本遺跡の場合、柱穴覆土中で鉄釘・鍛冶滓を伴出することから、炭化の理由を小鍛冶作業との関連に求め得るかもしれない。いずれにせよ、筆者の怠慢もあり未だ農学関係の専門家の鑑定を経ていない点は、大いに反省すべきで、粳米か糯米か、玄米か精米済みのものか、蒸しているのかどうか、或いは米の品種はどうかなどをここで明らかにし得なかったことは、誠に遺憾に過ぎよう。

最後に鉄器・鍛冶滓の出土が投げかける問題について簡単に触れたい。小鍛冶関連の遺物は9区を中心に8・10区に跨がって出土しており、一つのブロックを構成しているものと推測される。道法寺遺跡周辺の手取川扇状地扇央部は犀川・浅野川下流の金沢平野などとは異なり、砂礫に富んだ土壌に被覆されていることから、水持ちが悪いうえに灌漑の水利にも恵まれていなかった。このような条件の土地柄ゆえに開墾や水路の掘削といった土木工事では、鉄器がその威力を充分に発揮したはずである。すなわちこの地の古代集落に暮らす農民たちにとっては鉄器が生活必需品であったはずである。道法寺遺跡で集落が形成される8・9世紀段階では、鉄器の生産・流通は国衙の指導の下、郡衙・郡領層が関与する部分が大きかったと推定される。このような前提が許されるならば、手取扇状地扇央部の開発もその必須の利器ともいえる鉄器を掌握していたであろう郡領層の意思を抜きにしては語れないだろう。ところで、当時の北加賀、越前国加賀郡においては、郡司として道君一族が勢力を誇り、761（天平宝字5）年に少領・道勝石が六万束にも及ぶ私出挙を摘発されるなど勧農機能面でも看過できぬ影響力を有していた。加えてそれを遡ること約1世紀、7世紀後半の飛鳥Ⅲ期に突如として手取扇状地扇央に道君一族の氏寺とも推定される野々市町・末松廃寺が創建されたことを想起すれば、ますますこの地域の古代前半期の開発史は郡領層の動向抜きには語れぬことが理解されよう。これは同じ越前国内の南都大寺院領荘園の開発にも共通する観点といえる。なお、扇状地の開発については畿内に近く渡来系氏族も多く居住した近江（北陸道はその湖西を経由）が先進地であったと思われるが、最近は土器のうえからも近江方面との関連するを示唆する見解がありきわめて興味深い。

最後となったが、小稿を記すにあったては本書執筆者はもとより栃木英道・北野博司・久田正弘の各氏よりご教示を得ている。

(1) 作業風景

(2) 調査区全景（北から）

(3) 9 区付近（北から）

図版 2

(4) ピット12・13

(5) 土坑04（北から）

(6) 調査区南端部

知気寺八反田遺跡発掘報告

1　調査の概要

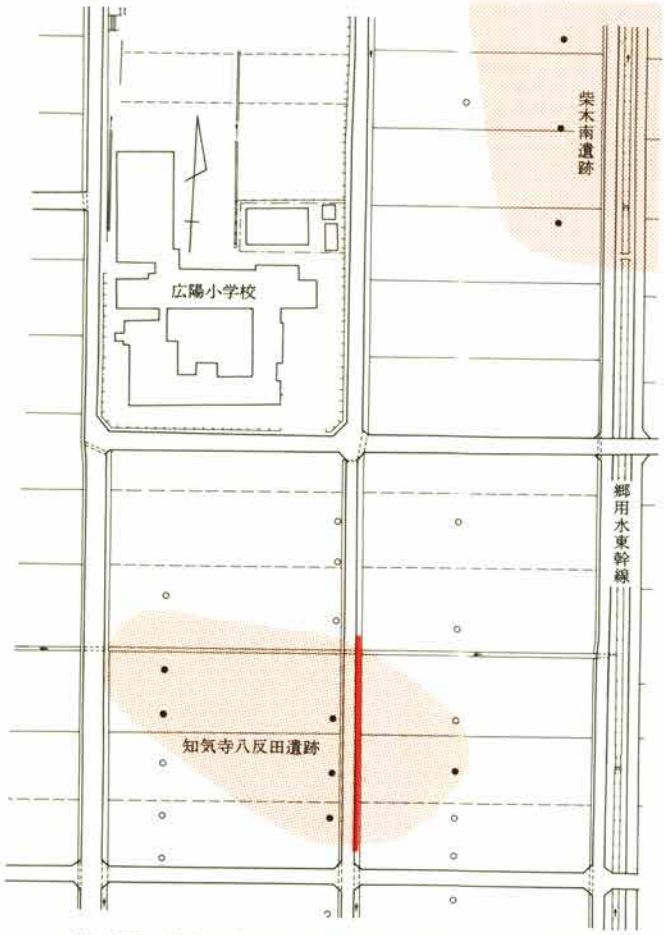
知気寺八反田遺跡は石川県石川郡鶴来町知気寺町地内に所在する。当地は扇径15km、展開度150°の手取川大扇状地の扇頂部から約4kmの扇央東部にあたり、標高約58mを計る。遺跡の東方には手取川扇状地の灌漑目的で近世に掘削された七ヶ用水の一つ、郷用水東幹線が北流している。当地周辺は古代以降石川郡に属し条里制の施行された区域とされるが、圃場整備の進んだ現在ではその影を見ることはできない。

本遺跡の発掘調査は1990年（平成2）度県営圃場整備事業鶴来地区知気寺工区の施工に伴う事前調査として実施したものである。

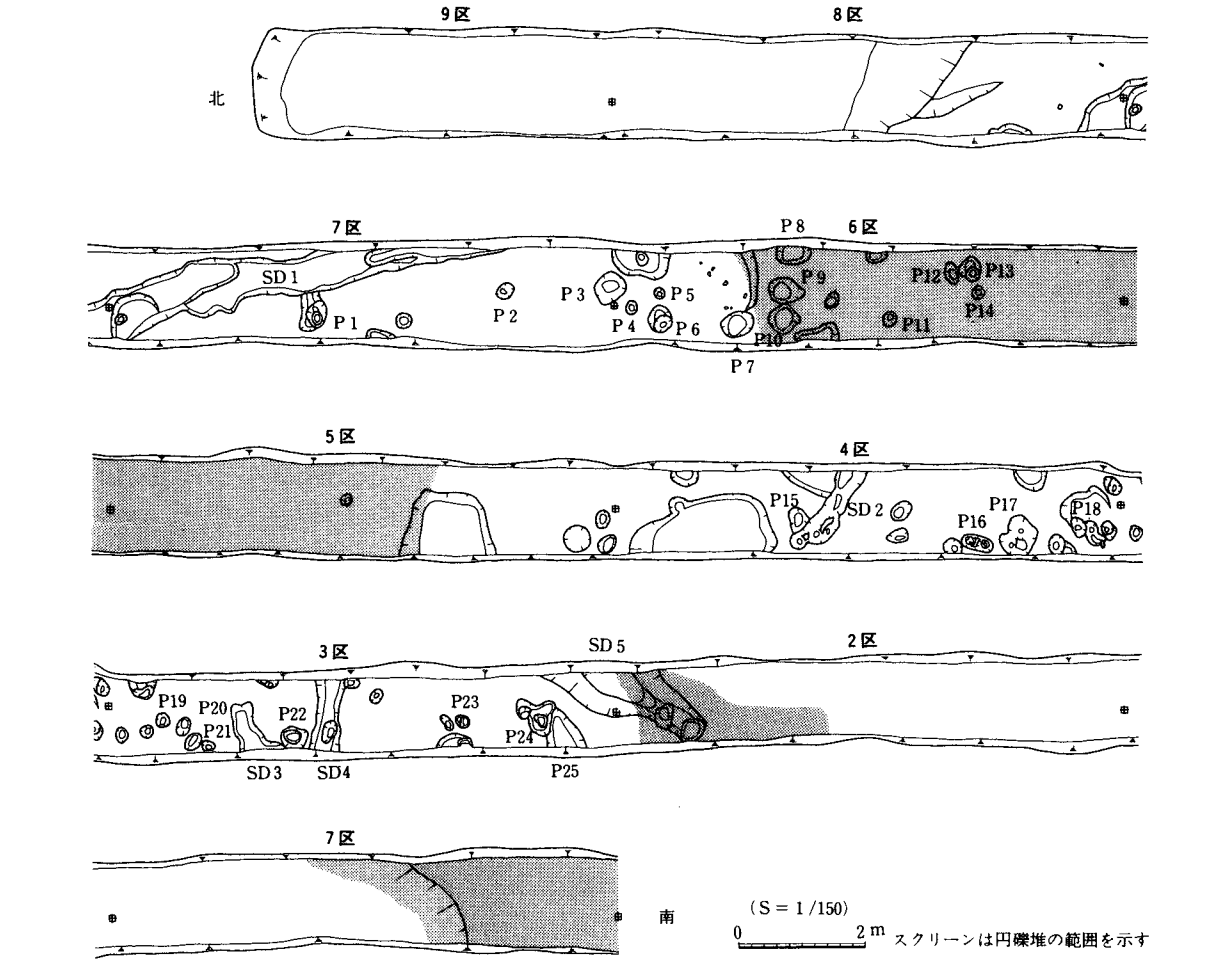
調査に至る経緯は次のとおり。1988年(昭和63) 8月、農林水産部耕地整備課宛に次年度施工予定の事業照会。同年9月、耕地整備課より施工予定地区の埋蔵文化財分布調査の依頼。同年9月～1989年（平成元）1月、重機による試掘調査および踏査による地表面観察により分布調査実施。知気寺工区内では本遺跡を含め4地点で埋蔵文化財包蔵地を確認（知気寺遺跡、知気寺八反田遺跡、柴木南遺跡、井口B遺跡)。同年1月、分布調査結果の回答。協議の結果、埋蔵文化財が確認された区域では遺物包含層上に保護層を確保して施工し、工事による埋蔵文化財への影響が及ばない設計、施工法とする事で基本的な了解を得た。ただし知気寺八反田遺跡については埋蔵文化財分布区域内に予定している排水路の設置地点変更が困難である旨の回答を得たため、当該区域について事前調査を実施する運びとなった。

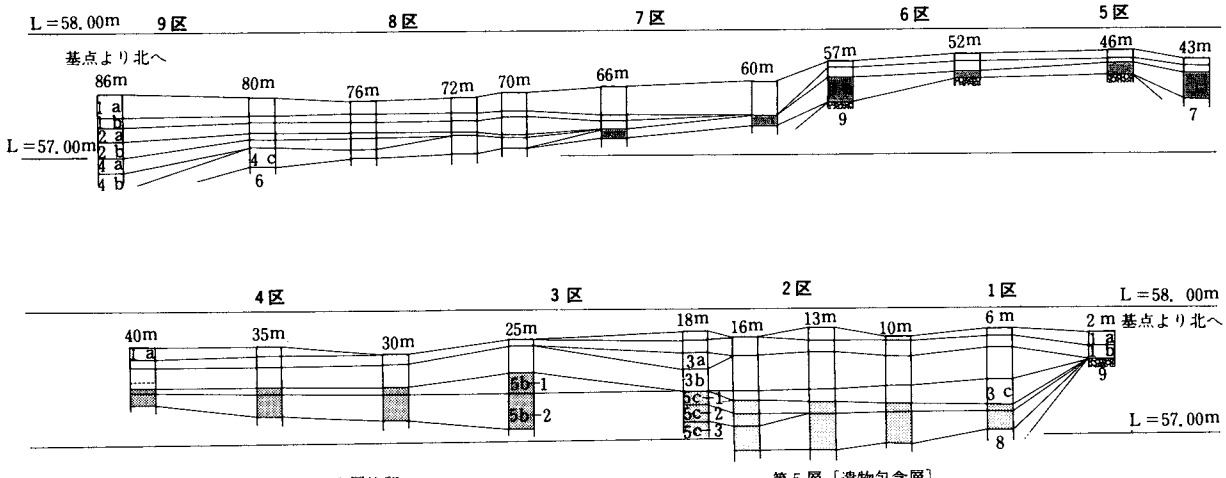
発掘調査は1990年（平成2）10月22日～11月15日にかけて、排水路施工に伴う掘削幅2m、延長約100mを対象に実施した。調査区はトレンチの南端から10mごとに1区から9区までの地区割を設定し調査の基準としている。現地調査は埋蔵文化財センター調査第一課主事垣内光次郎、同冨田和気夫が担当した。

調査の結果、10世紀代を中心とする時期の溝、ピット等の遺構、須恵器、土師器、製塩土器、鉄滓などの遺物を検出した。当遺跡は古代の開発の進行拡大に伴い手取川扇央部へ向けて進出した古代農村集落の一つであったと考えられる。



第1図　遺跡の広がりと調査区の位置（S＝1/3000）
（丸印は分布調査時の試掘坑。黒丸は埋文確認、白丸は埋文未確認。）





土層注記
第1層「現水田耕作土」
　1a層　青灰色シルト（耕土）
　1b層　黄褐色シルト「床土）
第2層［旧水田耕作土］
　2a層　灰色シルト（旧耕土）
　2b層　黄灰色シルト（旧床土）

第5層［遺物包含層］
　5a層　黒褐色土（遺物多）
　5b—1層　暗灰褐色粘質土（遺物少）
　5b—2層　黒褐色粘質土（細片化した遺物多）
　5c—1層　淡灰色粘質土（遺物少）
　5c—2層　暗灰色粘質土（遺物少）
　5c—3層　黒灰色粘質土（遺物少）
第6層［自然層］茶褐色砂質土
第7層［自然層］暗褐色土（灰色粘土を斑点状に混入）
第8層［自然層］淡黄灰色粘質土
第9層［自然層］円礫堆

第2図　調査区全体図（S＝1/150）および土層柱状図

2　検出遺構

調査区内の微地形は、南北の鞍部と中央部および南端部の微高地からなる（第２図）。基盤面の標高は調査区北端の鞍部で56.8m、中央部の５区から６区の微高地最高所で57.6m、南方の鞍部２区で56.9m、南端で57.6m と再び上昇しており、およそ比高１m 弱の起伏をもつ微高地と鞍部が交互に現われている。

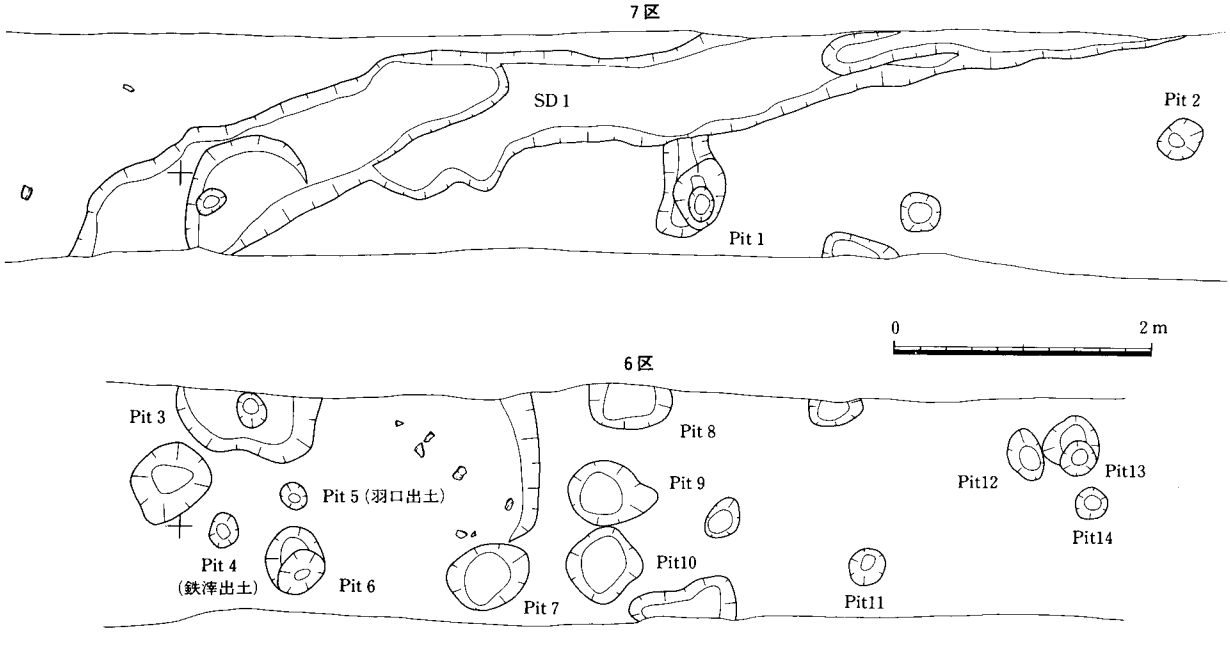
土層は基本的に９層に大別できる。このうち自然層は第６層～第９層で、微高地では手取川扇状地の円礫堆積層（第９層）が顔を出し、鞍部では砂質土ないし粘質土系の土壌が基盤層となっている。遺物包含層は第５層で調査区の北端（８、９区）や南端を除くすべての地点で確認した。最も遺物包含量の多い５a 層は５区～７区の微高地とその北側緩斜面に分布し、遺物包含量がやや減少する５b、５c 層は４区～１区、微高地の南側緩斜面から鞍部にかけて広がりを見せる。

検出した遺構の分布も遺物包含層の広がりと概ね対応し、３区～７区すなわち微高地上と鞍部へ移行する南北の緩斜面上に分布してる。

遺構はピットと溝が大半をしめ、中には建物の柱穴や建物に付随する溝が含まれる可能性があるが、柱痕を残すピットはなく、幅２m のトレンチという調査区の制約もあって個々の遺構の性格や遺構相互の関係は不明な点も多い。以下、調査区割りとは逆順になるが、調査区の北側から順に遺物の出土を見た主要遺構について解説する。

７区　微高地の北側緩斜面にあたる７区では溝の SD１とピット若干を検出した。溝 SD１は検出長８m、幅80cm前後、深さ10～20cmを計り、10世紀前半の須恵器や土師器の小片が出土。これ以北は鞍部となって遺構の存在が認められず、SD１は集落の北辺を走る溝と言える。ピット１は径50cm、深さ30cm、土師器小片出土（第５図５）。ピット２は径34cm、深さ37cm、内黒を含む土師器小片出土。

６区　微高地から北側緩斜面への移行部にあたる６区北半には比較的密に分布するピット群がある。規模は径20～60cm、深さは20cm以下のものと20cm以上のもの（P４＝27cm、P６＝36cm、P11＝28cm）がある。各ピットともに土師器や須恵器の小片が出土しており、加えてピット４では鉄滓４点（第５図６、７）が、ピット５で羽口の小片が出土した。明確な鍛冶関係の遺構は検出していないが、調査区外に同様の遺構が存在する可能性があ

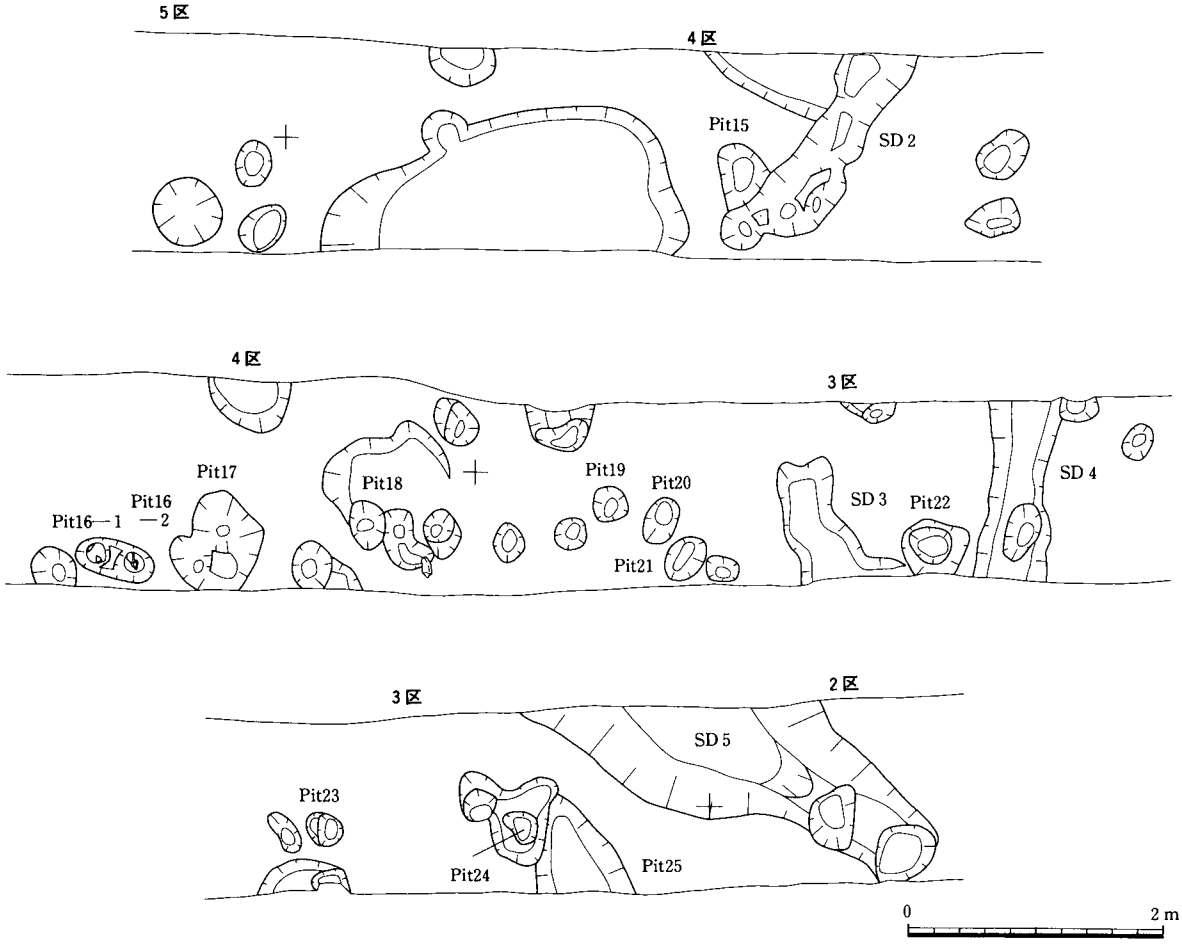


第３図　６、７区遺構実測図（S＝１/60）

ろう。その他、ピット6では平瓶片（第5図8）、ピット10では土師器片（第5図10）が出土した。

5区　5区は微高地最高所から南側緩斜面への移行部にあたるが、遺構分布は希薄である。遺物包含層は残存しているから後世の削平の結果とは考えにくく、本来の遺構分布を反映したものであろう。

4区～2区　南側緩斜面にあたる4区～2区は、6区同様にピットや溝が比較的密に分布する区域である。溝は4区のSD2、3区のSD3とSD4が幅50cm前後、深さ10cm前後、2・3区の境界付近に位置するSD5が幅60～150cm、深さ25cm前後。SD5は遺跡の南縁を走る溝で、これ以南は鞍部となって遺構の分布を見ない。遺物は土師器小片の他、SD3から須恵器壺片（第5図1）、SD5から須恵器甕片（同図2）、土師器椀片（同図3）、鉢片（同図4）が出土。ピットについては、深さ20cm以上のものが7箇所（P16＝33～36cm、P17＝38cm、P18＝27cm、P20＝34cm、P21＝27cm、P22＝33cm、P24＝29cm）あるが、柱穴となるピットを峻別することは難しい。ピット16は掘り込み形状から柱穴と判断できるもので、30×62cmの楕円形の掘り込み内に径25cm前後の小ピットが並列し、P16－1から土師器椀（同図14）と鉄滓1点が、P16－2から土師器椀3個体（第5図13～15）と製塩土器片（同図12）が重なりあって横転した状態で出土した。またピット18から土師器椀（第5図17）、ピット24から土師器椀と羽口（第5図19、20）が出土している。



第4図　2～5区遺構実測図（S＝1/60）

3　出土遺物

遺構出土遺物（第５図）

前述のように遺構から出土した遺物量は少ないが、P16－２からは少量ながら一括埋置された遺物の出土があった。土師器は口径16.2cmの中型深身の椀（13）と、口径11.2cm、底径4.7cm、器高3.6cm（15）と、口径9.9cm、底径3.6cm、器高3.1cm（16）の小型無台椀がある。これらは10世紀後半に属するものであろう。これと製塩土器と推測される土器片（12）が共伴している。

包含層出土遺物（第６、７図）

包含層の出土遺物は調査区の北半部と南半部で様相が異なっていた。それぞれの様相は各部での遺構群の時期を反映するものであろう。

北半部から出土した遺物は須恵器の比率が高く、概ね９世紀後半から10世紀初め頃の土器群が中心となる。

第６図21の坏蓋は口径16.2cm、器高2.6cm、つまみを省略したタイプである。有台坏には底径９～10cmの中型品と底径７cm前後の小型品がある。無台坏28は口径12.0cm、器高2.7cm、体部が開く特徴をもつ。瓶類では長頸瓶（30、31）、双耳瓶（32）の破片が出土している。双耳瓶は把手部の形態から９世紀後半のものであろう。

土師器は椀類や鍋の破片が少量出土している。

また、土師器甕小片に一端を錆着している鉄器（37）は、Ｘ線撮影を実施していないため機種の判別がつかないが、刀子の可能性を推定しておきたい。

包含層南半部の出土遺物は土師器が主体となる。（第７図）

少量ながら出土した須恵器には有台坏（37）、双耳瓶（38）、甕（40、41）などがある。

土師器は有台の椀が中心である。

内黒の椀（42～45）は、いずれも高台が低く小さいタイプで、９世紀末から10世紀初め頃に位置づけられる。

内面黒色処理を施さない有台椀は、高台の形状にバラエティーがある。

47、48は高台が低く肉薄なもので、口径12cm前後、底径6.2cm前後。器高は47が4.4cm、48は3.8cm。

49～52は高台が低く、肉厚のもので、底径５.4cm前後のものと6.2cm前後のものがある。

53は高台が高く、肉厚で、外側に傾斜した形状を呈する。底径7.2cm。

54は高台が高く、肉薄で、直立気味の形状をもつ。底径５.8cm。

55～57は高台が更に高く、肉厚で、直立気味の形状を示す。底径7.５～8.0cm前後。

これらの有台椀は概ね10世紀後半に属するものと思われる。

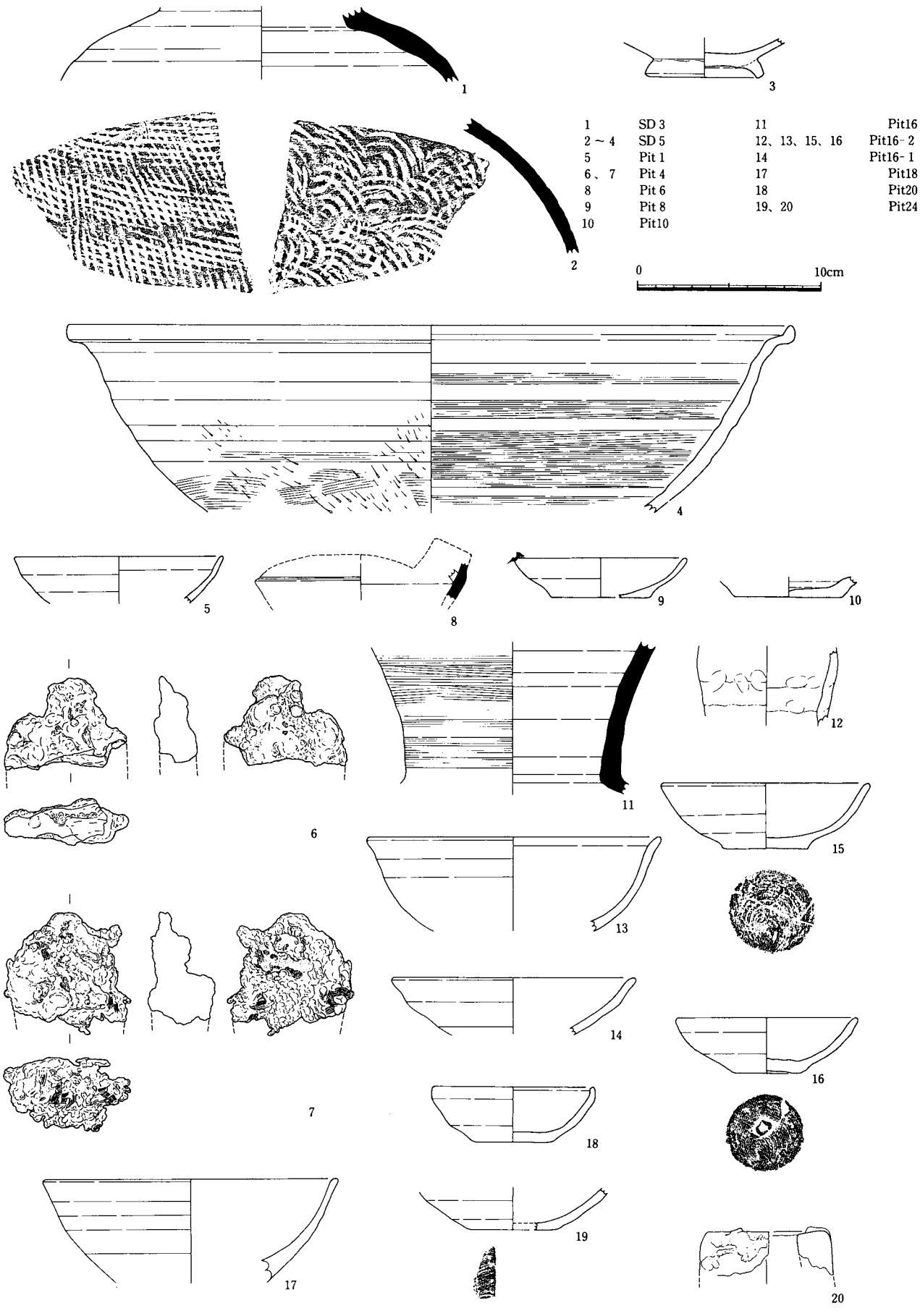
この他、砥石（63）と羽口（64）が出土している。砥石は粘板岩を使用した棒状のもので、刃先研ぎ出し時の溝や擦痕を四面に残している。携帯用に使用された砥石であろう。

調査区周辺採集遺物（第８図）

調査区周辺の踏査で表面採集した遺物を簡単に紹介しておく。

69、75～78は当遺跡と知気寺集落の中間部分で採集したものである。69は須恵器双耳瓶、75は青磁、76は加賀焼の擂鉢、77、78は偏平な大形円礫の端部を打ち欠いたもので、打製石斧の製作にかかる石核であろう。

その他は知気寺八反田遺跡の北東約500mに所在する柴木南（柴木Ｄ）遺跡で採集した。地元住民によると、当地は通称テラダと称される地区で、1955年の耕地整理中に発見された陶硯は当遺跡に帰属するものである。



1	SD 3	11	Pit16
2 ～ 4	SD 5	12、13、15、16	Pit16- 2
5	Pit 1	14	Pit16- 1
6 、 7	Pit 4	17	Pit18
8	Pit 6	18	Pit20
9	Pit 8	19、20	Pit24
10	Pit10		

第５図　遺構出土遺物（S＝１／３）

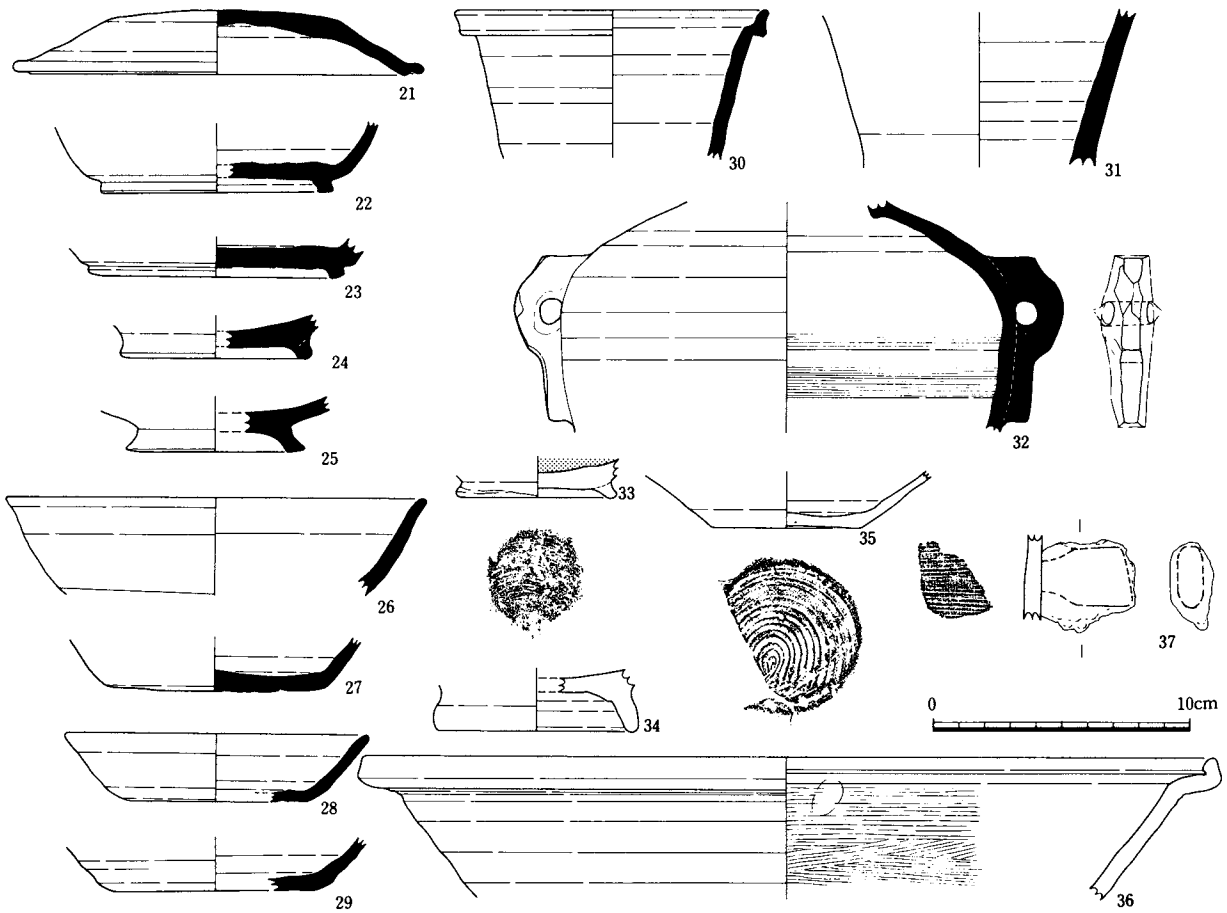
参考文献

浅香年木　「古代における手取扇状地の開発」『古代地域史の研究』法政大学出版局　1978年

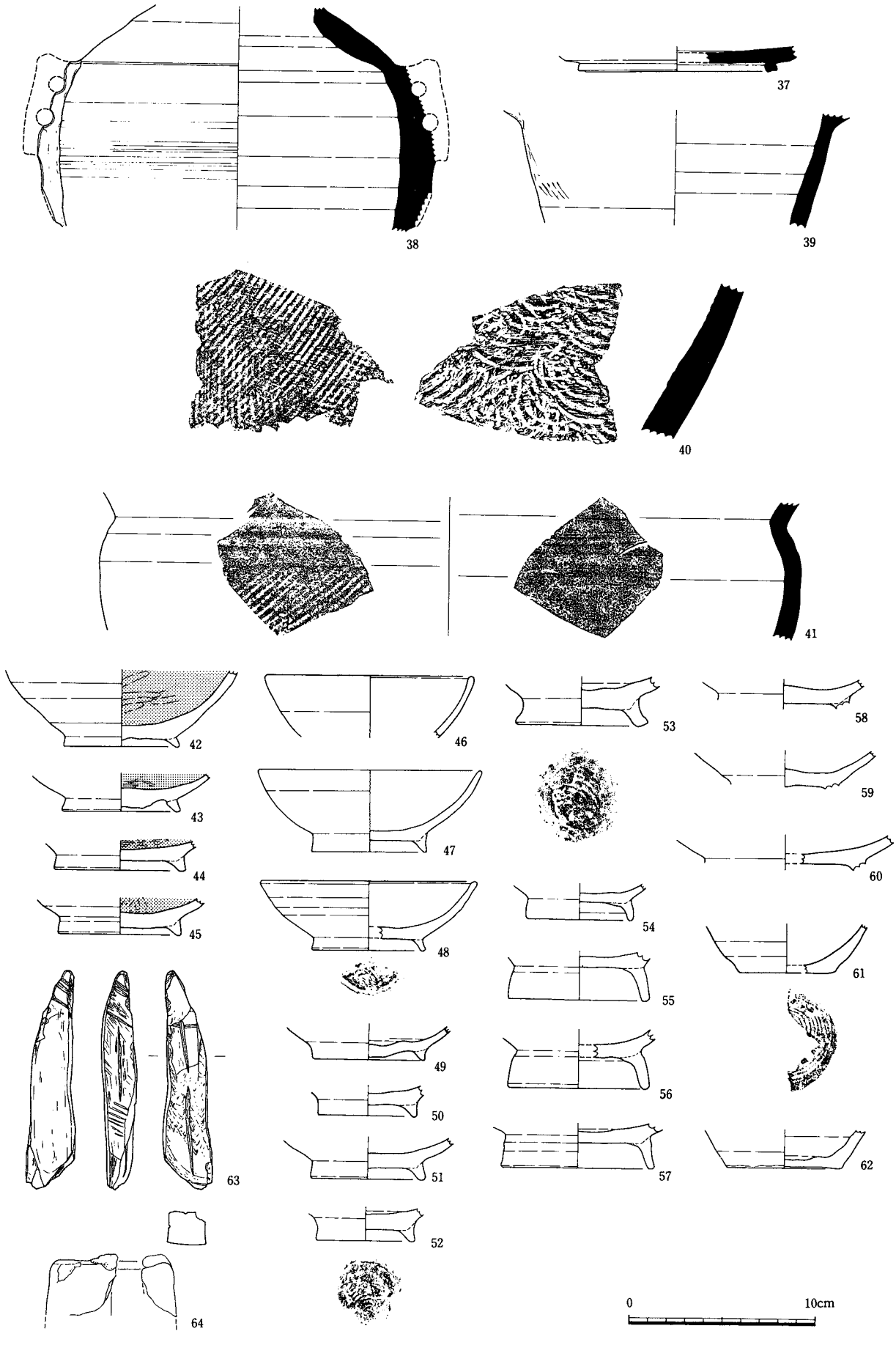
清水庄吉　「石川県鶴来町知気寺出土の陶硯」『石川考古学研究会々誌』第12号　1969年

宮本直哉　「位置と環境」『粟田遺跡発掘調査報告書』社団法人石川県埋蔵文化財保存協会　1991年

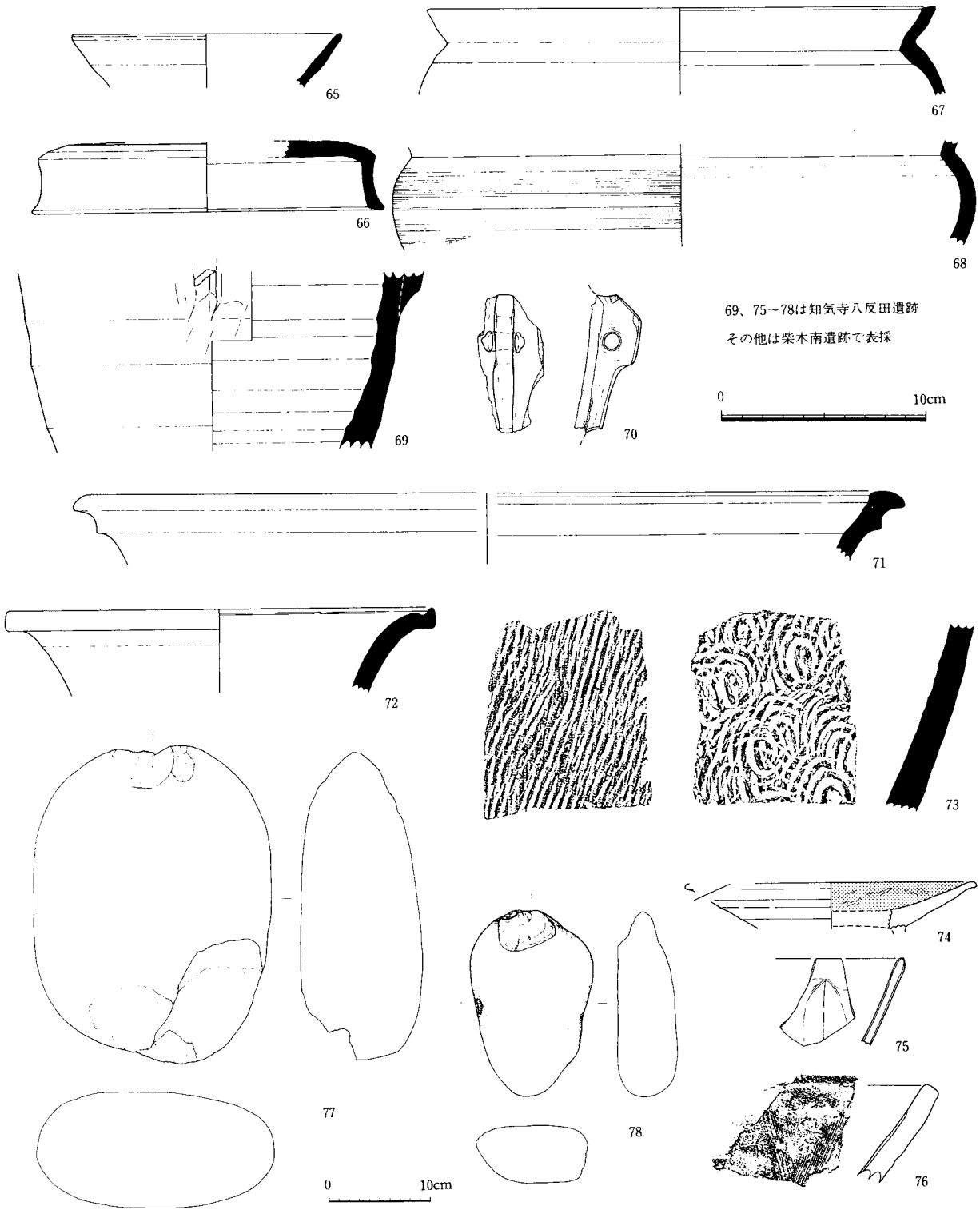
石川考古学研究会・北陸古代土器研究会　『北陸の古代土器研究の現状と課題』1988年



第６図　調査区北半部包含層出土遺物（S＝１／３）



第７図　調査区南半部包含層出地遺物（S＝１／３）



第８図　調査区周辺採集遺物（土器Ｓ＝１／３、石Ｓ＝１／６）

調査区北半部全景

調査区南半部全景

2 ～ 3 区

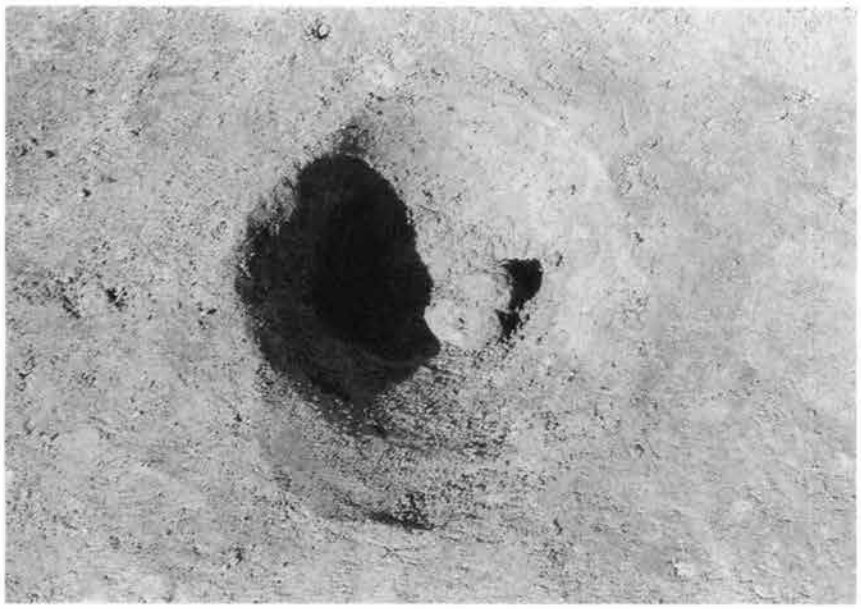
図版 2

4 区
SD 2， P 15～18

7 区
P 1 ～ P 10

7 区
SD01， P 1

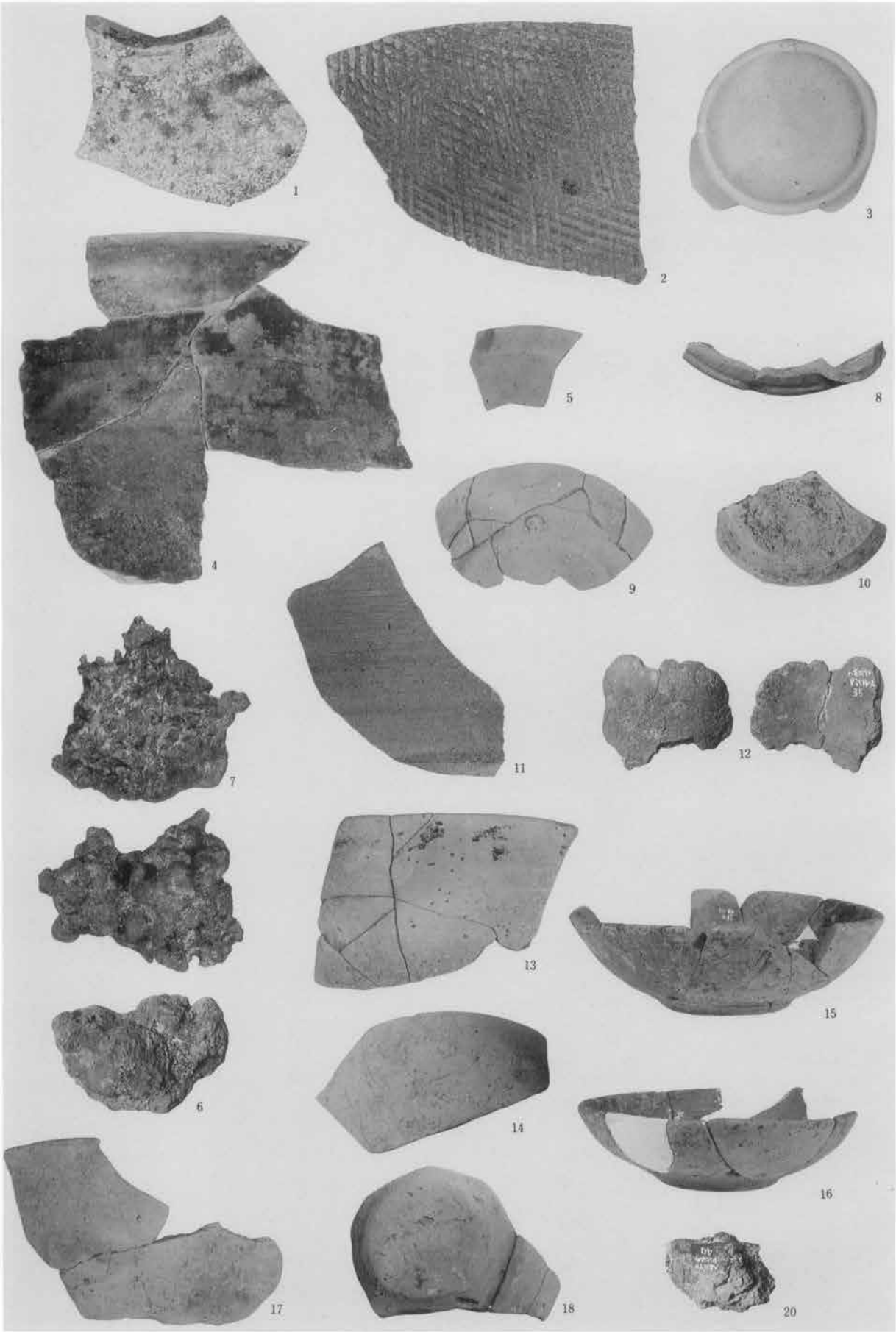
4 区・P16
遺物出土状況



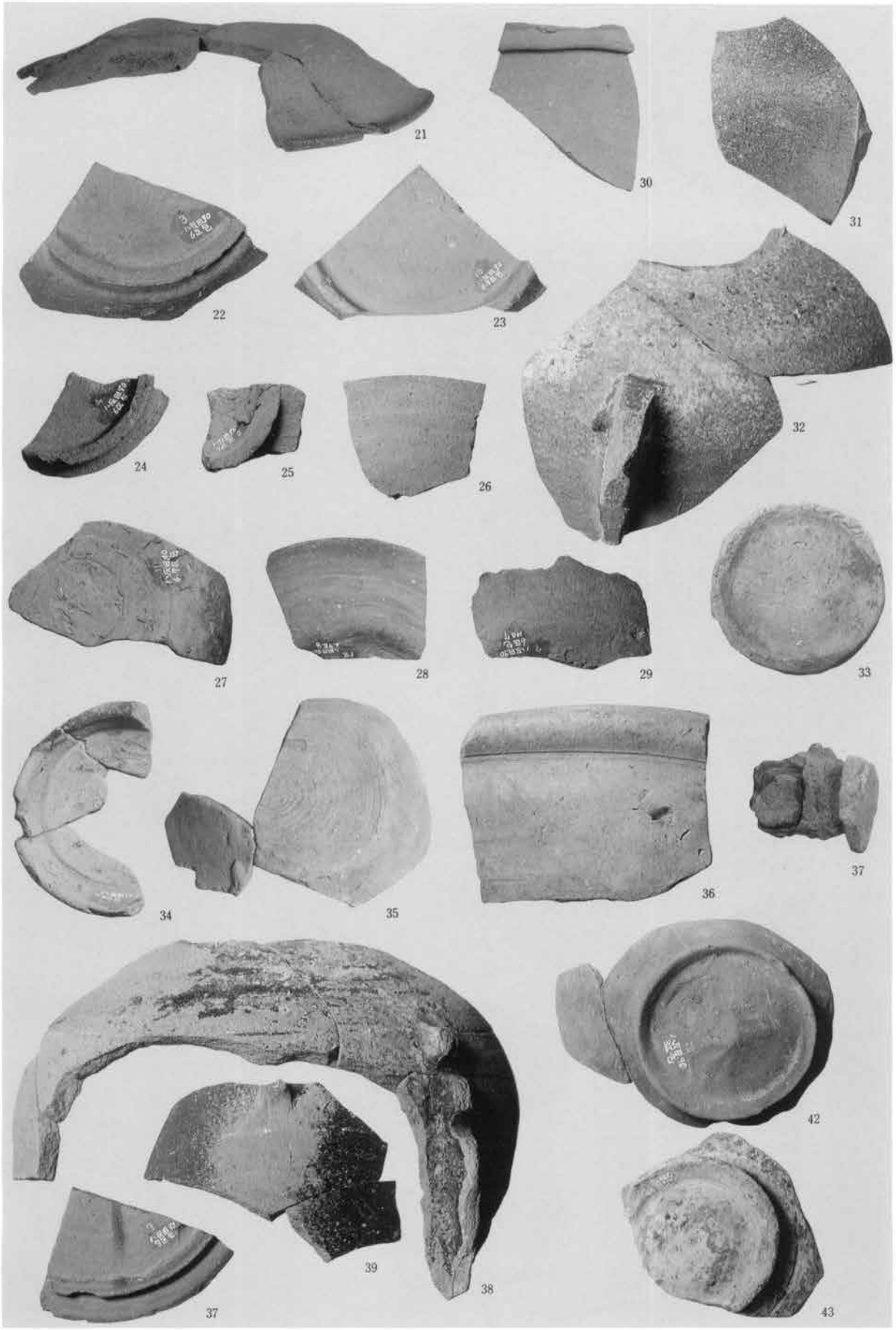
6 区・P 4
鉄滓出土状況

発掘調査風景

図版 4

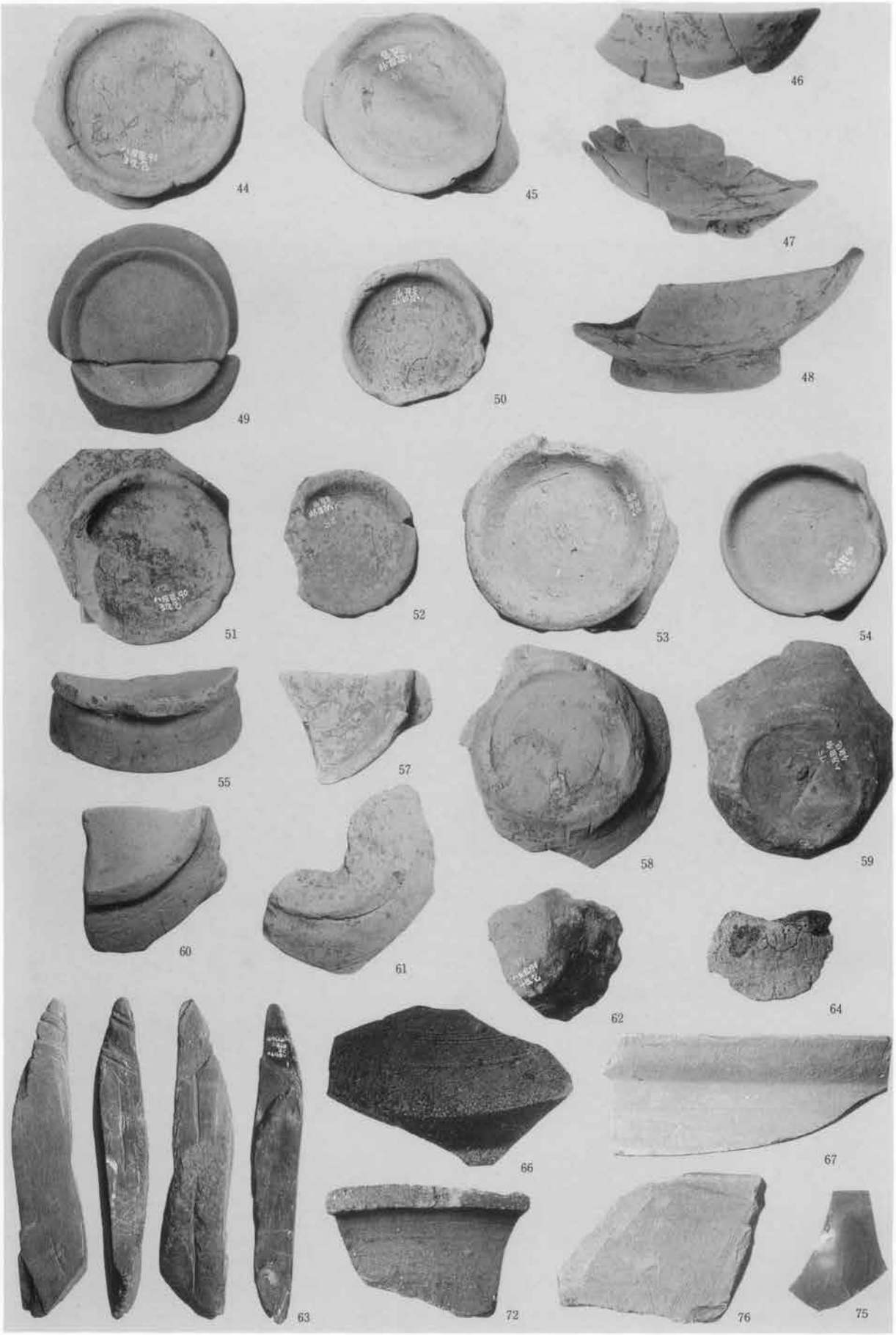


遺構出土遺物



包含層出土遺物

図版 6



包含層および調査区周辺採集遺物

報告書抄録

ふりがな	つるぎほくぶいせきちょうさほうこくⅠ
書名	鶴来北部遺跡調査報告Ⅰ
副書名	県営圃場整備事業鶴来地区に係る埋蔵文化財発掘報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小嶋芳孝・松山和彦・冨田和気夫
編集機関	石川県立埋蔵文化財センター
所在地	〒921　石川県金沢市米泉4丁目133番地　TEL.0762-43-7692
発行年月日	西暦1995年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
荒屋(あらや)遺跡	石川県石川(いしかわ)郡 鶴来(つるぎ)町荒屋(まちあらや)地内	17343	15021	36度28分40秒	136度36分45秒	19850422～19850531	500	圃場整備整備事業
道法寺南遺跡(どうほうじみなみ)	石川県石川(いしかわ)郡 鶴来(つるぎ)町道法寺(まちどうほうじ)	17343	15020	36度28分30秒	136度36分50秒	19880517～19880621	150	同上
道法寺(どうほうじ)遺跡	石川県石川(いしかわ)郡 鶴来(つるぎ)町道法寺(まちどうほうじ)	17343	15018	36度29分00秒	136度36分50秒	19901008～19901025	100	同上
知気寺(ちきじ)八反田(はったんだ)遺跡	石川県石川(いしかわ)郡 鶴来(つるぎ)町知気寺(まちちきじ)	17343	15025	36度28分50秒	136度36分40秒	19901022～19901115	200	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒屋遺跡	集落遺跡	弥生後期・平安中期	小穴6個 溝9条 土坑5基 竪穴建物1基 掘立柱建物2基	弥生土器、土師器 鉄器	竪穴建物は弥生後期で、縮小改築されている。
道法寺南遺跡	集落遺跡	平安前期	掘立柱建物2基 柱穴15個 土坑?1基	須恵器・土師器 「日佐」墨書土器	「日佐」墨書土器を埋納した祭祀土坑（SX01）。

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主　な　遺　物	特　記　事　項
道法寺遺跡	集落遺跡	平安前期	小穴30個 溝2条 土坑6基	縄文土器・須恵器 土師器・灰釉陶器	柱穴と思われる小穴が見られるが、建物は不明。平安時代の炭化米塊が出土。
知気寺八反田遺跡	集落遺跡	平安中期	小穴多数 溝5条	須恵器・土師器 鉄滓・砥石	柱穴と思われる小穴が見られるが、建物は不明。小穴から鉄滓が出土。

鶴来北部遺跡群調査報告Ⅰ

県営圃場整備鶴来地区埋蔵文化財発掘報告
発　行　1995年3月
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
印刷所　橋本確文堂